

会報  
特攻  
平成18年8月

第68号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090  
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一  
発行人 栗原宏

毎年七月十三日から十六日の間行わ

れるみたま祭は、昭和二十一年お盆に  
ちなみ長野県の遺族会が、靖國神社に  
盆踊りなどを奉納したのをきっかけに、  
翌二十二年から神社の行事としてとり  
あげられるようになった。

昔は盆には先祖の灵魂がお帰りにな  
るとて、十三日には迎え火を、十六日  
には送り火を、家の前で焚いたものだっ  
た。祖先崇拜のこの麗しい行事も、今  
の都会では出来なくなってしまうが、  
祖先に対する思いも薄れてゆくのは憂  
うべきことである。

迎え火については、レイテで戦死し  
た挺進第三聯隊のある人の遺族の日記  
を思いだした。

子を負いて遺骨受領に行きし日も  
今日の如く暑き日なりき  
乗つて来るかと吾子は問うなり  
迎え火をたけばとと様飛行機に

まことに胸迫る思いがする。靖國神社  
のみたま祭は所謂祭であって、迎え火  
の実感は生じない。

しかし大小の提灯を出した人の心持  
ちと、懸け雪洞にしたためた文字  
には、英霊を思う心が滲んでいる。

納涼をかねて大勢の人出であるが、  
相変わらず新聞にもテレビにも出ない  
ので、出向いた人以外は認識していな  
いのが、靖國問題の根底にある。

目次

靖國神社みたま祭	1
人間魚雷回天	5
第八飛行師団参謀の手記	18
高千穂部隊出陣回想	27
陸軍落下傘部隊創設から作戦参加まで	29
義烈空挺隊碑前祭	32
沖縄地上戦闘の終焉と航空特攻	35
殉国沖縄学徒顕彰六十一年祭	42
知覽特攻慰霊祭	44
岡部少尉遺稿出撃魂	46
伊豆山興重観音例祭記	48
世田谷観音寺文化財紹介	49
小泉総理八月十五日靖國神社参拝の公約	52
戦没特攻隊員遺族の歌	56
空挺部隊靖國御祭神の慰霊祭	58
銘石を靖國神社に献納	58
皇后陛下の御歌	59
全員の会員	59
図書紹介	59
事務局より	60
靖國神社よりお知らせ	60

# 靖國神社みたま祭の雪洞に見る 特攻隊員の遺詠

献納者 金 文男



詠者長沢徳治少尉（出撃時）は第67振武隊、石川県出身、金沢高工卒、幹候9期、20年4月28日知覧発進、沖縄西方洋上散華。

第67振武隊は20年3月29日明野で編成、何日に知覧に進出したか知らないが、明野で或いは知覧で咲きほこる桜、そして散りゆく桜を見たであろう、我が身はあの花の如く散りゆくが、来年も、再来年も桜は永遠に大和島根に咲

き誇るであろう。祖国の無窮を桜に託している。  
この歌は平成百人一首に取り上げられている。

献納者 山崎重武



第二挺進団がレイテ空挺作戦を行ったとき、挺進第三聯隊は南サンフェルナンドの精糖工場を宿舎としていた。19年12月6日第一次挺進部隊が宿舎を出た後、宿舎の壁にこの歌が書き残されていた。

この部隊はその日の夕刻レイテ島に降下した。さらに夜半第二次挺進部隊を注ぎ込む計画だったが、天候が悪化

し降下できず。翌日我が後方要衝オルモックの南イビルに敵一個師団が上陸して来たので、この空挺作戦は取り止めとなった。第一次挺進部隊に一人の生還者もない。

第二次挺進部隊に入っていた毛利義治という衛生兵がいた。この人はルソン島で戦い生還したが、宿舎の壁に書き残されていた歌を手帳に書き留めてあって、戦後帰還してから私に告げた。既に故人となったが、そのようなことでこの歌が世に伝えられることになった。

我々落下傘部隊の基地は宮崎県児湯郡川南村にあったが、現在川南護国神社の裏庭に落下傘部隊発祥之地の碑があるが、碑を建てるときこの歌を土台石に刻んだので、我々亡き時代にも永遠に伝えることになる。



土台のところに右の歌が刻んである



# 靖國神社みたま祭雪洞献納

騎兵十四聯隊会では二人の篤志家が、毎年雪洞を献納している。本年は万葉集に出ている歌を書いて出

した。  
下の歌は大伴の家持の長歌の中の一部であって、「海ゆかば水漬くかばね 山ゆかば草蒸すかばね 大君のへにこそ死なめかへりみはせじ」と謳いなれ

ている。  
ちよろずのの歌は官吏任命の記録とある。  
今日よりはの歌は十人の長である某防人の作。

## 献歌

(ちよろず)

(今日より)

千万の軍なりとも言奉らず

取りて来ぬき男を念ふ

今日よりは顧みなくて大君の

醜(し)の御楯と出で立吾は

海行者美都久屍

山行者草牟須屍

大皇乃

蔽尔許曾死米

可蔽里貝波勢白

海行かば...

万葉集卷八

大伴宿禰家持

騎兵第十四聯隊会

小林雅男謹書

騎兵第十四聯隊  
機動歩兵第三聯隊会

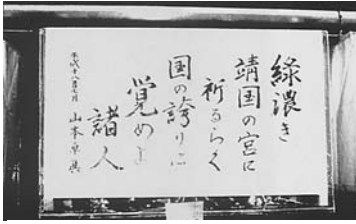
山中浩太郎

謹書

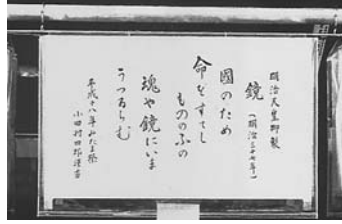


# 会員献納の雪洞 (前の頁に掲載したものの以外)

—これ以外にあれば編者の見落とし—



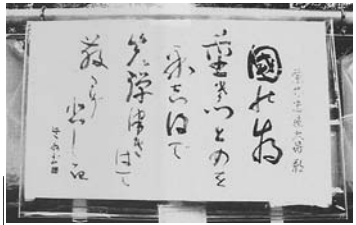
会長 山本卓真



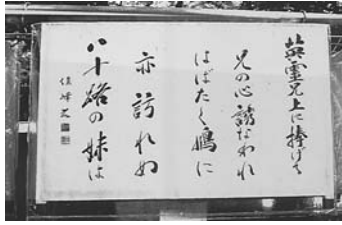
小田村四郎



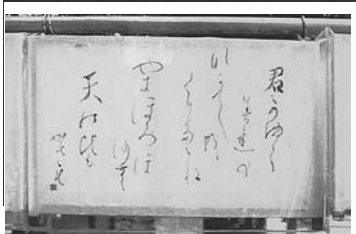
市川国雄 (戦艦大和)



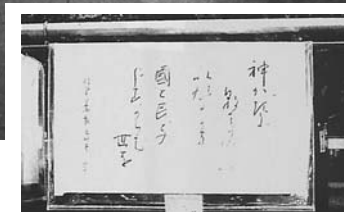
古井貞方



射手園繰子



小栗楓



桑原美智子

君がゆく道の  
 長路を練り畳ね  
 焼き亡ぼさむ  
 天の火もがも

編者註 万葉卷の十五ある歌  
 君のおいでになる路の長いのを、  
 練りよせたたんで、焼きほろぼす  
 ような、天の火があつたらなあ。

神がきに  
 朝まいりして  
 いのろかな  
 國と民との  
 やすからむ  
 世を

明治天皇御製  
 桑原美智子 つつしみかく

# 人間魚雷：回天

乙飛20期 吉田 正則

進させるものであり、搭乗員の大半が翼無き、予科練出身者と予備学生であった。

「本稿は、『海原会』発行『月刊 予科練』平成17年9月～18年3月号に連載されたものを、同会のご了承を得て転載するものである。」

## 主力は予科練・予備学生

「神風特別攻撃隊」がそうであったように、ここでも、その主力は予科練であり予備学生であった。

必死・必殺の特攻兵器といえは、やはり誰もが周知の通り『桜花』と、これから登場する『回天』が双璧であろう。

ちまたでの彼等は『消耗品』扱いにされたと評する者も、かなりいたようだが、若き戦士達は敢然として死地に赴いたのである。

前者は「人間爆弾」であり、後者は「人間魚雷」と称されていた。

「人間魚雷」『回天』の特攻兵器が正式に開発されることになったのは、前述した通り昭和19年4月である。し

から、文字通り必死であった。だが、爆弾も魚雷も命中しなければ必殺にはならない、むしろ、目標に到達する前に撃ち落とされたり、爆沈された例もかなりあったようだ。

「人間魚雷」『回天』の特攻兵器が正式に開発されることになったのは、前述した通り昭和19年4月である。しかし、その件に関する動きは18年初頭からあり、特に潜水艦乗組士官から提案されていた。結局、その提案は時期尚早と言う事で見送りになっていたのである。それが実現したのは勿論、戦

ところで、本題の水中特攻兵器『回天』は、昭和19年4月、軍令部が海軍省に提案した新兵器の一つであったのである。機密保持上「金物」と称し、人間魚雷『回天』は「06金物」といわれていた。

の青年士官の着想と熱意であった。その士官とは、黒木博司大尉（海機51期）と仁科閑夫中尉（海兵71期）である。昭和18年秋頃からこの2人のコンビは、自分の持つ全ての能力を傾注し「九三式魚雷」の改造による『人間魚雷』を考案し、海軍省へその採用を直訴した。だが、必死を前提としたこの兵器の採用は許可されなかったの

ある。しかし、諦めきれない黒木大尉は翌19年2月再び上京し、『人間魚雷』の採用を強硬に迫った。

この頃、当時の戦局は悪化の一途をたどっていた。2月17日トラック島が米機動部隊に襲われ、我軍は大損害を喫していた。その直後の2月26日呉海軍工廠の魚雷実験場で、ひそかに『人間魚雷』の試作が命じられていたのである。（金物）兵器の緊急実験指令が出される2ヶ月前のことである。

昭和19年7月末、ようやく2機の（06金物）の試作兵器が完成、航走試験が始められようとしていた。完成した（06金物）の航走テストに臨むのは、いうまでもなくかの熱烈な推進者である、黒木大尉と仁科中尉の両名である。

係留された運貨船の両舷に頭部を赤く塗った魚雷型の（06金物）が浮き、黒木大尉と仁科中尉が緊張の面持ちで待機している。まずは準備が完了し、黒木大尉が1号艇に乗り込み、操縦室に姿を消した。まもなく発進準備の合図が出される。係員が運貨船から身を乗り出し、ハンマーにてハッチを2度叩いた。

えてしまった。早速、2隻の高速艇がそれを追跡する。3分、4分と時間が過ぎていく。見守る関係者達にやや不安が漂い始めてきた。そうこうしているうちに5分を少々回った頃、前方の海面に赤いものが見えた。その瞬間、一斉に「浮いた」「やったぞ」の歓声

が上がる。全員祈るような（06金物）の航走試験が見事に成功したのだ。

次は、仁科中尉の番である。同中尉は、やがて左舷側の2号艇に搭乗し予定通り発進した。これも高速艇にて追跡することになってくるのだが、肝心の雷跡を見る事が出来ない。そのはず2号艇は酸素魚雷のためなのだ。この航走試験も1号艇同様に完全な成功を収めた。

航走試験が見事成功裡に終わった後、（06金物）の検討会が開かれた。必死、必殺の特攻兵器とあって多くの関係者が集まった。中央からは、軍令部、軍務局艦政本部、このほか、第6艦隊参謀、司令、潜水艦長、潜水学校教官、呉海軍工廠の関係官等のそうそうたるメンバーと、そして当然のことながら黒木大尉と仁科中尉の2人も含まれている。

（5） 『回天』とは、簡単にいえば当時日本が世界に誇る「九三式酸素魚雷」の機関に操縦席を付けて、潜水艦から発

（5） 『回天』とは、簡単にいえば当時日本が世界に誇る「九三式酸素魚雷」の機関に操縦席を付けて、潜水艦から発

（5） 『回天』とは、簡単にいえば当時日本が世界に誇る「九三式酸素魚雷」の機関に操縦席を付けて、潜水艦から発

（5） 『回天』とは、簡単にいえば当時日本が世界に誇る「九三式酸素魚雷」の機関に操縦席を付けて、潜水艦から発

点で、黒木大尉、仁科中尉の2人を除けば参加者の殆どは、初めて(06金物)の全容を知ったのである。

### (06金物)『回天』装備・その他全容

後部は(93式魚雷)の尾部そのままで直径61センチだが、その前方は1メートルに拡大されていた。全長14・75メートル、重量8・3トン、頭部に1・55トンのTNT炸薬が詰めこまれる。航続距離は、30ノットで23km、12ノットで70km、以上は当時の仕様であったが、その後徐々に改良されていった。

艇の中央部に操縦室があって非常に狭く、搭乗員が腰掛ける余裕もないくらいで、床に直接腰を下ろすことになる。操縦室中央に長さ1メートルの特眼鏡(一種の潜望鏡)がある。操縦室内には速力・深度調整把手や爆薬缶、そして各種計器が沢山装備されている。ただでさえ狭い操縦室なのに、搭乗員の窮屈さは想像に難くない、以上が(06金物)『回天』の全容である。

そこで(06金物)の航走試験に成功したことで、この兵器に正式な名称を付けようということになった。必死、必殺の特攻兵器に付けられたその名称は『回天』、天を引き回すと言う意味で衰えた勢いを回復させたい等の切実な願いが込められていたのである。

命名者は、海軍水雷学校長・大森仙太郎海軍少将で、黒木博司大尉の切なる希望を入れたとも言われている。

昭和19年7月末、試作兵器から正式兵器に採用された『回天』は呉海軍工廠で量産されることになった。同時に、訓練、戦備が第2特攻戦隊に委ねられることになったのだが、異常なほどの困難な訓練と教育に携わる直接の担当者選びに難行した。結局、8月5日「伊41潜」板倉光馬少佐に、白羽の矢がたてられた。

太平洋戦争開戦時「伊169潜」水雷長として、真珠湾攻撃に参加したのを始め、潜水艦の艦長として各作戦の任務を完遂した歴戦の勇士だった。終戦1年前の8月15日、板倉少佐は近藤文武少佐に、「伊41潜」の艦長を引き継ぎ、自らは直ちに基地に赴いた。

当時『回天』は、P基地で「蚊龍」(甲標的)と同居していた。しかし、教育訓練にはいろいろ問題があった。特に必死、必殺の兵器である『回天』の搭乗員と、「蚊龍」の搭乗員との間にはなにかしら、しっくりいかない空気が漂っていた。

このため板倉少佐は司令官である長井満少将に進言、山口県徳山湾口の大津島に『回天』の基地を設置することにした。この大津島には(93式魚雷)

の射場があり、徳山湾内に面した海岸に魚雷調整場があった。徳山市の南西10km程隔てた徳山湾の南西部に横たわり、南北に延びたこの島は完全に外部と隔離されていた。最高の軍事機密である『回天』の基地としては絶好の場所でもあった。

その後、光基地、平生基地、大神基地、八丈島基地等多くの基地が設置された。

これより少し前海軍省は『回天』搭乗員の募集を始めた。長崎県川棚魚雷艇訓練所をはじめ、三重海軍航空隊、奈良分遣隊及び土浦海軍航空隊の甲飛13期生に対し募集通知が出された。勿論、詳しい募集内容などあるはずもない、ただ、「特攻兵器」搭乗員の募集だけ、である。

なお、予備学生達にも同様の募集内容であった。それでも彼等は血気に燃えて志願を熱望し、やがて大津島基地へやってくるのだが、それまではP基地には海軍兵学校、海軍機関学校出身の若者や、「蚊龍」要員の下士官などが多かった。

昭和19年9月4日、板倉少佐は陸路大津島基地に出発した。翌5日『回天』の搭乗員が呉海軍工廠の実験部長・篠原大佐、同じく整備長・浜田大尉、以下整備員等と共に海上から大津島基地

へ乗り込んだ。この日の午後、直ちに『回天』の航走訓練が始められた。

### 航走訓練

航走訓練の第一回は、生みの親とも言うべき黒木大尉が一号艇に、二回目に盟友の仁科中尉が二号艇に搭乗し、約30分位ずつ徳山湾内を航走し、潜航浮上の基礎訓練を行った。この様にして猛訓練のスタートが切られたのだが、最大の障害は肝心の兵器不足であった。

この訓練開始時に使用可能数は僅か3機しかなかったのである。軍中央部の計画では8月中旬に100機製作することになっていた。机上のプランとはこれではないか、当初の計画通りにはいかなかったようである。板倉少佐、黒木大尉、仁科中尉らはこの予想外の障害に非常に困惑を感じてしまった。しかしながら、彼等はこの障害を猛訓練で乗り越え、一刻も早く実戦に即応できる態勢を整えるべきと考えていた。

ここに来て、『回天』操縦の経験者は、黒木大尉と仁科中尉の2人しかいない、そこで彼等に続く指導官を早急に養成しなければならぬのである。

早速、選ばれたのは、上別府宣紀大尉(海兵70期)と樋口孝大尉(海兵70期)の2人である。両大尉は1人ずつ『回天』に搭乗し、黒木大尉と仁科中尉の

指導を受けることになったのだが、思いもよらぬ不幸が待ち構えていたのであった。

昭和19年9月6日、運命の日が訪れた。当日は秋晴れだったものの、午後から風が強くなり白波が立ち始めていた。最初は、3号艇に上別府大尉が乗り、仁科中尉が同乗して訓練することになった。3号艇は湾外から発進、徳山湾口を通過して魚雷整備場の方に帰る訓練コースを航走して帰ってきた。帰ってきた仁科中尉に待機していた黒木大尉が「コースはどうだったか？」と状況を尋ねると、仁科中尉の曰く「湾外では波がかなり大きかったので潜航したところ、とっさに叩かれて13メートル迄突っ込んでしまい、冷汗をかいてしまった。今日は中止したほうがよいと思います」との答えだった。しかし、黒木大尉は即座に「仁科、この程度の波ぐらいでは中止は出来ぬ、敵は待つてはくれないぞ、俺たちの出撃が遅れば遅れるほど、戦局が悪化するのだ」と応じた。

日が傾くにつれ徳山湾の波浪はますます高くなってきた。指揮官の板倉少佐も危険と判断し、訓練の中止を命じた。しかし、この指揮官板倉少佐の中止命令にもかかわらず、当の黒木大尉は、「指揮官、是非私にやらせてくだ

さい、これくらいの波で『回天』が使えないようなら、実戦には役立ちませぬ」と食い下がる。

黒木大尉から同乗訓練を受ける樋口大尉も「お願いします、是非訓練に出して下さい」と黒木大尉に続いて哀願の熱烈な気迫に押されたかのように、中止命令を撤回し、2人の訓練を認めただし、徳山湾内に限っての訓練というような条件付きであった。

黒木大尉はわが意を得たように笑みを浮かべながら、仁科中尉に「心配するな、では行ってくる」と、声をかけると樋口大尉に続いて1号艇のハッチから艇内に潜り込んだ。やがて特眼鏡(潜望鏡)を持った巨大な魚雷は熱血漢の2人に乗せて白波をきりながら前進すると、見る見る内にその姿を海中に没した。早速、板倉少佐と仁科中尉がそれぞれに、指揮する2隻の高速艇がその後を追ったが、余りにも波が高くて思うに任せない。その後、浮上予定時刻を過ぎても2人に乗せた1号艇は依然としてその姿を見せることがなかった。或いは、湾外へ出てしまったのだろうか？、そうしているうちに時間が30分、40分と経ち、やがて1時間が過ぎてしまった。

これは誰が考えても完全に遭難の公

算が極めて大であった。直ちに大津島基地に連絡し、基地隊員のほか附近の漁船にも協力を求め、夜を徹しての捜索が行われた。しかし、残念ながら、肝心の1号艇を発見する事が出来なかった。

一夜明けた7日の朝は、前日の時化とは打って変わり非常に静かだった。午前10時捜索艇の一隻が訓練予定コースの中間付近で海底からの気泡を発見した。早速、潜水員が海中に潜り1号艇の姿を発見したのだ。即座に引き上げ作業に取り掛かる

このとき、既に浮上予定時刻から16時間が過ぎていた。最早、搭乗員生存の可能性は誠に薄い、と思いつつも、万に一つの奇跡を期待しながらハンマーで上部のハッチを叩き応答を求めたが、それに応える何らの反応もなかった。即、ハッチを開けてみたが、矢張り2人共物言わぬ人となっていた。

板倉少佐、仁科中尉の痛恨ぶりは、傍らで見ると誠に気の毒な程痛々しかった。ここに於いて『回天』生みの親でもある黒木大尉、そして『回天』隊に身を投じて僅かに3日目の樋口大尉、この2人の殉職は関係者全てに対して正に大きなショックを与えた。

この後、両大尉が苦しい息の下で死の直前まで、認められた遺書が発見さ

れた。その内容は、かつて、日本国民を感動させた佐久間艇長を髣髴させるものがあつた。佐久間海軍大尉が第6潜水艇の艇長るとき、阿多島と岩国港の中間付近で遭難したのは、明治43年4月14日。同潜水艇は潜航の際に故障を生じ、同14日午前10時頃沈没したのである。その時の搭乗員は粒選りの精兵14名だった。

その後、明らかになった佐久間艇長の遺言には、「小官ノ不注意ニヨリ陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス、誠ニ申シ訳ナシ、サレド艇員一同死ニ至ルマデ皆、良クソノ職ヲ守リ沈着ニ事ヲ処セリ(略)」に始まり、沈没の原因、その後の状況、部下の遺族に対する思い等を克明に記録、呼吸困難に陥りながら従容として最期を遂げられたのである。

昭和19年9月6日夕刻、徳山湾内で殉職した『回天』の生みの親、草分けとも言べき黒木博司大尉、そして運命を共にした樋口孝大尉の両名は、前述した佐久間艇長と同じ様に、悲壯極まる遺書をお互いの手帳に残していたのである。その一部を紹介しておこう。

まずは樋口大尉の文から：  
「19・9・6、17・40発動、ソノ後18・12沈座：指揮官ニ報告、予定ノ如ク航走中、18・12潜入時突如傾斜、P O W N 20度トナリ海底ニ沈座ス。ソノ

状況、推定原因、処置等ハ、同乗指揮官、黒木大尉ノ記セル通りナリ。事故ノ為訓練ニ支障ヲ来タシ詢ニ申訳ナキ次第ナリ、後輩諸君ニ告グー、犠牲ヲ踏ミ越エテ突進セヨ、大日本帝国ノタ

メニ：大日本帝国万歳三唱ス、戦友（黒木）ト共ニ、訓練中事故ヲ起コシタルハ、戦場ニ散ルベキ我々ノ最モ遺憾トスルトコロナリ。然レドモ、全テノ犠牲ヲ乗り越エテコソ発展アリ進歩ガアル。コイネガワクハ、我々ノ失敗セシ原因ヲ探求シテ帝国ヲ護ル最強ノコノ兵器ノ発展ノ基ヲ得ンコトヲ

(以下略)

次に、黒木大尉の遺書を記すが、さすがに『回天』の創始者らしく、事故前後の状況、及びそれに対する所見は、詳細を極め辞世まで認められていた。

「当日、徳山湾内ニテ樋口大尉ノ『回天』操縦訓練ニ同乗、17：40発進、針路、蛇島向首、18：00頃、180度、取舵、大津島（グリーン）ニ向ケテ帰途セシ。18：10頃ヨリ20ノットニテ潜航、調深5メートルニ対シ実深2メートル、前後傾斜D、2〜3度、時ニハ、D4〜5度トナリシコトアリ（略）約2分ヲ経過シ浮上ヲ命ゼントシテ、傾斜計ヨリ眼ヲ離シ、電動操舵機等、所要箇所ニ注目シツツアリシトキ、急激ニ傾斜大トナレルヲ感ゼルヲ以テ、直チニ

速力ヲ急低下セシモ、若干時ノ後、猶モ傾斜ノ戻ル気配モナシ（略）ステニ海底ニ突入セルコトヲ知り直チニ「エンジン」全テヲ停止ス。突入時サホドノ衝撃ナシ」

実に克明な記述だ。また、黒木大尉は応急処置、事後の経過に触れた後、10項目に亘って所見を述べている。その中に、

「ハッチ開口ヲ試ミシモ、ヨウトシテ開カズ、空気量不足ト思考セララルニヨリ、唯イマ19：55ヨリ睡眠ス」とあった。さらに追伸では、「国ヲ思イ、死ヌニ死ナレヌ益良雄ガ、共々呼ビツ、死ニテユクラン」の辞世が認められていた。「呼吸苦シク思考ヤヤ不明瞭、手足ヤヤシビレタリ。04：00、「ココニ死ヲ決ス、心身爽快ナリ、心ヨリ樋口大尉ト共ニ万歳ヲ三唱ス。06：00猶、2人トモ生存ス、相約シ、行ヲ共ニス、天皇陛下万歳」遺書はここで終わった。

黒木大尉の無念さがしみじみと思いやられてならない。大津島基地全体を沈痛な空気が包んだ。しかし、間もなく「黒木・樋口に続け」を合言葉に、日夜、猛訓練が再開されたのである。昭和19年9月中旬以降、大津島基地には『回天』の隻数がわずかず増え

ていった。土浦海軍航空隊出身の甲飛13期生や、

川棚魚雷艇訓練所から予科練出身の若者達（乙飛20期）100名程が大津島基地に移り（後で平生・大神・光の4基地に25名ずつ分散）訓練に入るなど、同地での訓練は飛躍的に増大した。このため整備長・浜口大尉を始めとして調整班の仕事は、目が回るほどに忙しかった。

## 編成

昭和19年10月に入ると『回天』を4機搭載するための工事を進めていた。第6艦隊の司令官三輪義重中将、前海軍省潜水部長が率いる、第15潜水隊の「伊36潜」「伊37潜」「伊47潜」の3潜水艦の準備が完了、いよいよ望んでいた『回天』の出撃可能な状態が近づいたのだ。

10月17日、アメリカ軍のレイテ湾スルアン島上陸に伴い、一号作戦が発動された。これに次いで我が連合艦隊が海軍としての機能を喪失させられる事になった。

比島沖海戦の敗北、そして第一師団の佐倉連隊（歩兵第57連隊）などのレイテ上陸と続く。これらは、何れも日米主力の激突で国運を掛けた一戦だった。というより、日本にとっては、まさにラストチャンス

のである。19年10月連合艦隊司令官豊田副武

大将から、『回天』を使用する、特攻作戦命令が出されたのである。これに基づき、第6艦隊で作戦計画が立案され、呉軍港在泊の旗艦「筑紫丸」で打合せが行われた。

出席者は、大本営を始め、連合艦隊、第2特攻戦隊等の各司令部職員、それに事務局員、潜水艦部員、呉海軍工廠関係者、潜水隊司令、潜水艦長、水雷長などの要人が多数集まった。それに大津島基地からも上別府大尉、吉本中尉などの若い隊員も参加した。

第6艦隊参謀長・仁科宏造少将が開会の辞を述べた後、「今後〇六作戦部隊は『回天特別攻撃隊』と呼び、今回の作戦を玄作戦、出撃隊を（菊水隊）と命名する」と発表、次いで、その編成表が正式に掲げられた。

『回天特別攻撃隊・菊水隊』の編成を見ると、指揮官に第15潜水隊司令の揚田清猪大佐以下、伊36潜の艦長・寺本巖少佐と吉本健太郎中尉（海兵72期）ら4名の『回天』搭乗員、伊37潜艦長の神本信雄中佐と上別府宣紀大尉ら『回天』の4搭乗員。さらに、伊47艦長の折田善次少佐には、殉職した黒木大尉と共に、『回天』の生みの親の一人であった仁科関夫中尉ら4名の搭乗



員の名前があった。以上『回天特別攻撃隊・菊水隊』の編成が発表されたのに続き、第6艦隊先任参謀・井浦祥三郎大佐が克明に作戦計画の説明に当たった。「今次作戦は比島作戦に対する敵

の最前線基地である西カロリン諸島に集結中の敵機動部隊に対し、奇襲をかけ、これを覆滅しようとするものである。」井浦参謀は、打合せ会場の最前列でじっと耳を傾けている『回天』搭乗員に目をやりながら、説明を続けた。

これを要約すると、「月の無い夜を選び11月20日黎明を期し伊36潜、伊47潜でウルシーを、伊37潜でパラオのコツソル水道を攻撃する。ウルシー環礁内には常に100隻以上の艦艇、輸送船団が碇泊していることは確実であり、コツソル水道には50隻程度の艦船が停泊中である。各潜水艦には次の点を望みたい。まず第一に、虎穴に入らずんば虎児を得ずの精神で最良の発進点を占位すること。次に攻撃の前日、在泊地偵察を行い在泊艦船を確認すること。なお、『回天』の発進後は出来る限り視認、聴音傍受の手段を尽くし戦果の確認に努めてほしい。」

昭和19年11月7日午後、大津島基地に於いて豊田・連合艦隊司令長官から、『回天特別攻撃隊・菊水隊員』に贈られる短刀の伝達式が行われることになっ

た。第6艦隊司令部からは三輪義重長官、先任参謀・井浦大佐、水雷参謀・鳥巢健之助中佐、浅岡副官の4人が、呉から陸路徳山へそこから内火艇で大津島基地へ向かった。

海上には出撃準備を完了した「伊36潜」「伊37潜」「伊47潜」の3隻が静かに停泊、後甲板には4機ずつの『回天』が搭載されていた。

艦橋側面には日の丸の識別布、其の上に乗っ白く描かれた菊水の紋所などが、黒い艦体にくっきりと浮かび上がっている。

午後4時、総員が整列した最前列に、第一種軍装、短剣姿の青年士官12名が一列に並んだ。やがて、第6艦隊司令長官・三輪中将が席に着いた。「只今から、連合艦隊司令長官より贈られた短刀を伝達する」と三輪中将が述べ、上別府宣紀大尉、仁科関夫中尉ら12名に、錦の袋に入った短刀一振りずつを手渡した。

既に生死を超越しているのだろうか、彼等は全然臆する事なく、きびきびした中にも終始一貫、淡々たる態度で臨んだ。

昭和19年11月8日、いよいよ『回天特別攻撃隊・菊水隊』出撃の朝がやってきた。君が代のラッパと共に基地の丘の上と3隻の潜水艦で、軍艦旗が一

斉に掲揚された。

このあと12名の隊員は回天神社に必中を祈願して、多くの隊員達に見送られながら棧橋へ歩いていく、隊員の一入である仁科関夫中尉は殉職した黒木大尉の遺骨の入った小箱をしっかりと胸に抱き、伊47潜に乗り移った。

午前9時、司令潜水艦伊36潜に出発の信号が上がった。各艦は、ほとんど同時に抜錨し、伊36潜、伊37潜の順に航進を始めた。1機8トン、4機合計32トンの『回天』を搭載した各潜水艦は、音もなく滑るようにして出て行く、

檣頭には菊水の旗印（非理法権天）の幟がなびき、艦尾に軍艦旗がはためいている。

棧橋に残った見送りの隊員達は全員胸中に必殺の戦果を祈りながら、一斉に「帽振れ！」にて見送った。3隻の潜水艦はやがて単縦陣となり湾口に向かった。10数隻の内火艇や魚雷艇に分乗した基地隊員達が、去り行く潜水艦を追いながら口々に「しっかり頼むぞ、頑張ってくれ」と叫ぶ。当然、出撃隊員もこれに応え、整備員と一緒に『回天』の上に立ち、抜き払った日本刀や帽を打ち振り最後の別れを惜しんだ。

やがて、各潜水艦は周防灘を横切り、豊後水道を抜ける間、塔乗員と整備員達は、共々『回天』の点検、手入れに

余念がなかった。

編隊が沖の島を過ぎ、やがて四国や九州の山々が夕靄の中に霞む頃になると搭乗員達は艦橋に出て、母国の最後の姿を脳裡に刻み込むかのように、じいーっと見据えていた。間もなく「列を解き各艦は作戦命令に従い予定の如く行動せよ」との信号が先頭の伊36潜から出された。伊36潜は、わずかに左へ針路を変えウルシー北方へ、伊37潜は面舵を取りパラオ島のコツソル水道へ向かった。伊47潜はそのまま直進ウルシー南方へと航進を続けた。指揮官の揚田司令から「成功を祈る」との信号が伊37潜、伊47潜に発せられた。

これに対し、それぞれの神本艦長、折田艦長が「誓って成功を期す」と応答した。3隻の潜水艦は、夜のとばりの中へ溶け込むように姿を消していった。かくして、『回天特別攻撃隊・菊水隊員』を乗せた3隻の潜水艦は暗夜の海上を20ノットの高速で、南へ南へと進んでいく。

攻撃予定日は12日後の11月20日、このとき、これら隊員達にはどの様な運命が待ち受けていたのだろうか？。11月19日『菊水隊員』搭乗の伊36潜、伊47潜がウルシー泊地に迫り、港内の敵艦船をひそかに偵察していた。攻撃予定日の前日である。ところが、その頃

パラオのコッソル水道に向かっていた伊37潜は、敵の対潜部隊と死闘を展開していた。そして、そのまま消息を絶った伊37潜の、その後の状況は皆目判らなくなってしまった。

戦後、米軍が発表した記録によると、ほぼ次の通りだった。19日午前8時5分、コッソル水道西口で防潜網を展開していた設網艦が潜望鏡を発見し警報を出した。そこで、待機中の駆逐艦2隻が直ちに出勤して索敵、午後3時、遂にソナーが日本の潜水艦を捕らえた。それから2時間数回爆雷攻撃を行い、6回目の爆雷が見事命中した。大爆発が海を鳴動させ重油や艦体の破片が海面に浮かび上がってきた。最後には人体の一部まで浮いてきたという。

こうして、伊37潜艦長・神本信夫中佐は、攻撃予定日に悲壮な最期を遂げられた。これは取りも直さず同艦の搭乗員、上別府宣紀大尉、村上克己中尉(海機53期)、宇都宮秀一少尉(学3期)、近藤和彦少尉(学3期)達が目的を果たす事が出来なかったことを意味する。

一方、ウルシー北方泊地を偵察していた伊36潜は、20日午前零時過ぎ敵前で強行浮上をした。艦内に交通筒の無い3号艇、4号艇の今西太一少尉(学3期)、工藤義彦少尉(学3期)を、それぞれの艇に搭乗させるためだ。

両少尉が艇内に入ると潜水艦は再び50メートル下の海中に潜航した。午前3時、吉本健太郎中尉(海兵72期)、豊住和寿中尉(海機53期)の2人も交通筒を通り、1号艇、2号艇に乗り移った。

午後4時過ぎ目標地点に侵入し、いよいよ発進作業に着手する。ところが、どうしたにか1号艇、2号艇とも架台に密着して発進出来ない。しかも、4号艇は浸水が起こり発進不可能、苦勞してようやく此処まできたのに、4機中3機が使用できないとは：

## 攻撃

揚田司令、寺本艦長が切齒扼腕してもどうにもならない、結局は3号艇の今西少尉だけが午前4時54分発進して行った。伊36潜は、他の搭乗員全員を収容後深々度に潜航して、攻撃効果の聴知にとめていた。午前5時45分、大爆発音をキャッチ続いて誘爆らしい音響を感じた。『回天』攻撃の成功である。

しかし、今西少尉一人だけを実入させた、司令、艦長、残った3人の搭乗員の心境は複雑だったに相違ない。

昭和19年11月20日午前零時過ぎ、伊47潜艦長・折田善次少佐の行く手に、敵艦隊の停泊灯が見えてきた。レイテ

沖海戦で損傷を受けた艦艇を徹夜で修理しているのであろうか。ウルシー環礁内に在泊するアメリカ艦隊の灯は、次第に近づき電気溶接の火花さえ見えってきた。

午前零時30分、艦橋に立って前方を凝視していた折田艦長が、「3号艇・4号艇、乗艇用意！」と、下命した。白鉢巻き、第三種軍装、黒の搭乗靴の、佐藤章、渡辺幸三両少尉(学3期)は、隊長の仁科中尉の前に並んで立ち「佐藤少尉3号艇に乗艇します」「渡辺少尉4号艇に乗艇します」と申告した。

黒木大尉と共に『回天』生みの親とも言われた仁科中尉は、「今日までよくたえてくれた。発進したら沈着冷静、最後まで攻撃精神を発揮し、頑張ってくれ成功を祈る」と、固い握手を交わした。

午前3時、今度は1号艇の仁科中尉、2号艇の福田斉中尉(海機53期)に乗艇命令が下った。両中尉の復唱が終わった後、仁科中尉が搭乗員を代表して、折田艦長以下、各乗員が示してくれた好意に対し、心から謝意を述べた。決別の敬礼をした両中尉は通路で見送る伊47潜の乗員と握手を交わしながら仁科中尉は、電動機室、福田中尉は、主機械室にある交通筒から『回天』に搭乗した。

午前4時、伊47潜は予定発進点に到着した。潜望鏡にボドウイ島の中央を示す、紅色の航空標識灯が、はっきり映った。各艇とも最後の点検が行われ、『回天』の中央部を固縛した第2バンドも離脱した。残るは第3バンドと電話線だけ、これにて発進準備は完了、後は、発進開始を待つだけ。伊47潜は水中で面舵を取り右に回頭しながら反転する。これで『回天』は湾口に向首した。

「1号艇発進用意」仁科中尉が『回天』内で酸素気室の弁と燃料コックを開いた。「発進用意よし」仁科中尉の力のこもった声が電話で伝わる。「発進！1号艇」と艦内に号令が響いた。

20日午前4時15分、艦内からの操作で第3バンドが外されると同時に、ドーンという音とともに起動した。その途端、ガリッと電話線切断の音が聞こえた。折田艦長は、電話機を置くと潜望鏡に飛びついた。艦尾の黒い海面に青白い航跡が見える。19年11月20日、午前4時15分、伊47潜から発進した『回天』1号艇の仁科中尉は、殉職した盟友、黒木大尉の遺骨と遺影を胸にして、ウルシー泊地の敵艦船を目指して突進する。

次いで、4時20分、右舷から佐藤少尉が搭乗している3号艇が発進、続い

て5分後の4時25分、左舷からは、渡辺少尉の4号艇が発進した。最後は、機関学校出身の福田中尉が搭乗する2号艇、万歳とともに発進、航走状態もすこぶる良好である。こうして、11月8日大津島出撃以来、念願であった『回天』の全機発進は終わった。これは、再び収容されることの無い必死の発進である。

目標は、ウルシー環礁の敵艦船で、当時、ここにはアメリカ第3艦隊の空母、戦艦を始め無数の艦船が出入泊していた。輸送船やタンカー、工作船まであらゆる艦船がひしめいていた。レイテ湾から約90カイリ、サイパンからは450カイリに位置していた。この様にしてウルシーはフィリピン、台湾、沖縄などへ広げられた扇の要に当たる地点に在った。

従って、アメリカ海軍にとっては最重要前進基地だった。そのため、警戒は厳重に厳重を極めていた。まだ明けやらぬウルシー泊地、そこを直指して伊47潜からの、『回天』4機、伊36潜から1機が発進している。

### 確認航行・帰投

命中予定時刻は、午前5時を少し回る頃である。その時、突如、伊47潜が発進を冒して浮上した。折田艦長が戦

果の確認を潜望鏡でなく、直に視認しようとしたのだ。午前5時、東の水平線が白みかけてきた。3分、4分、5分と時間は過ぎるが、ウルシー泊地は静まり返っている。

次の瞬間、艦長や見張員達が「アッ」と叫んだ。艦長が双眼鏡を手にする。泊地内から稲妻のような赤い閃光が走り、海水が盛り上がりとともに大火柱が立ちのぼる。次いで小爆発が数回起こり、ウルシーの空が赤く染まった。「やったぞ、命中だ！」艦内に感激の渦が湧く、感極まって泣く者もいた。通信長が艦内に向かって「命中、一発確認」と怒鳴る。

続いて、5時11分、閃光が走り、大火柱が噴き上がった。「命中、二発目確認」と、艦内に速報が飛ぶ、艦内からはどよめきの声が聞こえる。19年11月20日未明二発目の『回天』が敵艦船に命中したのを確認した。

伊47潜は、尚も戦果を確認するため前方の見張り員が「敵、駆逐艦右5度6千、近づくと、大声で叫ぶ。これを聞いた艦長折田少佐は間髪を入れず「向舷停止潜航急げ」と下命する。

緊急ベルが鳴り響きエンジンが停止する。8名の艦橋当直員が艦内に流れ込む。「深さ50、ダウン15度」ちょう

ど逆立ちのような急潜航だ。伊47潜は敵の対潜掃討の爆雷攻撃に備え、息を殺して聴音室の報告を待った。

ところが、敵の駆逐艦は伊47潜の所に気付かなかったのか、ウルシーの方向へ急行した。乗組員にホットした安心感が漂う。深度を浅くして潜望鏡を上げると、遠ざかっていく駆逐艦の艦尾が見える。これにより一応危機は去った。

20日午前5時52分軽い振動を感じた。聴音室から「ウルシー方向遠距離に鈍い爆発音」との報告があった。

午前6時、総員配置にいたままで、突入成功の『回天』4搭乗員の冥福を祈り、一分間の黙祷を捧げた。合掌。

4搭乗員とは、仁科中尉、福田中尉、佐藤少尉、渡辺少尉である。

伊47潜は大恐慌となったウルシーを後にして、深度50メートルを2ノットで速力で南下を続けた。

その夜、第6艦隊司令部から「ウルシー泊地指揮官は、20日午前5時過ぎ、停泊中の全艦隊および同水域行動艦隊全部に対し、警戒警報を発した」との情報が入った。

11月22日夕刻、ヤップ島の西方5カイリに浮上した伊47潜は、針路を280度とし、レイテ湾へと向かう。翌23日早朝、連絡が途絶えていた僚艦、伊36潜

の戦闘速報が入った。これによって伊47潜は、初めて伊37潜の悪戦苦闘の状況を知った。

敵の追撃を免れたのは、伊37潜が、敵を一手に引き受けたためだった事も併せて知ったのである。

翌24日、第6艦隊司令部から「菊水隊は、現位置よりそのまま内地に帰投せよ」との電令があった。

これより伊36潜、伊47潜は、針路を北に変え、11月30日、相前後して『回天』の基地、大津島を経て呉軍港に帰投した。

### 作戦研究会

その後、12月2日、呉在泊の旗艦、筑紫丸で、菊水隊作戦研究会が開かれた。いふなれば、ウルシー泊地の奇襲攻撃等の作戦に関する反省会であった。開会の一時間前、幕僚室に潜水艦の軍令、軍政、教育を担当する中佐から、少将までの幹部クラスが顔を揃えた。

中央部からは軍令部、軍務局、潜水艦部の主務者、連合艦隊主務参謀、潜水学校首席教官、揚田司令、さらに第6艦隊の前任参謀、水雷参謀など、そうそうたるメンバーであった。この席

上、最後任の水雷参謀・鳥巢健之助中佐が『回天』搭乗員と最も関係が深いとあって「20年正月を期し、潜水隊作

戦のことを公表されては、と思うのですが」と、提案した。

ところが、中央関係者の一人が「いや、まだその時期ではない、この際は見送るべきだ」と反対した。しかし、敢えて鳥巢中佐はなおも食い下がる、「なぜ発表の時期ではないのですか、敵は今作戦の全容を把握しているに間違いありません。今更秘密にしても始まらないし、『回天』隊員の壮烈な武勲を全国民に一日も早く知らせるべきではないでしょうか」これに対する反論は、「敵が知ってしまったと考えるのは早計だ。まだまだ機密を保持し、次の作戦を考えるべきだ」と、両者の意見は全く噛み合わない。それもそのはず、既に、大本営連合艦隊司令部では、今回のような作戦は来年早々実施する腹であったのだ。

鳥巢中佐は、これを知らなかったのである。結局、同中佐の意見を支持してくれる者は一人もいなかったのである。「菊水隊作戦のことを発表せよ」と主張する鳥巢中佐の考えていることは、今度の作戦で局地奇襲は打ち切り、『回天』を洋上で使用すべきである、という事であった。どうやら、上層部の人々は、問題の『回天』は動かぬ目標を攻撃する兵器であると考えていたらしい。

本来、潜水艦は洋上における補給路を破壊する作戦に、使用すべきものである、と考えていた人々さえも『回天』の採用によって、潜水艦を局地に使用させることを容認した形になってしまったのだ。

第6艦隊・水雷参謀・鳥巢中佐は、自身の力不足を痛感した。事の成否は別としても、『回天』を洋上にて使用出来れば次の潜水艦作戦は、かなり変わった様相を呈することは、疑う余地がなかったであろう。

19年12月2日、旗艦・筑紫丸のサロンで開かれた菊水隊の研究会には、軍令、軍政、教育関係者等のほかに、潜水艦乗組士官と『回天』搭乗員、潜水学校教官・学生、呉海軍工廠部員等20名を越す士官達が詰め掛けた。まず、第6艦隊先任参謀・井浦大佐から、作戦経過の概要説明があり、次いで、伊47潜の折田艦長、そして伊36潜の寺本艦長から戦闘行動の説明があった。

折田艦長が仁科中尉ら『回天』の4搭乗員の出撃前後の状況に触れ、声涙ともに下る説明が終わると会場は肅然として声もない。第6艦隊司令長官・三輪中将も、ハンカチで日頭を拭いていた。ここまでの経過は必然的な成り行きであり異を唱えるまでもなかった。しかし、この後になって変わってき

たのは、戦果の段階に入り、第6艦隊通信参謀・坂本文一少佐が立ち上がったからだ。

坂本少佐は

- (1) 伊47潜が確認した大火柱？本並びに大爆発音。
- (2) 伊36潜が聴取した大爆発音数発
- (3) 発進前の隊員の突入計画。
- (4) 23日、再度実施された泊地飛行偵察の写真、16日の写真及び19日の両潜水艦偵察との総合比較などから判断して、次のように推定すると発表した。

その内容は、伊47潜、仁科中尉、正規空母轟沈！、福田中尉、正規空母轟沈！、佐藤少尉、戦艦轟沈！、渡辺少尉、正規空母轟沈！……これが事実とすれば、正に、脅威的な大戦果である。

3空母、1戦艦を一挙に轟沈！という発表に、大勢の参加者は興奮の渦中に巻きこまれた。

しかし、戦後明らかにされた米軍資料によれば、坂本少佐の戦果報告との間に大きな差異があったようだ。

即ち《昭和19年11月20日、午前5時47分（日本時間5時7分）中央泊地に停泊中の油槽艦、ミシシネワ（二万三千トン）が突如大爆発を起こした。ミシシネワは、火災に包まれ巨大な炎と黒煙が天に沖した。2時間後には転覆

して海中に姿を没した。288名の乗員中60名が艦と運命を共にした。…夜明けの静寂を破った突然の大爆発に、ウルシー港内全艦船が大恐怖に陥ったことは確かだが、当時港内に停泊していたノースカロライナなどの戦艦、或いは空母の損害は皆無である。》とのことだった。

『回天特別攻撃隊・菊水隊』の研究会が開かれた前日、つまり19年12月1日、大津島に続く『回天』の基地、第2号が光基地に開隊された。20年3月1日、平生基地、5月1日、大神基地が開隊されたほか、本土決戦必至とあって、八丈島・須崎・浦戸・大原・由良などに『回天』が配備された。

この頃、予科練20期出身の我々100名が川棚魚雷艇訓練所より、光・平生・大津島・大神の4基地に25名づつ分散されて派遣されたのである。

## 第2次『回天』特攻作戦

この前、19年12月中旬、第2次の『回天』特攻作戦に対する連合艦隊作戦命令が下った。構想は、全く菊水隊作戦と同じで、その規模を拡大したただけのものだ。

「正規空母3隻轟沈、戦艦1隻轟沈」の誇張した戦果はともかく、連合艦隊が『回天』攻撃に大きな期待を懸けた

ことは否めない。第2次特攻作戦に参加の部隊は、金剛隊と命名され、当時の日本海軍潜水部隊の精鋭を、よりすぐったものであった。

金剛隊は6隻の潜水艦で編成され『回天』の搭乗員は、潜水艦1隻に4名の計24名。攻撃予定は、伊36潜・伊47潜・伊53潜・伊56潜・伊58潜の5隻が20年1月11日、伊48潜だけが1月20日だった。

最も遠い距離の、アドミラルティ諸島のセアドラ泊地を指す伊56潜艦長・森永止彦少佐は、12月22日に、次はニューギニア北岸のホーランドディア泊地に向かう伊47潜艦長・折田少佐が、12月25日に大津島基地から出撃、続いて、再びウルシー泊地を狙う伊36潜艦長・寺本少佐、パラオ、コッソル水道の伊53潜艦長・豊増清八少佐、 Guam島アラ港を攻撃する伊58潜艦長・橋本少佐は、ともに12月30日、伊48潜艦長・当山善信少佐は、明けて1月8日、大津島基地を出撃した。

ところで、第1次『回天』作戦に関わった菊水隊は、兵学校、機関学校、3期兵科予備学生出身士官によって編成され、予科練出身者はいなかった。だが、第2次作戦の金剛隊に初めて予科練出身の2人の若人が特攻隊員として加わった。

それは伊58潜で Guam島アラを攻撃する『回天』搭乗員、森檢二等飛行兵曹、三枝直二等飛行兵曹で、弱冠18歳そこそこだった。

この2人は昭和18年末、土浦海軍航空隊に甲飛13期生として入隊、いわゆる翼なき予科練として軍務に就き、翌19年秋、海軍特別攻撃隊『回天』隊に選抜されたのである。我々20期生より約半年位早く編成されたのである。20年1月12日未明、アラ港のすぐ近くに肉薄した伊58潜から、石川誠三中尉(海兵72期)、工藤義彦中尉(学3期)、森、三枝両二飛曹の搭乗する『回天』は、港内を指して突進した。

20年1月下旬から2月2日までの間に、伊48番(未帰還)を除く5隻の金剛隊潜水艦が呉軍港に帰投した。

第1次の菊水隊と同様、金剛隊の作戦研究会が行われた。例によって、各艦からの報告や諸情報を総合し戦果を発表した。菊水隊程ではないにしても、結果的にはかなりの誇大発表となった。しかし、内容はともあれ、2月11日、連合艦隊司令長官・豊田副武大将から感状を授与された。

さて、『回天』特別攻撃隊は、菊水隊、金剛隊に続き、千早隊・神武隊・多多良隊・天武隊・轟隊・振武隊・多聞隊等が相次いで出撃した。しかし残

念ながら、紙幅が足りず(紙面の都合)各隊の状況全てを述べる事は出来ない。そこで『回天』作戦を初めて洋上に転換することになった、第6次の天武隊を取り上げる事にしよう。

### 『回天』作戦洋上に転換

天武隊の編成は、20年4月中旬伊47潜艦長・折田少佐と、伊36潜艦長・菅昌徹明少佐の2隻に各6名の搭乗員が配置された。これまでは1隻に4名の配置だったが、2名増えたのは交通筒が全『回天』に設置され、潜水艦は航行のままで搭乗員が随時『回天』に乗り移ることが出来るようになったからだ。

伊47潜の『回天』搭乗員は、柿崎実中尉(海兵72期)、前田肇中尉(学3期)、古川七郎上曹、山口重男一曹、新海菊雄二飛曹、横田寛二二飛曹、伊36潜には、八木悌二中尉(海機54期)、久家稔少尉(学4期)、安部英雄二飛曹、松田光雄二飛曹、海老原清三郎二飛曹、野村栄造二飛曹が乗艦。

ここで、搭乗員の中に二飛曹の多いのが付いた人も多いに違いない。伊47潜に2名、伊36潜には4名もいる。天武隊12名の中、半数の6名が二飛曹である。彼らは、紛れもなく予科練出身の甲飛13期の同期の桜なのである。天武隊の作戦海面は、伊47潜が、沖

縄とウルシーを結ぶ中間付近、伊36潜が、沖縄とサイパンを結ぶ中間付近と決まった。伊47潜、伊36潜は、4月22日共に光基地から出撃することになった。

因みに、この頃我々20期生は、先輩に続けとばかり大志を抱き、各基地に配属され、日夜猛訓練に励んでいた。(注、我々100名の搭乗予定の機種は、目下、試運転中の最後の改良型単身搭乗の10型であつたらしい。沿岸基地出撃用)

既述したように潜水艦本来の使用方法は、敵艦隊攻撃或いは、ウルシー攻撃のような港湾突入にあるのではない。洋上に出勤待機して敵の補給線を断つ事、または艦船を奇襲することが常道である。

潜水艦使用方法が常道に立ち返ったのは、如何にも遅きに失したが、それを実現させたのは、第6艦隊・水雷参謀である鳥巢健之助中佐の奔走の結果だった。

20年4月27日未明、金剛隊の伊36潜は沖縄とサイパンを結ぶ線の中間付近に到着した。目指す作戦海域である。やがて、見張りが沖縄方面へ向かっている30隻からなる大輸送船団を発見した。「両舷停止潜航急げ」それまで静かだった艦内は「それっ」とばかり色めきたった。約一分後、総員配置に就

き伊36潜は、19メートルの深さに潜航していた。「戦闘魚雷戦用意、『回天』戦用意」と、司令塔から菅昌艦長が号令する。『回天』搭乗員は、常時用意していた「七生報国」の白鉢巻を頭に締め、別れの挨拶もそこそこに、自分の搭乗する『回天』に乗り込んだ。

まもなく各『回天』から、「1号艇よし!」「2号艇よし!」と相次ぎ報告が入る。菅昌艦長は、潜望鏡で敵の動静を凝視しながら艦を敵の大船団に近づける。距離七千米になった。だが、魚雷攻撃するには些か遠すぎる。菅昌艦長は、距離に不足はない、そこで、『回天』攻撃を決意し、『回天』の発進を命じた。

八木悌二中尉、安部英雄二飛曹、松田光雄二飛曹、海老原清三郎二飛曹の4機の『回天』が突進して行った。その直後敵の護衛艦が近づいてきたため、伊36潜は、深々度に潜航した。約10分を過ぎた頃大爆発音が聞こえてきた。幾らか間を置き2発目、3発目、続いて4発目、約5分間に4機の『回天』が命中、輸送船に体当たりしたのである。一方、伊47潜は、5月2日、ようやく敵船団を捕らえた。午前9時半、聴音員が音源をキャッチする。「音源、右45度、艦種不明、僅かに左へ移動する」このように聴音報告が司

令塔に伝わると、折田艦長は、間髪をいれず「総員配置に就け、『回天』戦、魚雷戦用意、深さ19、急げ!」の号令が矢継ぎ早に艦内に響き渡った。

音源の方向に潜望鏡を旋回した艦長は、波間に目標を発見した。駆逐艦2隻が右前方約七千米を北西に向け、10ノットで航行中であり、さらに同方向の遠距離に輸送船団が数隻見える。「1号艇、2号艇、発進用意」と、折田艦長は、柿崎中尉、山口一曹に先発を命じた。続いて、敵状を説明し、瞬時のように指示した。「各艇は、発進後直ちに針路30度、速力20ノットで12分間全没航送、第一回零頂時の予想態勢は、駆逐艦の前方千メートル、あとは観測に基づき各自の判断により突入せよ。第一目標輸送船、第二目標駆逐艦」:

20年5月2日、午前10時になろうとする頃、伊47潜から柿崎中尉搭乗の1号艇、続いて1分後山口一曹搭乗の3号艇が発進していった。潜水艦の乗員は全身を耳にして、命中音を今か今かと待っている。やがて15分、20分と時間が経過した。「うまく命中してくれればいいが」と願う一瞬、(ズシューン!)という大爆発音。発進後21分の『回天』の命中音だ。

敵駆逐艦の音源群と同方向とあって、

まず間違いはない、続いて4分後の25分、またも同一方向に大爆発音が聞こえた。これは、柿崎中尉に次ぐ山口一曹の命中である。柿崎中尉は洋上『回天』作戦のトップこそ切れなかったが、ようやく念願を果たした。

19年12月、金剛隊で出撃以来、3回に及ぶ決行は何れも機会に恵まれません。此処に来て実に4回目にして初めて発進が出来て、ようやく念願の目的を果たす事が出来たのである。

駆逐艦2隻轟沈の喜びに浸っているうちに、伊47潜はまたも駆逐艦らしい音源を捕らえた。待機していた古川上曹の4号艇が早速発進40数分後に大爆発音を伝えてきた。2度の『回天』戦で伊48潜の潜伏を知られてしまったため、南東へ場所を変えた。

その機会に残りの『回天』3機の整備を行い、同月5日沖繩とグアムを結ぶ線に進出した。翌6日午前10時、伊47潜は遂に音源をキャッチした。静まり返っていた艦内にはわかに活況を帯びる。

前田中尉、横田二飛曹、新海二飛曹の出番がやってきた。折田艦長が潜望鏡に目を当てると、距離八千メートルに灰色の軽巡洋艦が飛び込んできた。即座に、2号艇・6号艇発進用意!、2号艇は前田中尉、6号艇には横田二

飛曹が搭乗している。

ところが、肝心のときに6号艇に故障が発生、2号艇だけの単独発進となった。このころ、このような故障のため発進できなかった例は、かなりの数に達していた。

やがて、20分が経過した。予定の到達(命中)の時間はとくに過ぎていない。聴音では音源の感度が高くなった、低くなったり、盛んに避退運動をやっている様子が窺える。こうしてやきもきしているうちに、突如、グワーンという大爆発音が響いてきた。発進後24分前田艇の壮烈な最期である。

(合掌)

20年5月6日午後8時、大本営の臨時ニュースがラジオから流れた。久しぶりに勇壮な軍艦マーチが吹奏され、戦果が発表された。「最近一ヶ月以内に、菅昌少佐の率いる潜艦2隻は太平洋上において、敵の軽巡1、駆逐艦2、大型輸送船5隻を撃沈し、他の3隻を大破せり」言うまでもなく「回天」特別攻撃隊・天武隊の伊47潜・折田艦長、伊36潜・菅昌艦長の戦果であった。

ここで、注目すべき点は正直な大本営発表であったことだ。当時、大本営発表を信ずる国民はいなかった、と言っても過言ではなかったようだ。これ以降、『回天』の戦果は鰻上りに上がっ

た。

それまでの潜水艦使用方法、ウルシー港などの局地攻撃を改め、洋上作戦に切り替えた結果である。

このため、第6艦隊司令長官・醍醐忠重中将は、可動兵力の全部、僅か9隻を西太平洋に投入し、切り札の『回天』作戦を実施した。本当に少ない兵力ではあったが、その戦果は誠に大きかった。

終戦までの3ヶ月間に、油槽船(タンカー)または輸送船15隻と巡洋艦2隻、駆逐艦5隻、水上機母艦1隻、艦種不明6隻の合計29隻を撃沈、2隻を大破、以上の戦果を収めたのである。

『回天』は母艦(潜水艦)を無事に発進出来れば、殆ど百発百中である。しかも、常に不意打ちの攻撃であり、すさまじい破壊力を発揮出来るため、米海軍には多大の脅威を与えたのである。

これを裏付けるエピソードが残っている。終戦直後、日本外務省と陸海軍代表がマニラに招かれ、米軍の日本進駐に関する打合せ会が開かれた。その際、米軍のサザランド参謀長が開口一番、「回天は未だ海上に残っているのか?」という質問があった。

これに対して日本海軍代表が、「回天を搭載している潜水艦はまだ7隻残っ

ている」と、答えると、「それは大変だ、直ちに降伏するよう打電してくれ」と、指示したという。このことで、米軍がいかに『回天』攻撃を恐れていたかが判るのである。

### 原爆搭載艦重巡イ号撃沈

ところで、『回天』を語るとき忘れてならないことは、太平洋戦争大詰めの段階に於ける、伊58潜艦長・橋本少佐の大活躍である。

20年7月16日午前、伊58潜は呉軍港を出港した。静かに岸壁を離れる潜水艦に対する見送りは盛んで、海軍関係者は勿論、呉工廠に働く工員や女子事務員、女子挺身隊員らが、帽子を振り、ハンカチを振って別れを告げた。

伊58潜艦長・橋本少佐の大活躍について結論から先に言うならば、原爆搭載艦の重巡・インディアナポリス号を撃沈する大殊勲を立てたのである。この重巡が日本にとって忘れることのない、20年8月6日、広島、そして8月9日、長崎に、それぞれ投下された原子爆弾を運んだ重巡であった事は、戦後になってはじめて判ったのである。

以下撃沈に到るまでの経過を追ってみよう:

20年7月16日午前呉軍港を出港した伊58潜は、同日午後平生基地に入泊、

『回天』の搭載を始めた。翌17日朝、伴修三中尉(学3期)、永井淑夫少尉(学4期)、林義明、小林一之、中井明、白木一郎の各一飛曹が伊58潜に乗り込んだ。

翌18日夕刻、伊58潜は豊後水道を抜け、やがて広い洋上に出た。これから、橋本艦長は昼は対空レーダー、夜は対空と水上レーダーを駆使、目的地点に向かって進撃を続けた。

7月28日、いよいよ目的の配置点の間近となった。午後2時頃潜望鏡で周囲を見回すと、1隻の駆逐艦に護衛された大型タンカーが見えた。橋本艦長は状況を判断し、『回天』の1号艇・伴中尉、2号艇・小林一飛曹を発進させた。

先発した2号艇が50分後、さらに1号艇がその10分後、爆発音を響かせた。翌29日午後11時5分頃、航海長・田中大尉が「敵艦らしきもの左90度」と叫ぶ。橋本艦長が双眼鏡で覗くと、月光に映える水平線上に黒い影、距離、約一万メートル。5分後、潜望鏡に映る艦影が次第に大きくなり、三角形の形がはっきりとしてきた。

橋本艦長は「発射魚雷数6」と下命し、同時に『回天』6号艇・白木一飛曹を、5号艇・中井一飛曹を待機させた。息詰まる数分が過ぎる。午後11時

26分、橋本艦長は、「右60度千五百」と、方位角、距離を指示し、潜望鏡の中央十字線と目標の敵艦が一致したとき「用意、撃て!」と叫んだ。方位盤手の指が力強くボタンを押す。6本の魚雷が2秒間隔で次々に飛び出してゆく。

橋本艦長は、潜望鏡で船影を凝視し続ける。影絵のような敵巨艦が不気味に近づいてくる。次の瞬間、敵艦首、一番砲塔付近に水柱が、続いてその後方一番砲塔の真正面に水柱が上がり、同時に赤い炎が出た。次いで、3番目の水柱が二番砲塔の横から艦橋にかけて立ちのぼった。

20年7月29日、午後11時27分、伊58潜が放った6本の酸素魚雷の中、3本が敵の巨艦に見事命中、大水柱が上がった。場所はレイテグアムを結ぶ線と、パラオと沖繩を結ぶ線の交差点である。潜水している伊58潜にも命中音と爆発音が伝わってくる。

だが、轟沈ではないようだ。早速この音を聞いた『回天』内の、白井、中井の両一飛曹は、「なぜ、私達を発進させてくれないのですか、敵艦が沈まないのなら、私達によって最後の止めをさせて下さい」と、しきりに電話で催促する。

しかし艦長は、OKを出さなかった。

手ごたえは充分と見て取ったようなのだ。敵艦は動かなくなったようだが、まだ沈まない。そこで艦長は止めを刺すため、次発装填をやろうと深々度に潜航させた。伊58潜が約10分後再び潜望鏡を上げたとき、既に海上には敵巨艦の姿は見えなかった。

暗夜の海上に浮上し暫く辺りを搜索したものの、何等の姿もみえなかった。そこで水上航走により位置を変えながら、前日の『回天』の戦果と共に、第6艦隊司令長官・醍醐忠重中将あて、次のような戦鬪速報を発信した。

7月28日、『回天』二機発進、油槽船及び駆逐艦・轟沈、7月29日、アイダホ型戦艦に対し、魚雷6本発射その中3本命中、撃沈確実なり、ただ、この中で撃沈確実としたアイダホ型戦艦は、勿論、推定であって或いは重巡かも知れない、といった類のものである。

当時の戦果は、駆逐艦を巡洋艦に、巡洋艦を戦艦に格上げするのが通例であった。

前述したように、伊58潜が撃沈した戦艦が重巡インディアナポリス号であり原爆搭載艦であったことは、戦後に判明したものだ。インディアナポリス号は伊58潜が呉軍港を出港した7月16日、全く同じ日に広島と長崎に投下する原爆の大型部品を積み、サンフラン

シスコ湾を出港したのである。

原爆運搬の重大任務を果たしたインディアナポリス号は、26日夜に、テナンを出港して翌朝、グアム島アプラ港に入港、翌28日、同港を出て運命の日、29日を迎えたが、もしも、インディアナポリス号が原爆を積んでテナン島へ向かう途中であったなら、この撃沈によって、あの広島と長崎の悲劇は起こらなかった、とするのは無理であろうか？

インディアナポリス号の撃沈は、アメリカ側にとっても重大事であった。何故ならば、戦後、それを撃沈した伊58潜の艦長、橋本中佐の証言を求めたからである。橋本中佐は、ワシントンで開かれた秘密質問委員会に証人として喚問され、攻撃方法や、撃沈時の状況等について陳述させられた。

普通なら重巡一隻の沈没で、その艦長が軍法会議に掛けられたり、敗戦国の潜水艦長から事情を聴取することなど有り得ないことだ。

太平洋戦争の最終段階、米海軍に多大な脅威を与え、戦後も、前記のとおり、サザerland参謀長を警戒させるなど、我が『回天』は、大きな戦果を挙げた。インディアナポリス号の撃沈は、日本海軍潜水艦部隊が文字通り最

後の土壇場で痛烈な一撃を敵に与えたと言う事になるだろう。

いずれにしても、広島、長崎に対する原爆投下後の8月10日に至っても、伊58潜から永井淑夫少尉、中井一飛曹の搭乗する『回天』が発進、沖繩南東方で、駆逐艦、輸送船を撃沈、翌11日、パラオの北500海里、ウルシー沖繩の連結線上にあった伊36潜艦長・時岡隆夫大尉は、敵の輸送船団を発見、成瀬謙治中尉（海兵73期）、上西徳英一飛曹、佐野元一飛曹の『回天』が船団に突入玉砕した。……

さらに、翌12日、伊58潜が、パラオ北方で敵水上機母艦を発見、午後5時58分、林一飛曹搭乗の『回天』が発進していった。同6時42分、大水柱が上がり黒煙が天に達し、敵艦は海中に没した。合掌

## 追悼

こうして『回天』の偉業は、為し遂げられなかったが、人間魚雷『回天』の若い搭乗員は、殉国の一念で散華したのである。

その犠牲者数96名、内訳は戦死80名、殉職16名と言われていたが、その後の調べで、判明した戦没者の数は、総員で何と151名となっていた。このうちの

予科練出身者は、主に、土空、奈良空出身の甲飛13期生が大部分で、我々乙飛20期生は含まれていなかった。

したがって、結果論ではあるが、回天特攻隊員として現在の「平和の礎」を築かれた予科練出身甲飛13期生を含む151柱の英霊に対しては、心から追悼の意を捧げると共に、どうぞ安らかに永眠されますよう、と祈念する次第です。

また、極秘で開発された『回天』なので、情報も少なく訓練課程での所謂「殉職者」も意外に多かった。

具体的には、『回天』の「生みの親」とも言うべき黒木博司大尉、及び樋口孝大尉の両名は、19年9月7日大津島基地で殉職された。

因みに、同基地では8名、光基地と平生基地でもそれぞれ4名の殉職者を出している。大神基地では幸いにもゼロであった。

この殉職者の一人に和田稔少尉（学4期）が存在する。そして、座乗した潜水艦（艦長木原少佐）が戦後引き上げられて調査したところ、その遺留品の中に、訓練状況を克明に記した日記があり、それが書物となって社会に公開された。

その遺稿によれば、彼は、静岡県立沼津中学から一高を経て東京大学法学部に入學した。



しかし、昭和18年9月23日文科系学部  
の学生に対する「徴兵猶予停止法」  
が制定され、「いよいよ来たか!」と  
さばさばとした心境で「私の生涯を国  
家に捧げん」と決意して、18年12月予  
備学生として広島県大竹海兵団に入団  
し、19年1月横須賀の武山海兵団に転  
属した。

そこでは、首席で学生長を歴任し、  
その後航海学校、長崎県川棚魚雷艇訓  
練所を経て、『回天特別攻撃隊』光基  
地に着任した。

そして、19年12月海軍少尉に任官し、  
20年5月「伊36潜」で出撃したが、辛  
か不幸か出撃の機会に恵まれず、6月  
28日帰投した。

そのような経歴を有する彼は、再出  
撃に備えて訓練中事故に遭遇し、その  
短い生涯を閉じられたのである。

戦いの草稿と題する日記で、弟妹に  
書き残した遺稿によれば、「もし私の  
現存していることが今、求められて為  
しうる国家への貢献よりも、将来に於  
いて、遥かに大きな物への芽だとした  
ら…」と、心中の揺れに言及しながら  
も、彼は即座に一切の躊躇いを捨て去  
り、自らの死を不可避のものとして、  
4人の弟妹達に21歳の長男として教訓  
を書き残している。

曰く、「若菜、私は今私の青春の全

てを私の国に捧げる。私の望んだ花は、  
遂に地上に開くことはなかった。とは言  
え、私は私の根底からの叫喚によって、  
きつと一つのより透明な大事さを、大  
空に咲き乱れさせることが出来るだろう。

もっと家族や家の事柄を書き加えた  
かったでしょうが、当時の世相はそれ  
らを許さず、国の行く末を案じた文面  
のみでした。

この兄が若しも生還していたらこの  
世から消滅した筈の言葉だったろう、  
と私は推察した。

12月9日午前4時半、隣組の方々と  
知人等に送られ沼津駅で送り、広島  
大竹海兵団に行った。

兄は己が命に換えて一冊のノートを  
書き残しているが、12歳違いの妹は、  
紙切れのノートより兄が現存してくれ  
てたら、どんなにか嬉しい?と訴えて  
いる。

時は流れ、移り変わって昭和39年、  
初めて日本でオリンピックが開催され  
た。

その夏、朝日歌壇に兄の鎮魂歌を投  
稿し、採用された中から数首を選び、  
回想の結びとした。

西原若菜さんより

#### 故 和田稔少尉への鎮魂歌

秘めて贈りしわが髪なりき

回天に逝きにし兄よ証しと誌す

回天出撃目前の兄と知らざれば

海に石投げひもにたわむれぬ

浮上し得ぬ回天をめぐる海底の

沈黙無限兄は死にゆく

海底の回天に窒息せる兄よ

食料尽きて一字残さず

いつの日にか兄の回天流れつきし

瀬戸の小島に立ち見むものを

回天の兄の日記の文字絶えし  
ノートの余白撫でさすりみぬ

古賀達志氏(海兵74期)の『回天』  
に関する歌を披露して結語としたい。

#### 回天

暗く狭い魚雷の腹に

身を屈めることは

生れた母の胎内に

戻っていくように自然である

推進器の旋回音に母の

脈動を聞きながら

出自に帰っていく

碧い羊水の中 かれらは

非なる天運をくつがえす起爆と

かれらはおのれを微塵に砕く

おのれの血と肉とを

元素にもどし

生命を生成の原初にかえす

ただ 七たびも 八たびも

生き代わり国を

護らむの魂のみは

身を砕くとも失わずと

固く抱きしめひたすらに

祖国の不滅を信じて

彼らは突進する

(終わり)

## 第八飛行師団参謀の手記

後方及び編成主任参謀 故 川野 剛一

下8FDと略記)に属せしめられた宿命の各部隊長に対し、第八飛行師団司令部のうち参謀

「本稿は、第八飛行師団(8FD)の後方及び編成主任参謀であられた川野剛一氏(陸士47期、少佐、平成12年8月20日逝去)が、同8FD直轄の誠第16飛行隊(玄武飛行隊)に所属された藤木常武氏(曹長、平成17年春頃逝去)の質問に答える形で執筆されたものを、藤木氏が自分史的資料と共に保持しておられ、亡くなる半年位前に先輩の安田義人氏(准尉故人)を通して然るべき所に納めて貰いたいと託されたものである。原文は「靖國偕行文庫」に収納されている。」

### 前言

個人、部隊を問わず、その戦場に於ける運命が、上官又は上級司令部の如何によって定まる点が大であることについては、異論のないところであろう。然して、個人又は部隊が上官又は上級司令部を自己の意志により選び得ないことは、恰も、子に親を選ば自由のないことに似ていると言えよう。部下に必死の攻撃を命じ、或は自分の指揮下に部下をして死に至らしめた、戦・中隊長等の指揮官としての苦悩は盡きることはないであろう。

本駄文の目的は、第八飛行師団(以

前であつた。中央は当初サイパン等の

部(以下8FD司と略記するが、司令部全体を指すこともある。為念)の性格や当時の状況等を略述することにより、為し得れば、その苦悩の鋒先を8FD司に転向することにより、少しでも軽減し得たならば、と念ずるにほかならない。但し、8FD司自体もまた、中間司令部としての苦悩を十分過ぎるほど味わされ、筆者もまた、今に至るも遣り場のない骨髄に徹するばかりの数々の恨みに悩んでいることに思いを及ぼしただけならば、幸いこれに過ぐるものはない。ただ、本駄文は、筆者の所有する若干の記録の他は総て記憶を辿ったもので、なによりも筆者個人の主観に基づくものであり、誤謬偏見も多いと思われ、故人となられた山本閣下を始め、石川、川元さんなどからお叱りを受ける点もあろうし、また、筆者の担当業務(後方、編成、即ち女房役乃至は女中役)にのみ限定され、飽き足らぬ点については容赦を願いたい。

### 一、8FD司の編成と完結後の情勢の急変

8FD司の編成下令はサイパン戦の直

確保に自信を有していたらしく思われた。当時台湾には独立第百四教育飛行団(以下104PBSと略記)がいたが、台湾及び南西諸島の戦備は殆ど裸同然であつた。十号作戦準備の一環として編成された8FD司について、中央は、二流、三流の司令部で事足りる、とした、と思われる。親補職たるべき飛行師団長山本閣下は、その高級指揮官としての資質(後述)は別として、少将で、したがって、飛行師団長心得であり、参謀部においては、参謀長古木中佐、先任(作戦主任)参謀の石川中佐は共に歩兵から転科して日浅く、共に伝統的陸軍航空の世界では、全く無名の人であつた。また、西参謀は航空への転科は早く、航空の部隊勤務は経験豊かであつたが、陸大卒業直後で、参謀勤務は始めてであつた。少し遅れて補任された筆者の如きに至っては、陸大転科組で、熊校に於いて操縦の真似事を習い、第一航空軍で見習的な参謀を一寸ばかりやっただけの、到底一流司令部の参謀と言える代物ではなかつた。

8FD司の編成は、第一航空軍司令部の管理と担当の下に十九年六月二十四日に完結し、月末に飛行師団長以下首脳は空路台北に進出したが、その頃は既に二十日頃には海軍が必勝を期した「あ」号作戦は惨憺たる敗北に終わって

おり、陸軍においても第三十一軍に対する兵力増強を上奏までしておりながら、二十四日には取止めを内奏する始末であつた。即ち、8FD司の編成下令時と編成完結、台湾進出時とは、決定的とも言える程の情勢の変化があつたのである。サイパン陥落は東條内閣の辞職をはじめ作戦指導に大転換をもたらし、十九年七月下旬捷号作戦計画が定められるに及んで、8FDは捷二号における主作戦正面を担当することとなり、俄に脚光を浴びることとなると共に、その作戦思想が問題化するに至つた。

### 二、8FD司の作戦方針に関する諸問題

「一つの司令部における用兵思想に関する中心人物は一人に限るべき」とは戦史の教えるところであり、それは司令官であつたり、参謀長であつたり、或は又、作戦主任参謀であることもあり、誰の思想によりその司令部が運営されているかにより、その司令部の性格が決まるのである。8FD司における用兵思想の中心人物は作戦主任参謀石川中佐であつた、と言つても誤りではない、と思われる。

石川参謀の立案した8FDの作戦方針は「邀撃は、出撃掩護を要する場合の他一切これを行わず、極力兵力の温存を計り、敵の上陸船団に対して一挙に

全力を指向する」にあった。その考え方の根底には、たとえ敵機の五機十機を撃墜し得ても、わが練達の空中勤務者一機を失えば、結局は負けたことになる、「所謂金持喧嘩せず」の反対の「ジリ貧」に陥ることを極力回避することであり、「見敵必攻」などの考えは潔くこれを捨つべし、というにあった。これは石川参謀が航空転科後下志津に勤務中種々考究を重ね、8FDの作戦地が台湾、南西諸島であると知った時から深く決するところがあつたものようであつた。

山本飛行師団長と石川参謀は同じ土佐の出身であり、性格にも相通ずるところがあつたようである。飛行師団長は全面的に石川参謀の用兵思想を採用し、その豊富な経験（航空本部における各種の要職、重爆戦隊附、同戦隊長、開戦劈頭の飛行団長、浜校校長等）に基づき適時に注意を与え、共に、大きく包擁掩護する立場をとらえた。

この作戦思想を実行可能にするためには、敵機の自由な偵察に対し、個々の基地に飛行機をはじめ人員器材を分散秘匿するための膨大な施設を要すると共に、基地網の編成も、敵機の乱舞下に全力の出動可能のためには、従来

PDの上級司令部たる台湾軍司令部は、当然嫌な顔をした。第一は、膨大な基地網とこれに伴う個々の基地の建設の担任は台湾軍の任務であり、地上防衛の為の陣地設備等構築との間に資材その他万般に亘り競合することとなるからであつた。

大東亜戦争開始以来今日まで、戦局を左右してきたのは制空権の有無であり、捷二号作戦に於いても航空の重要性を否定することはできないにせよ、ガダルカナル戦以来サイパンの失陥に至るまですべて制空権は敵手に落ち、

為に敗退を重ねてきたことを思うとき、8FDが敵上陸に際しては温存しありし全力を一挙に敵上陸軍に指向する、とは言ふものの、最初から制空権を放棄するようでは、8FDに依存すること、即ち地上防禦設備を相当程度犠牲にすることは危険であること、また、関係者に対し、セッセと航空基地を建設させながら敵機来襲の場合、航空隊は遮蔽下に引き込んで戦わず、ただ敵機の跳梁にまかせせることは、台湾軍としては忍び難いところであつたろう。

台湾軍作戦主任参謀と、8FDの石川参謀との間には会議等機会ある毎に、口論が繰り返されたようであるが、しかし、軍参謀長は「軍の第一の任務が航空基地の建設にある以上止むを得な

いこと」と言つて、軍作戦主任参謀を押し下げられた、と聞く。即ち十九年三月下旬発せられた「十号作戦準備要綱」には「本作戦準備ハ航空作戦準備ヲ最重点トシ爾他ノ事項ハ之ニ從属ス」と明記されており、例えば、沖縄の第三十二軍（以下32Aと略記）が築城に熱心にして航空作戦準備を二義的に考え、として八月中旬中央より叱責に近い注意があつた。そこで、32Aには飛行場設定のために専任の参謀が配属され、32Aも改めて力を注ぎ、東洋一と言われた伊江島飛行場をはじめ、沖縄北、中、宮古、石垣等の飛行場が完成するに至つた。というような当時の雰囲気であつた。

に來ると、却つて軍の怠慢を罵られるのが落ちて、その怒りのはけ口を隣村出身の後輩たる筆者に向けることが屢々であつた。

次は8FDに対する中央の不信不安であつた。邀撃を一切しなければ敵機の詳細綿密な偵察（特に写真）を許すこととなり、結果として兵力の温存が可能である、とは思えないこと、また、陸軍戦闘隊の伝統に背くものであり、志気の保持はなり難いであろう。特に、敵上陸船団に対し、一挙に全力を投入することが可能とは思われない、という主として作戦方針の実行可能性に対するものであつた。

これに対する石川参謀の論據は既述の「ジリ貧論」と、8FD作戦地域の特異性、即ち敵機の爆撃等に対し絶対に守らねばならぬ、というものはなく、住民皆協力的であり、基地網の設定に当たりては、豫想する兵力に対し、天明、薄暮等を利用し、数機宛発進せしむる如く、多数を有機的に構成すれば短期間に8FDの全力を敵上陸兵力攻撃に投入すること可能なり、というにあつた。即ち、内地にありては守るべきがあまりに多く、分散秘匿は別としても邀撃をやらぬわけにはゆかなかつたし、占領地域にありては、治安上8FDのような徹底せる分散することは危

険であり、邀撃不実施は結果的には風つぶしにあうことになり、また、占領政策をも考慮しなければならなかったろう。

8 FDの作戦方針は、実に8 FD作戦地域の特性がこれを可能にしたのであったが、ともあれ、戦略単位の部隊によるこのような考案は、陸軍航空始まって以来の椿事として、台湾軍や中央の他陸軍航空界の非難不評を浴びた。8 FD所属の戦闘戦(中)隊長以下の胸中にも複雑な思いがあったろう。台湾を通過する明野関係の先輩から罵詈雑言された者の話が筆者の耳にも入ったのを記憶する。

元来、人事が用兵思想統一のための最後にしてしかも最有効な手段であることは戦史の示すところであり、このままでは、飛行師団長以下参謀部の大部の更迭必至、と案ぜられたが、七月下旬百戦練磨の川元参謀が送り込まれ、最終的には九月初め参謀長の更迭となつて終わった。

川元参謀は敵の反攻開始以来の苦戦から痛いほど敵を知り己を知っていたので、8 FDの作戦地域の特質を活用した石川参謀の構想をよく理解したようであり、何よりもこの両者は陸大の同期としての懇意さがあった。新参謀長の補職を一番喜んだのは飛行師団長で

あり、その補職を知るや喜色満面、筆者等に対し「これで飛行師団も安心だ。今後は一切を参謀長に任せ、俺は左団扇だ」と宣言するように言われ、筆者には最後まで、その通りに実行されたように思われた。新参謀長は航空本部(航空総監部)の典範課長として航空作戦綱要などの編纂を仕上げた担当課長であったので、航空作戦綱要から短絡的に航空撃滅戦を連想した筆者は、この人事を、8 FDの作戦思想の変更を望む中央の意図のあらわれでは、と案じたが、これは飛行師団長が手放して喜ばれた通り杞憂に過ぎなかった。陸軍航空界にその名の高い新参謀長の補職は、8 FDを一流司令部に昇格せしむると共に、却つてその作戦思想をゆるぎないものとする結果となった。

8 FDの置かれた当時の状況は、かつての、見敵必攻の意気高らかに、集散離合、華やかな機動力を発揮して万事を攻勢的に解決してゆく本来の航空の観念を変えなければならなくなつていたと言えよう。思えば、敵の攻撃に対して、疎開、地形地物を利用して人員、飛行機等の損害を避けよう、とすることは正に歩兵的発想であり、邀撃をせざ、ただ一筋に上陸船団攻撃、ということは、これ又、対砲兵戦を回避して第一線に直接協力せんとする劣勢砲兵

の戦法に似ていると言えるのではなからうか。

### 三、台湾沖航空戦

従来から論ぜられた陸海軍航空部隊の統一指揮の具現化として、十九年七月下旬8 FDは海軍聯合艦隊司令長官の指揮下(他に1 FD、7 FR、98 FR)に入らしめられた。氏も育ちもまた目的をも異にするのみか、陸軍航空界においても異端視される用兵思想を堅持する8 FDとしては、派手なばかりで、勉強さのない、なんとなく頼りない感じの海軍航空に無理心中をさせられるのではないか、といやな予感がしたが、従う他はない大命であった。

八月猛台風が花蓮港附近から台湾を横断し、飛行機等に大損害を受ける、という事態が生じたりしたが、8 FDは懸命に既定の作戦計画に基づく作戦準備につとめながら十月を迎えた。

十月に入ると、敵の機動部隊の活動が活発になり、台湾及び南西諸島に來襲する気配が濃厚となった。この時になつて8 FDは今まであらゆる悪評に動ずることなく進めてきた「分散秘匿、邀撃不実施による兵力温存主義」を一擲して全力を以て邀撃実施に豹変せしめられることなるのである。全力を挙げてする機動部隊攻撃を企画する海軍

の指揮下にある以上是非もないことであつたが、筆者には、参謀部自体、邀撃実施に対する積極的な空気がなかった、とは言いきれないような気がしたように記憶する。即ち第十方面軍(九月下旬台湾軍と改稱、以下10 HAと略記)が対空兵器のみならず、山砲、速射砲まで繰り出して、飛行場、港湾等の防空に全力を注がんとする等の周囲の状況による刺激があつたことの他に、

「あ」号作戦までとは異り、此の度は、九州―南西諸島―台湾―比島と広く基地を利用して求心的に一点に攻撃を集中する利があり、海軍の攻撃の成功を期待する甘い考えが、参謀部に漂つてはいなかったか、と言えば泉下の石川参謀に叱られるかもしれない。大東亜戦争敗戦に至る過程を思うとき、台湾沖航空戦は十七年末に始まるガダルカナル戦に比肩すべき愚かにして重大な結果をもたらしたものであつた。ガダルカナル戦は海軍が距離的にわが航空機の作戦可能範囲を逸脱した地点に消耗戦を生起せしめ、陸軍を巻き込み、陸軍としてはまさに初級戦術に属する「所要にみたざる兵力の逐次使用」の見本になるような作戦となつた。消耗戦こそ敵の欲するところ、我れの敵に戒しむべきものであつた。

脱線するが、この忌むべきガダルカ

ナル戦生起の責任者は、聯合艦隊司令長官大將山本五十六の他当面の指揮官は、第四艦隊司令長官中將井上成美である、と聞く。前者は死するや国葬を以て遇せられ、後者は後に大將に任ぜられ、敗戦後は反戦、先見の提督として語られているという。固より、海軍の要請に易々と乗りし陸軍首脳の愚かなる、長恨盡きざるところであるが。

台湾沖航空戦はそれ自体もさることながら、更に重大なのは、捷一号作戦における第十四方面軍（以下14HAと略記）の作戦計画を根本から変更せしむるに至ったことである。即ち、台湾沖航空戦に於いては、敵空母の一隻をだに撃沈してはいないのに、十数隻を撃沈せりと上奏、御嘉賞を受け、また、国民を狂喜させた。この度もまたこれを盲信した陸軍首脳は、嫌がる14HAをして、「敵機動部隊潰滅したならば」と

比島における決戦正面を急遽レイテ島に変更せしめたが、案に違い、制空制海権なき長路の海上輸送を伴う遭遇戦的な兵力の逐次使用となり、惨憺たる敗北を招くに至ったのである。当時8FDは捷二号は固より捷一号作戦に於いても重要な役割を担当していたので、比島に於ける決戦正面の変更に關する關係方面間の確執については折々に耳

に入り、統帥というものの難しさを今更ながら感じたのであるが、思いもよらず、天一号作戦の場合には、8FD自身イヤというほど経験する羽目になるのである。

間もなく海軍の戦果発表が荒唐無稽であることが分かるに伴い、その海軍の指揮下にあったとはいえ、指揮下部隊を潰滅せしめてまで、その一翼を荷ったことについて、持って行き場のない苦悩に陥ることになった。そうでもなくとも参謀部には悔やむことが多かったのである。

まずは独立飛行第二十三中隊（以下23PCSと略記）を孤軍沖繩で潰滅せしめたことであった。敵の大機動部隊に対しては、台湾における8FD主力でさえ比較すべきもないほど劣勢なるは明らかなるに、沖繩の23PCSは正に九牛の一毛にも当たるまじ、と思われた。参謀部内には23PCSはこれを台湾に引き揚げ、主力と合同して敵に当たらしむべし、とする意見も強かった。しかし、沖繩の32Aが自己の防衛施設の建設を犠牲にしてまで飛行場の建設に当たってきたのに、イザとなると飛行部隊を引き上げる、というのでは、筋が通らないのみか、32Aに対して決定的とも言えるほどの不信感を植え付けることとなる。中間司令部には、己の指揮下部隊

をして最大の効果ある忠死を遂げさせる、という責任があると同時に、中央の意図する作戦目的を達成させるため直接の、或はまた、その作戦目的に沿わなければならない友軍との適切な協同のための責任をも有する。例えば、「航空作戦準備をもって最重要とし尔他の事項は之に従属す、」とする中央の方針を結果として打ち壊すような行動はこれを全軍のためにもしてはならないことであった。とに角、風前の燈火に等しい23PCSの運命を認めつつ、沈思していた石川参謀の面影が髣髴としてくる。

次は飛行第十一戦隊（以下11FR略記）についてである。11FRは第十二飛行団に属し、比島への前進の途次にあり、防衛に關し8FD長の区処を受けるのみは霧であることを知った8FD司は11FRに対して邀撃中止の命令を出すべきかに迷った。新しい四式戦の戦闘戦隊としての矜持と、果敢な性格の持主のように思われる金谷戦隊長とを思い合わせる時、無理な出撃、不利な態勢を以てする空中戦闘が慮られた。しかし結局戦隊長の判断に任すこととしたが、案じた通り、戦隊長以下不利な態勢の中に悪戦苦闘、相当の戦果を収めたが、衆寡の勢い是非もなく、陸軍航空の虎

の子といわれた最初の四式戦の訓練された戦隊を潰滅させる結果となった。

更に、特に悔いの残るのは二式複戦の第三錬成飛行隊を邀撃に使用したことであった。これは純然たる過失といわれても弁解の余地はないであろう。二式複戦がその性能上グラマンF6Fなどと太刀打ちできないことは知られており、加えて錬成飛行隊長の強い意見具申があり、一度は使用せず、と考えながら、結局出動を命じたのは、一つに地上軍的感覚の致すところであったのではないか、と思われる。即ち11FRをして敵戦闘機と交戦せしめ、その間、低空にて対地攻撃する艦上爆撃機を、二式複戦をして攻撃せしめる、という歩、戦、砲の協同を律するようなことではなかったか。当時、空地の通信施設は皆無に等しく、在空中機に対する地上よりの指揮は全く、と言ってもよいほど出来ず、「一度離陸した飛行隊の戦闘指揮はそれまで」の状況にあった。ちなみに、阪神方面の防空担当飛行師団の参謀をしていた筆者の同期生の話によれば、十九年七月頃既に、ほぼ五十軒以内の在空中機に対しては地上より一令一動の戦闘指揮が可能であったとのことであるが、8FDの通信に關する作戦準備の遅れはひどかった。また、宜蘭が霧では11FRの四式戦との巧妙な

協同は出来ないことを思ふべきであり、予想する来襲敵機とわが邀撃戦闘隊との衆寡の懸隔の大なること、しかも受動の立場にある邀撃であり、戦爆協同して計画的に進攻する場合は自ら異なるべきを知るべきであつたろう。

かくて、十月十二日、敵の大兵力を以てする波状攻撃に対し、23 FOS、11 PR、20 PR、104 FBSの集成防空一、二隊が、沖繩及び台湾各地に分散してあたかも各個撃破の如き憂き目を見ることとなつた。8 FDが、海軍の命により、兵力温存の方針を一擲して邀撃した目的は、敵兵力の滅殺の他に、敵機動部隊を台湾近海に抑留して海軍の攻撃を効果的ならしむためであり、そのため、広く各地で邀撃するか、全兵力を一地域に集結するか、問題となるところであつたが、衆寡の勢に対し、強固な戦闘を続けることが肝要であり、十二日における前者による分散しての邀撃は戦術的に失敗の譏りは免れず、ここに於いて、十三日には急遽残存兵力を北部台湾に集結使用することとなつたが、台湾沖航空戦については数々の悔いを残すこととなつた。

ある。敵機動部隊は大攻撃を受けて潰走中と誤断したらしい聯合艦隊は全力を挙げてこれを追撃することとなり、十四日第二航空艦隊は8 FDに対し敵機動部隊に対する直接の攻撃を命じた。当時8 FDは比島に転進準備中の前記の戦隊を有していたからである。海軍よりの通報による、敗走中の敵艦隊を想像するとき、それに止めを刺すべき攻撃は魅力のあることであつたが、既に戦闘隊を消耗し尽した現在、昼間全く掩護なしに、或はまた夜間の攻撃を命ずることが、適当かは甚だ疑問であつた。しかし、これは命令であり、「抗命」と問われかねないことであつた。既述の通り、一切を委されていた参謀長もこの件については、飛行師団長に自ら決心していただこう、ということになり、飛行師団長は沈思することしばらくの後「使用せず」の決断を下した。傍らから見る限り緊張したような空気など感ぜられなかった。敵を知り、己を知る飛行師団長のかねてより抱き続けてきた統率に関する信念がごく自然に出てきたもののように思われた。戦史は積極的独断はやり易いが、消極的独断専行は困難であることを教える。まして、当時の状況からすれば、大東亜戦争に小さいながら一転機を及ぼしかねない好機とすら疑われ、攻撃不実

行は、戦史に汚名を残しかねない独断専行、否、抗命ではないか、と案ぜられることであつた。後のことになるが、中央部において、海軍側から、「8 FDの抗命」として「軍法に照らしての処置」の申入れがあつた、と仄聞した。これは筆者の私見にすぎないが、直接將兵に接する下級指揮官はその人格が部隊の統率に大きく影響するが、戦争作戦の指導に任ずる中央の首脳や、一方の作戦を担当する高級指揮官は何よりも敵を知り己を知り、そして特に先見の明を以て大局を処する能力を第一義とし、極論すれば、所謂人格などは第二義的なものであつても止むを得ない、と考える。

山本飛行師団長は平常は色々話題豊富、面白い方であつたようであるが、高級指揮官としての資質は正に一流の方であつた。筆者は、台湾沖航空戦は、8 FDの作戦方針のうち批判的であつた、分散秘匿による兵力の温存と、少数機ずつの一斉出撃の可能性を証明してくれた、と信じた。十月十二、十三日の一日延千数百機に亘る敵機がわが作戦地域の上空を覆う密度——これも地上軍的な感覚、発想であろうが——をも感じとつた心地がしたし、自身台北飛行場に赴いて、久しぶりに銃火の下に身を曝し、始めて見る敵機の傍若無人な攻撃ぶりをつぶさに観察し、得るところが多かつた。

#### 四、時の推移

8 FDは捷一号の発動に伴い、その主任務は第四航空軍に対する協力、となつたが、内部的には、台湾沖航空戦に於いて潰滅的打撃を受けた部隊の戦力回復と、既定の作戦計画に台湾沖航空戦における戦訓を取り入れて作戦準備に余念がなかつた。幸いなことに十月下旬になると海軍の指揮を解かれ、まさに桎梏を脱した思いに心の底からヤレヤレとほつとするのであつた。

十一月になると、飛行第五百、同第百八戦隊の編成が令せられ（以下105 PR、108 PRと略記）、機種は105 PRが三式戦、108 PRは二式双発高練と定められていた。当時三式戦は戦闘操縦者に好まれないようであつたが、やがて三式戦は8 FD戦闘隊戦闘機的主力となつていた。輸送戦隊たる108 PRの装備機が双発高練であることは、その性能上敵機に見えない僥倖を恃みとする他ないことを思うとき、心を痛ましむるものがあつたが、当時の陸軍航空の貧窮上致し方ないこと、諦めざるを得なかつた。105 PRは、20 PR、29 PR、246 PR等の比島へ転進後8 FD戦闘隊の中核となるための訓練に精進し、108 PRは、8 FDの渴望していた各

種航空機の部品の内地からの空輸等に大なる貢献をすることとなった。

また、特筆すべきことに、104 Fbは主力の復帰があった。これまで104 Fbは陸軍航空全般の為の操縦者等の補充源として重要な地位を有すると共に、8 PD作戦準備の為の資源であった。この矛盾する両者の調和を計ることは、特に

後方と編成を担当する筆者にとっては、悩みの種であったが、中央に於いては、比島の戦いの敗色が逐次決定的となるに従い、その操縦者等の補充源としての任務を解いたのである。104 Fbは台湾沖航空戦に於いては集成防空第一、二隊を以て邀撃に任じたが、その復帰後は人的物的両面に亘り8 PDの後方を支える大きな支柱となった。104 Fbの人的物的遺産がなければ8 PDの作戦準備は不可能であったといっても過言ではない、と思われる。既述の8 PD作戦地域の特異性と、104 Fbの存在とが8 PD独特の作戦計画を成立せしめた陰の土台であったのである。

比島の敗色濃厚となりつつある間に、特別攻撃戦法が逐次普遍化するに至った。8 PD司にとって次期作戦を思うとき、他人事ではなかった。早晚決意しなければならぬこととして、戦闘指令所内に重苦しい空気が漂っていたが、先ず覚悟を定めたのは、作戦主任参謀

であった。

「我、人共に遅れ先立つのみ」と、疾く心定めていたはずの8 PD司であったが、特別攻撃を実施することにはスツキリと割り切り難いものがあった。

十一月下旬遂に中央に於いても踏み切ったと見え、②号第十五、十六、十七の三飛行隊（以下誠15、誠16、誠17と略記。他の特別攻撃隊についても同じ）の編成が示達され、三隊共8 PDに配属する旨が示された。そしてそのうち誠17は8 PD自ら編成を管理することと定められた。かくて特別攻撃について苦悩の日夜を送られた飛行師団長と参謀長もこの期に及んでは、と決意されたように見受けられた。

##### 五、青天の霹靂

8 PD司内に於いては、覚悟も定まり、作戦準備の推進に没頭していた十二月中旬、実如として青天の霹靂が下った。沖繩の32 Aから第九師団（以下9 Dと略記）を抽出して台湾に転用するといふことを8 PD司が知ったのは、9 Dの船団護衛に関する10 HA命令によってであった。筆者はその時戦闘司令所内を走った衝撃が今も髪髯として浮かんでくる。参謀長、石川参謀は固よりそうであったらうと思われるが、筆者の脳裡を電光のように走った思いは、32 A

から9 Dの抽出↓32 Aの作戦方針即ち決戦思想の変更必至↓主防衛線の変更縮小↓航空基地の放棄↓天一号の場合敵基地戦闘隊早期進出の実現↓台湾から七百軒を隔てた攻撃の困難化、という一連の連想であった。「なんということを!!」期せずして顔を見合わせて息を呑んだ。「しかも転用先が台湾とは、それでは、まるで親（10 HA）が、子（32 A）の命をつなぐ握り飯を取り上げて自分が食べられるようなものではないか、もはや32 Aに対する10 HAの統帥は終わりだ、また、当然猛反対を予期する故、8 PDを豊稜敷に置いて事を決するとは。」戦闘司令所内にはやる方のない憤懣が次々に溢れた。

32 Aの長参謀長は、十九年七月頃から沖繩の防衛を精細に検討し所望の兵力を具申し、中央は珍しくもこれを充了した。しかも敵が比島にかかりあっている間に築城のための時間の余裕もあった。したがって、沖繩こそはガダルカナル以来の悪弊を断つものであり、所望の兵力を与えられた長参謀長は石川参謀に対して豪語した由である。「米軍よ、沖繩に來れ、32 Aは大東亜戦争に一転期を画すべし、航空など不要なるも、それでは山本（8 PD長のこりと、長参謀長と同期生）に気の毒故敵輸送船の二、三隻を残しておくべし」

などと。それが今や一ヶ師団を引き抜かれたのである。もともと比島戦のため台湾から兵力を引き抜いたのでそれを充足するためであったが、それが10 HAの要請に基づき中央が32 Aから抽出する旨申し入れたのに、10 HAが唯々として受け入れたということが特に統帥上の問題を残すこととなった。

果せるかな、9 Dを抜かれた32 Aは作戦計画を変更し、事実上、沖繩北、中飛行場等を放棄した。8 PDでは石川参謀を東京に派遣し、32 Aに対する9 Dの代替一師団の派遣を要請すると共に、32 Aに対しては飛行場の確保を要し、10 HAに対しては前者を、止むを得ざるも後者を、その責任に於いて実現せしむべきを強く要求した。9 Dの代替師団の内地からの派遣については色々な経緯の後、増派の旨32 Aに通報する段階まで至ったが、日を経ずして、宮崎第一部長（参謀本部）の反対により取止めとなり万事休した。9 Dを抜かれたことは、前述の如く、自信満々の32 A司令部を奈落の底に突き落とし、そのための兵団の配備変更は、各部隊にとって、宮々として構築した陣地を棄て新たに第一歩から始めることであり、既にセメント等の築城材料は欠乏しており、志気の阻喪、まことに辛い思いであつたらうと、8 PD司内は暗然

とした記憶がいまだに生々しい。中央は32Aに対し、代替兵力の補充はせず、飛行場の保持だけは強くこれを要求した。10HAも中央の指示により要求したが、32Aは事実上冷くこれを拒絶した。

中央は内地防衛を、10HAは自らの所在する台湾を重視し、沖繩を軽視するならば、32Aは戦える限り戦うも、自らの最期は自ら選ぶに任すべし、という心境になるのもまことに止むを得ないことであつたらう。

かくて、中央、10HAの32Aに対する統帥は自らこれを放棄することとなつた。沖繩戦の途中に於いて、敵は損害の大に堪えかねて、沖繩攻略の中止を具申する事態すら起こつたことを思えば、「9Dの抽出なかりせば」の怨み、縷々として盡きないものがある。

特別攻撃戦法について苦悩の末、前述の如く、ようやく思い定められたかに見えた飛行師団長と参謀長は、9Dの抽出による32Aの作戦方針等の変更、中央、10HAの有様を思い、作戦の前途を按ずるとき、再びこの戦法の採用について苦悩が起こつたかに見受けられた。しかし、天号航空作戦が示され、8FDに十一隊の特別攻撃隊の配属が通達され、また、広く陸軍航空の実力等を思うとき、止むなし、と決する他はなかつた。しかし、先の台湾沖航空戦

を反省しつつ、戦局の将来を思うとき、孤高独往こそわが進むべき道であつた、との決意を固めていった。

#### 六、孤高独往の道

時は推移して、8FDの作戦準備は次第に所望に域に達しつつあつた。ガダルカナル戦以後、航空としても、自主的な作戦計画の下に、十分な作戦準備を整え得て敵を迎え撃つ初めての好機であるはずであつたが、天一号の場合を思うと、戦闘司令所には陰鬱な空気が漂うのであつた。8FDはその誕生の時から、その独自の用兵思想故に四面楚歌を味い、台湾沖航空戦には誰も口には出さなかつたが、海軍の尻馬に乗つてしまった自らの軽薄な心の動きを噛みしめて、今後は自らの作戦方針に絶対の忠実を誓っているかと思えた。

8FD司では天一号の起こることを憂慮した。既述の通り、沖繩に地歩を占めた敵の基地戦闘隊の待つ七百軒の彼方への攻撃を思うとき、天一号は、息の長い靱強な戦いの必要が予想された。そのための一つとして8FD戦闘教令の中に示された「戦闘戦(中)隊長の地上指揮」があつた。これは、後方及び編成を担当した筆者の、戦力の維持、回復の見地からの提案であつたが、攻撃隊に対する形面上下のすべての指導

のためには、戦(中)隊長が最後まで生きていることが絶対に必要なり、とする参謀長、作戦主任の考えと結果的に一致することとなり、飛行師団長もすんなりと受け入れられた。このこと

が明野の伝統はもとより、航空兵操典の趣旨に背き、何よりも戦(中)隊長を苦しめることになることは、十分承知の上のことであつた。指揮官として、部下にのみ必(決)死の攻撃を命ずるよりも、「俺について来い、」という方が、気が楽なことは分かつていた。筆者自身、歩兵の中隊長の折、次々に目の前で斃れて行く部下に対しては、敵の弾雨、手榴弾幕の中を常に自ら率先陣頭に立つことを以て詫びとしたことを思い、この処置が統率の常道でないことを知らないわけではなかつたが、戦局ここに至つた今は、一切を超越すべきである、と信じた。戦(中)隊長達もまた、「我れと部下、ただ遅れ先立つのみ」の心境になつてくれるはずであつた。

比島戦はわが完敗となつて終わり、これより先、昭和十九年末、内地に第六航空軍(以下6FAと略記)が創設され、天一号の主役は6FAと定められ、それまで天一号対策に腐心してきた8FDは脇役に廻されることとなつた。また、中央に於いては、内地決戦の思想

が強まりつつあるかに見えた。9Dの代替師団を32Aに送らないのも海上輸送の危険に藉口した内地重視にあるのではないか、と疑われた。

戦局の推移を広く深く見通して、先んじて手を打つことが高等司令部にとつて最緊要なことは分かつていながら、このような状況下における8FD司の苦悩は言い知れぬものがあつた。その中で、或は表面的のみであつたかも知れないが、常に希望を失わず旺盛な志気を保持して、戦闘司令所に明るさをかき立てていたのは石川作戦主任参謀であつた。32Aが持久に転じた以上、長期間となる場合を想定せざるを得ない天一号の場合、32Aと8FDとのいずれの戦力の枯渇が先か、それとも幸いに、敵をして沖繩攻略を断念せしめ得るか、いかにしても8FDは不死鳥の如く戦力の維持、回復を計るための処置を講ずべきであつた。殊にもし、32Aが悲壮な最期を遂げ、内地決戦となつたときを思うとき、敵攻勢の最重要な根拠となるべき沖繩に対して背後より攻撃をなし得るのは、8FDのみであり、その折8FDは飛行師団長以下主力を挙げ、沖繩に対して殴り込みを実施すべく、即ち敵が退却しない限り、8FDの最期は天一号に於いて迎えるか、内地決戦の際沖繩に突入して終わるか、いずれ



にしても、情勢の推移により迷うこともあるまじく、戦(中)隊長の地上指揮を解く日も明瞭なはずであった。

因みに、8 PD司は自らのために、誠15、16の両飛行隊を控置した。誠15は二十年一月中旬嘉義に於いて隊長が戦死し、その後訓練中の事故が相次いで戦力を失っていったので、誠25に切り換えた。固より、このことは文書などに記すことはなく、参謀部内でも以心伝心の間の定めであった。或は石川参謀からの内々の指示があったかもしれないが、両隊長には訓練の指示の他その旨はなかったと思う。

右のように、各戦闘戦(中)隊長に生き続けてその最期を迎えるまで戦(中)隊の不死身を計るといっても、空中勤務者の他、飛行機や燃料がなくなってしまうとは如何ともし難いことであるが、飛行機の再生は兵器部の周到な計画の下、各基地に残された廃機と、108 PRが内地より空輸した部分等により、修理廠や整備隊によって百数十機に達した。再生のもととなった飛行機は8 PD固有のものもあったが南方向けの補給機で、被弾放置されたものが多かった。8 PDでは通過機のために乏しい作戦用燃料を消費する事を恐れ、早くから南方向けの補給機や部隊が台湾経由をしないよう関係方面に要請して来た

が一向に埒はあかなかつた。捷一号に敗れ比島からの敵機の来襲が繁くなるにしたがい、南方向け飛行機の被害は増加した。これらの飛行機は遠距離への分散を嫌う傾向もあり、当時飛行機そのものの質も落ちていた。8 PDとしては貴重な乏しい修理用部品、特に108 PRが双発高練で空輸したものをこれ等の飛行機に使用する余裕はなかった。南方軍筋からの8 PD司に対する抗議は激しく、筆者などは「泥棒」「掠奪」などと罵られたこともあった。しかし、8 PD司には、「憂慮すべき天号航空作戦を前にして、この期に及んでもなお南方向け飛行機の補給を行うことは中央の大なる過失に属す。8 PD司はこれを矯正するのだ。」という不逞ともいべき思いがあり、抗議はこれを柳に風と受け流し、却って飛行機の台湾經由をしないように要求した。

もう一つの重大要素たる燃料については、南方軍の仕立てた恐らく最後と思われる内地向けの燃料輸送船団のうち撃沈を免れた一隻が高雄港に辿り着いたが、中央も流石に内地までの輸送を断念してそっくり8 PDにくれたのである。連日の爆撃の中に幸運にも一缶の損害をも受けることなく一万八千のドラム缶の揚陸即時分散に成功した。また、操縦要員等は104 PRの復帰した

者や、滞留者等未熟ながら補充し得る見込みであったし、整備力は104 PRの遺産と修理廠の他に、民間工場の協力等もあり、かくて、戦(中)隊長を中心にして、朝強な戦いを続行してゆくための諸要素は、微かながら光明を得ていた。

天一号の場合、8 PDの戦法には、特別攻撃の他、九九軍偵の独立飛行中隊六隊による月明夜間の降下爆撃があった。偵察(航法)者席にまで増槽設備をした燃え易い飛行機に二五〇疋の爆弾を抱いて、月明とはいえ、洋上遠く、敵艦の弾幕の火の海に飛び込んでゆくことは、精神的に、技術的に大変なことであった。軍偵の独立飛行中隊の場合には、「中隊長の地上指揮」の掟がなかったもので、各中隊長概ね常に、中隊長が率先してこの任務に服した。為に中隊長と優秀な同乗者が次々に戦死していった。「軍偵中隊に対してもむしろ戦闘隊と同様な扱い、即ちむしろ特別攻撃を命じた方が情けでは」という意見がないではなかったが、作戦主任参謀の意志は固く、既述の思いに徹し、冷酷な統率と言われてもひるむまじとの決意を強めているかに思われた。この戦法をとったのは、従来対潜警戒に任じ洋上飛行に経験の多い空中勤務者と、爆弾搭載力の高い九九軍偵を一度だけの攻撃で散華させることを惜

しみ、生還の可能性の残る降下爆撃を選んだのであるが、更には、ようやく諦めて特別攻撃戦法に踏みきったというものの、「特別攻撃戦法ただ一途」ということに対して依然として心の底に残るものがあったから、ということも否めなかつたであらう。ただ石川参謀は転科後下志津で、偵察機の用法については自信をつけるだけの研究をしてきているようであった。地上に於ける勇者は航空に転じても呑み込みが早いだろうと思ひ、皆とやかく言うのを差し控えた、と言えようか。石川参謀は、全身いたるところ戦傷の痕だらけで一緒に入浴してよくこれで生きていられた、と呆れたものであった。なお金鶏勳章二個の所有者であった。この攻撃の実態を知るため、参謀として一度でも同乗してみるべきだと思ふことしばしばであったが、夜間洋上航法の技倆皆無の悲しさ、大切な航法者を押しのけてただ何物になるだけの身であった。筆者は恐らく石川参謀は同乗しようとして、参謀長に固く不許可を命ぜられたに違いない、と思つてゐる。かつて10 PRの沖繩偵察に偵察者としての同乗を禁ぜられる場面を見ていたからである。

9 Dを上級司令部たる10 HAに取り上げられたために、不本意極まる苦戦を

続ける32Aに対して、10HAとして助け  
てやれることは、8FDの攻撃による支  
援のみであった。さぞや10HAとしては  
8FDに対する要望は多かつたろう。し  
かし、10HAには、自らの処置故に8FD

の攻撃を困難ならしめた、という負い  
目が大きかつたろう。「今はわが道を  
行くのみ」と、狂瀾に対して動じない

岩礁のような8FD司に対して、10HAか  
ら時折8FD戦闘司令所に来るのは、10  
HA先任航空参謀ただ一人であった。

(10HA航空参謀のうち一名は増加参謀  
として8FD司の一員となっていたが)

同じ台北の程遠からぬ場所に位置する  
両司令部故、普通ならば参謀等の往来  
は激しいはずであるが。10HA先任参謀  
が来た折は、参謀長と作戦主任参謀の  
みが、荒削りのコンクリート打ち放し、  
土間、裸電球一個がぶら下がった飛行  
師団長室を使い、話すのを常としたの  
で、筆者などにはその具体的内容は分  
からなかったが、肩を落として無言の  
まま帰ってゆく後姿や参謀長、作戦主  
任参謀の態度などから、ヤレヤレ因果  
応報か、などと思うのが常であった。

なお、当時交替していた10HA先任航空  
参謀は筆者が歩兵少尉に任官した折の  
将校団の先輩でもあったので、その悄  
然とした後姿は特に印象に残っている。

要するに8FD司は、自らの信ずる道

以外には上級司令部であれ、何であれ、  
容喙を許さない気魄に終始した、と言  
い得ようかと思われた。

### 七、敗戦、瓦全への道

繰り返して述べるが、9Dを抜かれ  
ぬ前の32Aと8FDは、ガダルカナル戦  
以来始めて周到な作戦計画に基づく作  
戦準備を達成して敵を迎え撃つ好機で  
あった。それを、地上においては、9  
Dを引き抜くことにより、32Aをして

従来の島嶼防衛と同様のものとしてし  
まい、また、航空においては、敵機動  
部隊の行動に振り廻され、わが実力を  
顧みることもなく徒らに戦力を消耗し、  
為に天一号の場合、海軍も6FAも作戦  
準備は未成であった。8FDは、作戦の  
基盤となる準備は整ったものの、配属  
される予定の飛行隊は一隊すら到着し  
ないまま、固有していた兵力のみで、  
全軍に魁けて攻撃を行うことになって  
しまった。

天一号が敗北に終わった後も、作戦  
主任参謀の志気は衰えることなく、依  
然として沖繩に対する攻撃を続行する  
と共に、イザというときの沖繩への段  
り込み的攻撃による、たとえ一時的で  
あっても制圧するための準備に余念が  
なかった。早くから台北大学に時限爆

発装置について相談したり、また、

「石川参謀の車輪パンク」と称せられ  
た投下装置や、毎晩のようにやって来  
る敵大型機を不時着させるための邀撃  
命令の珍奇さに、驚いた記憶の残って  
いる人もいるであろう。32Aが悲壮な

最期を遂げるに及んで、ようやく、中  
央は南方軍所属の主要飛行隊の引揚げ  
にかかり、8FDに総て転属した。南方  
軍とてももとより困難な作戦に腐心し  
ていたであろうが、戦争全局の山は、  
なんと言っても天一号であり、沖繩が  
敵手に落ち、内地と南方が分断されて  
しまった段階での転用は遅きに失した、  
と言わざるを得なかった。しかしなが  
ら、このために、8FDの戦力は天一号

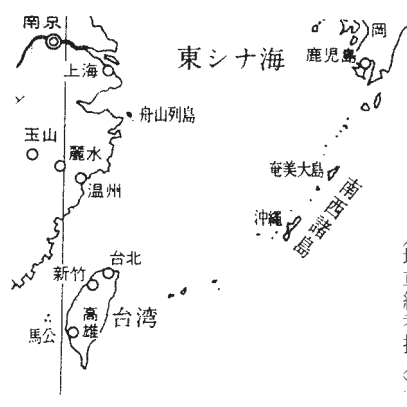
開始前に勝るものとなり、8FD司は本  
土決戦の好機に、「8FDに最期」と予  
定していた飛行師団長以下の段り込み  
が花々しくできるもの、と志気昂揚し、  
七月下旬には飛行師団長会同を実施す  
る状況であった。しかし、8FDが志気  
旺盛となりつつある間に、中央では新  
型(原子)爆弾による被害等により急  
速に降伏に傾いて行っていたのである。

期するところがあり、石川参謀のひそ  
かな地上師団長歴訪が行われ、陸軍大  
臣からの「驀直進」の檄もあり、事は  
進むかに見えたが、案に違い、遽かに  
大命が下り、アツと言う間もなく事は  
休した。承詔必謹についていささか複

雑な思いがないわけでもなかったが、  
萬事休した今になってから、誠16、25  
などを道連れにすることは許されない  
と観念せざるを得ず、はるかに沖繩の  
空を望みつつ「我、人共に遅れ先立つ  
のみ」と、自らを叱咤しつつ苛酷なる  
統率に目をつぶり、指揮下部隊長をも  
巻き込んで来たことへの怨念のみが8  
FD司には残るのみとなった。

茫然として我に返れば、四十近い飛  
行場に、ただ作戦一途をのみ考えて、  
生活の大部を地上兵団に依存して来た、  
隷下部隊があった。これらを、いつま  
で続くか分からない屈辱の生活、自存  
自活への軍律を維持したままの切换え、  
更には、勝者たる敵軍との接衝に予想  
する忍辱が8FD司に課される新たな任  
務、と思うのであった。

(埋草編者挿入)



## 花負ひての歌に因んで 高千穂部隊の出陣について 忘れ難い思い出

田中 賢一

その頃内地に在る挺進部隊の主力は、宮崎県の川南村を基地としていた。

挺進第三聯隊の動員は十九年十月二十四日に下令された。この時私は陸軍挺進練習部の下士官候補者隊長をしており、隊長室にいたが、練習部高級部付徳永大佐から呼び出しがあつて、動員を知った。下士官候補者はすぐ原隊に帰せという。当時聯隊は戦時編制通りになっているので問題はないが、続いて動員下令されるであろう第二挺進団司令部は、挺進練習部で編成しなければならぬ。将校は動員計画で戦時命課がきまつていて、挺進団長は徳永賢治大佐、私は部員に内定していた。

徳永大佐は私に命じた。三聯隊は空母に乗って比島に向かうことになったので、直ぐに佐世保に行つて準備せよと。中央からその指示があつたのは午後だったと記憶する。私は夜の急行で佐世保に向かった。その前に下士官候補者隊に戻つて解散を宣した。区隊長は練習部と聯隊から出ており五人いた。顧みればこの人達は全部戦死してしまつた。准尉は一人、この人も戦死した。

今でも一人一人の顔が鮮明に思い浮かぶ。

私は佐世保に行き先ず海軍と打ち合わせた。空母は隼鷹で間もなく入港するという。次いで重砲兵聯隊へ行き部隊の宿泊について打ち合わせて、聯隊長達の泊る宿を設営した。そうこうしているうちに部隊が到着したので、その晩は聯隊長の宿舎で一献汲み交わした。居並ぶ者、聯隊長白井恒春少佐、聯隊付土屋茂少佐、副官河野寿大尉、中隊長(番号順)松下兼道、桂善彦、大城隆、蓬田正之、重火器中隊長久富薫大尉、私にとっては皆訥懇な間柄だった。中でも白井聯隊長は十期も先輩であつたが、高鍋における借家が隣だったので、家族ぐるみのお付き合いで、毎朝声を掛け合い家を出て、通勤バスの停留所へ向かうという深い御縁だった。

その晩は灯火管制のほの暗い室内で、特に気負うこともなく、また悲壮感もなく、寛いだ一時を過ごした。思えばあの顔触れのうちで大城大尉以外すべて帰らぬ人となつた。大城大尉と久富大尉は第二次挺進部隊だったが、作戦打ち切りとなりルソン島で戦い、久富大尉は戦死し大城大尉は生き残つた。そのほかの人はレイテに降下し、聯隊長と蓬田大尉以外は何処で戦死したのか

さえも判らない。

話は元に戻り、将兵は翌日乗艦した。岸壁で見送つた私に先日まで下士候補にいた兵長連中は、私の前を通るとき懐かし気に敬礼してくれた。乗艦したら付けると言われたとて伍長の階級章を見せた者もいた。規則では十二月一日任官なのに、聯隊長が専行したのである。新任の伍長達レイテに降下した者に一人の生存者もなく、ルソン島やネグロス島に戦つた者に僅かに生還者があり、戦後二人ばかり出会つた。白井聯隊長に何か奥さんにお伝えすることはありませんかと申すと、何もないと言われ、私も追付け参りますと言つて別れた。

さて私は任務を終えて帰つてみると、徳永大佐が言うのには、稲本が戻つて来て是非連れてつてくれと言うので、部員を譲れとのこと。稲本少佐は以前三聯隊の本部付だったが、一年ほど前に航空士官学校付に転出していた。それが今度の動員で人が不足すると中央で思ったのか、練習部付として戻されてきた。彼の言分は田中は第一回の時部員として戦場に出ている今度は俺の番だと、徳永大佐に強硬に食ひ下がつたということだった。それに私の就くはずだった職は編制表では少佐である。彼は私

より一年先輩で私はまだ大尉である。譲らざるを得なかつた。結局私は練習部付としてとどまり、一月後に二代目の挺進戦車隊長に補せられ、内地に残つた。

志をともした亡き人達に対する思ひは尽きない

ここで佐世保の宿で杯をかわした人達の最後について触れておきたい。白井聯隊長については「忘れ難い人」という題で会報47号で述べた。

土屋少佐は聯隊長と共にブラウエン北飛行場に降下した。何十名かの部下を掌握し敵の施設などを破壊し大活躍したが、聯隊長の一行とは合流出来ず、第十六師団の歩兵第二十聯隊と一緒に戦闘し、その最後は明らかでない。

河野副官は聯隊長に従い、ブラウエン確保を断念し28高地に在るとき、聯隊長に命ぜられ第十六師団に連絡に出て消息を断つた。

松下第一中隊長は聯隊長と同じブラウエン北飛行場に降下した筈だが、全く消息が判らない。

桂第二中隊長はブラウエン南飛行場に降下する計画だったが、隣のサンパブロ飛行場に降下したらしい。

米軍の資料によれば、この飛行場は

大混乱に陥ったとある。この飛行場には第四聯隊の穂田大尉の指揮する一コ部隊が降下することになっていた。一部は飛行場で十日まで頑張つて玉砕し、主力はその前にプラウエン方向に移動したと述べているので、移動したのが桂中隊だろうと思うが、それ以上のことは判らない。

蓬田第四中隊長は降下直後から聯隊長と行動をともし、軍司令部のあるカンキポットに辿り着いた。四聯隊の健全な者が軍司令部の護衛としてセブ島に脱出するとき、四聯隊四中隊長の香月大尉が衰弱甚だしい蓬田大尉を連れて行こうとしたが、聯隊長の死んだこの地で死ぬとて肯んじなかった。

久富重火器中隊長はルソン島に残り、聯隊長無き後聯隊の残部を指揮して戦った。バレット峠の戦闘などは戦史に輝く奮戦であるが、その後カガヤン河谷に転進し、飢餓甚だしい中よく部隊を統率して行動していた。八月一日ヒルモヘルモサという部落で病没した。

大城大尉は無事復員したが、先年交通事故で亡くなった。

私と交替して司令部の部員となった稲本少佐については、会報57号で述べたが、35軍司令部と同行していてファトンで戦死した。

## レイテに咲く花

一、神の歩みし日向路に  
秋の祭の夜は更けて  
飛電は告ぐる捷一号  
今宵名残の笛の音は  
庭のさんしよに鈴掛し  
想いの人よ我が胸は  
武夫の道ふみゆかん  
疾きこと風の如く去ぬ

二、①「今日咲きて明日散る花」と若人の

②「悲しき命積み重ね」  
神風呼ぶか 特攻に  
ルソンの基地は火と燃ゆる  
「雲染めて屍悔いなく散る」という  
サンフェルナンドの壁の文字  
目指す主力はプラウエン  
サンパブロ ドラグ タクロバン

三、鵬翼千里 南冥の

空を圧して進めども  
逆巻く砲火如何んせん  
辛くも降りし 百余名  
プラウエンに屯せし  
敵雑軍は蹴散らせど  
後援続かず補給なく  
剣は折れて矢弾尽く

四、③拔山蓋世の勇あるも

時に利あらず驩逝かず  
捨つる命は軽けれど  
青史に一言残さんと  
五十余日の山越えに  
聯隊長の一行は  
カンキポットに辿り着き  
英魂ここに留まりぬ

五、レイテの空に咲きし花

眺高き つわものの  
色よ香よ 今いつこ  
人の心はうつろえど  
④「あらわさん太刀のほまれ」と  
歌いつつ  
勇躍征きし 若人の  
遺訓は永久に伝うべし  
その名高千穂空挺隊



左白井聯隊長 右河野副官

①今日咲きて明日散る花の我が身かな  
いかでその名を清くとどめん  
詠人不知

②ますらをの悲しき命つみかさね  
つみかさね守るやまとしまねを  
三井甲之

③項羽の詩

力拔山兮氣蓋世  
時不利兮驩不逝  
騷不逝兮可奈何  
虞兮虞兮奈若何

④あらわさんときは来にけり千早振る  
神に仕へし太刀のほまれを  
挺3桂善彦大尉

第二中隊長桂善彦大尉はレイテに向い飛行中に、この歌を紙片に書いて操縦していた海江田大尉に渡した。飛行戦隊海江田中隊長は数少ない生還者の一人なのでこの歌が後世に伝わった。

# 陸軍落下傘部隊の創設から作戦参加まで

田中 賢一

## 井戸田報告と東条陸相の指令

昭和15年10月、欧州方面駐在勤務を了えて帰国した井戸田勇中佐は、陸軍大臣官邸において東条陸相以下陸軍首脳に、最近の独軍の用兵、特に航空、機甲、落下傘部隊の使用について報告した。細部については記録が残っていないが、その時点までに独軍の空挺部隊の使用はつぎの通りなので、当然そのことが話題となったであろう。

昭和14年9月1日、ドイツはまずポーランドに進攻した。またたくまにポーランドを席捲し、今度は西方かと思っていたら、突然ノルウェーの進攻を始めた。ポーランドの時もごく少数の謀略部隊を落下傘降下させたが、本格的に使ったのは、海を隔てて進攻したノルウェー作戦からである。

15年4月8日この作戦を開始した。スタンバンゲルに一個中隊を降下させ飛行場を占領し、輸送機二五〇機をもって五千人を空輸した。ついでオスロにも強行着陸部隊を投入し、ナルビックには一個中隊を降下させ、英海軍を尻目にノルウェー全土を占領してしまっ

た。

次は西方作戦だが、5月10日、オランダに対する進攻開始と同時に、メルジック、ドルトレヒト、ロッテルダムに次々と落下傘部隊を降下させ、機甲部隊の突進を先導させた。また同時に開始したベルギー進攻では、マース河とアルベルト運河にかかっている橋梁をグライダーに乗った小部隊で奪取した。更に第一次大戦の時難攻だったエバンエマエル要塞も、グライダーに乗った数十名の部隊で奪取してしまった。このような戦例を井戸田中佐は東条陸相に報告したのである。

この報告を聞いた東条陸相は岩畔軍事課長を呼んで、落下傘部隊の創設に着手することを厳命した。(厳命とい



空挺部隊將兵を激励するヒットラー、ドイツ空挺部隊の華々しい活躍の陰には最高統率者のなみなみならぬ熱意があった。当時入手した写真ではない。

う言葉は当時の関係者が言っている) 岩畔課長は降って湧いたような事案に戸惑ったが、これは航空本部の所掌であると思ひ、課員の村田謹吾大尉を主務者とし、航空本部では佐藤勝雄大尉が担当することになった。

要員の養成、航空機や落下傘の開発等やるべきことは限りなくあるが、先ず昭和15年11月30日、浜松飛行学校練習部臨時編成要領が裁可された。それには練習部長は「浜松飛行学校長ノ命ヲ承ケ落下傘部隊ノ要員養成ニ任スルト共ニ落下傘部隊ニ関スル調査、研究及試験ヲ行フ」と示してあつた。

以上のこと及びこれからのべる中央の施策等は、村田謹吾、佐藤勝雄両氏及び他の当事者から直接聞いたことだが、すべて故人となつてしまった。

## 河島中佐登場

河島慶吾さんとは戦後も御厚誼を得て、練習部創設当時のことなど篤と承つた。その言を借りれば、

「浜松飛行学校で爆撃の主任教官をしておつた。15年11月の終わり頃だったと思う。編隊爆撃のことについて儀仗校長のところへ報告に行った。そうしたらその報告を聞く前に『ちようどいいところへ来た、今度浜松飛行学校練習部というのが出来るので、お前が練

習部長をやれ』といわれた。

『練習部とは何んですか』と聞いたたら『おれにもよくわからん、陸軍省に行つて岩畔軍事課長に聞いて来い』と言われた。早速飛行機を出して上京し陸軍省軍事課に顔を出すと、岩畔課長は村田にやらせてあるから、欲しいものは人でも器材でも何でもやるから言えとのこと、中央でも具体策は何も出来ていなかった。人は誰が欲しいかと言うので、すぐに高橋芳太郎(少候16期)12戦隊で蘭州爆撃に行った時の最も信頼する部下だった。学校ではと言うので爆撃の教官筒井四郎(51期戦死)をもらうことにした。全く突然のことでなから手をつけてよいかわからなかった」と。河島さんにしても、中央の村田、佐藤両大尉にしても闇中摸索というところだった。



練習部長当時の河島慶吾中佐装着しているのは1式落下傘背後の輸送機は九七式(AT)

## 初めての降下

15年12月末頃降下部隊の要員となるべき尉官20名ばかりが、内地に在る部隊から選抜されて練習部付として発令された。

それまで落下傘は航空事故の救命具としていたので、事故以外に落下傘降下の事例は殆どない。そこでどんな姿勢で跳び出したらよいか、また落下傘は確実に開いてくれるか、前人未踏のことだった。そこで人形を使つて何回もテストしてみた。落下傘が絡まって開傘しないこともある。初めに事故があつては将来の発展を阻害すると、河島中佐は慎重だった。2月の初めになってやっと実降下を試みた。そのことを高橋芳太郎さん(故人)は語った。使用機はホッカー、落下傘は九七式操縦者用、場所は浜松三方原爆撃場だった。操縦は筒井四郎中尉、降下者は高橋芳太郎中尉、大野家平中尉その外数人の名前を書いた命令を起案して持参すると、河島部長は降下者の冒頭に自分の名前を書きたした。すると筒井中尉が部長は飛行機の中で見ていて下さいと言つたが聞き入れてくれない。終つてから飛行機の扉を閉める者がいなくては困りますと言つたが、開けたまま着陸したらよいと言われ、降下者は部長以下にきまつた。

あなたは殉職することも考えていたかと言う私の問いに対し、死んでからの処置について何か書いて、机の引出しに入れておいたとこたえた。

## 要員の養成

練習部で教育する落下傘部隊の要員を練習員と称した。練習員は全軍から志願者を集め、空中勤務者と同じ身体検査を行つて採用した。但し聯隊長要員等の佐官は中央で人選し任命した。練習員は将校と下士官兵は別だった。開戦までに将校下士官兵共に三次まで、これで挺進第一聯隊の編成人員を満たし、その時教育中の下士官兵の第四次を加え第二聯隊を編成できた。

練習員の教育は地上準備訓練が約二ヶ月、それが終わつて四回の実降下を実施し一人前となった。第二次練習員以降の地上訓練を所沢の航空整備学校で行つた。ここには第一次大戦の賠償として入手した巨大な飛行船用の格納庫があり、その中に各種の訓練施設を造つた。落下傘塔はなかったため、多摩川遊園内にある読売の落下傘塔を使った。

## 輸送機、落下傘等の装備品の開発

輸送機はホッカーを使つたのは一回だけで、その後は九七式(ATと呼ん

だ)を使った。但しこれは降下隊員七名しか乗れないので訓練用だけだった。従来あつた輸送機の扉口を改良したほか、扉口の上に自動索の環を掛ける金具を取り付ける等の改修をした。

落下傘は初めは九七式操縦者用を使つてみたが、傘体が小さいため着地衝撃

が大いので九二式同乗者用を使う事にした。その後予備傘のある落下傘部隊用のものが開発されたので、第三次練習員からはこれを使った。

そのほか降下者用の帽子、服、靴等も作られ、それらが全部整つたのは第三次練習員からであった。



読売の落下傘塔 バレンバン作戦までは秘匿の為、大学生の服を着て所沢から通つた。

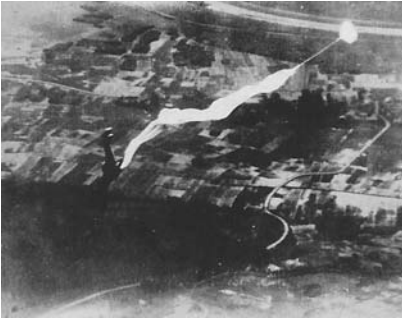


97式輸送機

### 降下技術の開発

飛行機からどんな姿勢で飛び出したらよいか、ということが先ず問題だった。練習部創設時任命された教官要員が、それぞれ自分がよいと思う姿勢で飛び出して、並んで飛行する別の飛行機から観察して検討した。第二次練習員までは胸掛式の九二式を使ったので、水泳の跳込競技のように頭から飛び込むのがよいとされた。背負い式の一式になってからは、下の写真のような姿勢が定着した。完全開傘までに体が回転すると自動索が巻き付くので、それを防ぐ為このように手を挙げた。

次は着地姿勢であるが、体を丸くして、柔道の受身の要領で着地衝撃を全身で受けることにした。この方法は徒手の場合はよいが、兵器を身に着けるには具合が悪かった。



92式落下傘による降下



### 最初の殉職事故

第二次練習員の降下は白城子で行われた。このときまで落下傘は九二式を使っていた。この傘は自動索が延び切るか手動索を引くかすると、傘体の包みが解けて小さな補助傘が飛び出す。補助傘は洋傘のように骨が着いていて直ちに開き、主傘の頂と50センチくらいの紐で接続してあるので、主傘を引張り出すという構造だった。

初宿(しやく)軍曹の場合は補助傘と主傘を接続してある紐が、足首に巻き付いてしまったのである。風圧で主傘は出たが、傘頂を押さえているので

開傘はしない。足首の紐を外そうともがいているうちに、地面に衝突してしまった。

この時までは降下訓練には尾錠のある体操靴を履いていたが、尾錠のない降下靴が出来てきたので、以後はそれを履いた。もう少し早くこの靴が出来ていたら、この事故は防げたかも知れない。それともう一つ予備傘がないということは致命的欠陥だった。予備傘のある一式落下傘もそれから間もなく完成支給され、第三次練習員から一式を使った。

### 基地の変遷

練習部発足当時は浜松飛行学校に付属した。同校は重爆の実施学校で、飛行場のほかに三方原に爆撃場もあり、降下訓練にも適しているからだった。

ところが、降下場の使用頻度が多くなると手狭になり、四月に満州白城子に移駐し白城子飛行学校練習部となった。この移転については陸軍省や航空本部の主務者は、遠く離れると育成に不便であると皆反対したが、東条陸相の強い意向できまった。確かに降下場はあり余るほどあるが、装備品の事も含めれば中央のあらゆる機関が関係あり、遠隔地の不便は大きかった。それに夏の間はよいが寒くなると大変だと

危惧する声が多かった。

陸軍省の主務者は宮崎県児湯郡高鍋軍馬補充部川南分隊には、広大な放牧場があることに目をつけ、これを降下場としその南にある新田原飛行場に移駐させることを考え、部内で種々接衝の未実現した。当時新田原飛行場には一個戦隊分の施設が出来ていた。

8月に発令され、9月に移駐し、陸軍挺進練習部として航空総監に隷属する機関として発足した。任務は飛行学校の練習部時代と変わりないが、練習部長に久米精一大佐が発令され、そのほか有能な人材が補職された。かくして要員の養成も進展し、中央と密接に連携し装備の開発・充足も進み戦争初期の作戦に間に合うことができた。



昔の降下場は全部農地になっているがそれに沿って護国神社があり、その境内に碑が建っている。

# 義烈空挺隊碑前祭

六月十日沖繩摩文仁台上にある碑の前で行われた。

主催者は空挺同志会沖繩支部で、以前は元挺進隊員だった戦友が三代に亘り支部長を勤めていたが、皆鬼籍に入り現在県内在住者はいない。そこで支部長も支部員も嘗て習志野の自衛隊空挺団に勤務し、その後沖繩の自衛隊に転じた現職隊員や退職者で構成されている。従ってこの祭事は断絶することはない。

## 〔碑誌銘〕

### 義烈空挺隊讃

秋ソレ昭和二十年五月二十四日夜  
敗色既ニ濃キ沖繩戦場読合飛行場ニ  
突如強行着陸セル敵機ノ爆撃機アリ  
該機ヨリ躍リ出タル決死ノ将兵ハ飛  
行場に在リシ敵機及ビ燃料弾薬ヲ爆  
碎シ混乱ノ巷ト化セシメタリ 為ニ  
飛行場ノ機能喪失スルコト三日間ニ  
及ビソノ間我が航空特攻機ハ敵艦船  
ニ対シ至大ノ戦果ヲ収ムルヲ得タリ  
コレ我が挺進第一聯隊ヨリ選出セ  
ラレタル義烈空挺隊及ビ第三独立飛  
行隊ノ壮挙ニシテ両隊將兵百十三名  
全員ココニ悠久ノ大義ニ殉ゼリ

後ニ続く者ヲ信ジ日本民族守護ノ  
礎石トナリシ將兵ノ靈ニ我等何ヲモ  
ツテ心エントスルヤ  
昭和五十一年五月二十四日  
全日本空挺同志会

銅版の表にはこの碑銘、裏には全戦死者の名前が刻んである。

阿修羅てふ死力の限り尽くせしも  
伝うるすべの無きぞ悲しき



故海法秀一画



追悼文を捧げる空挺同志会長



参列者は空挺同志会員約30名

## 義烈空挺隊慰霊祭参加報告

理事 杉山 蕃

昨年に引き続き、六月十日摩文仁丘陵の義烈空挺隊慰霊祭に協会代表として参加しました。陸自空挺団長、空挺同志会会長等例年の顔ぶれで、折から降りしきる雨のなか、往時を偲びしめやかに行事が行われました。航空出身の筆者は、隣接する空華の碑・飛行第十九戦隊碑をも参拝して参りました。本年は思うところあり、前日からレンタカーにて、本島中部まで足を伸ばし、社稷の移ろいをこの目に刻んで参りました。

昭和四十七年復帰当時、航空運用担当幕僚であった筆者には、沖繩に特別の思い入れがあります。その基となるのは、沖繩戦海軍指揮官大田實少将の電報「沖繩県民斯克戦えり、県民にたいし、後世格別のご高配賜らんことを」の言葉です。米軍再編成等種々の問題が尾を曳いている現在ですが、太田少将の遺言は全てを律する含蓄ある言葉と考えています。

絶対的制空権を奪われた沖繩に、数機の重爆で出撃した義烈隊の、今に通ずる周到な飛行計画と果敢な行動を振り返るとき、読谷に散った英霊の皆さんも、同じ暖かい気持ちで現在の沖繩を見守って居られる事と信じ、思い深まる時を過ごしたものと感じているところです。

### 木家空挺同志会長の捧げた追悼文の一節

陸軍落下傘部隊の後継者たる空挺同志会の者どもは、義烈の勇士に限りない敬意を抱き、挺進殉国の精神を継承してゆきます。



# 義烈空挺隊員 出撃時の顔

小柳次一カメラマン撮る



小柳カメラマンは搭乗機に向かう隊列の写真を撮っていて振り向くと奥山隊長と諏訪部飛行隊長が握手している、急いでカメラを構えたが終わってしまった。そこで「すみませんがもう一度お願いします」と言ったら、奥山隊長が「千両役者は忙しいな」と言ったので、皆ドッと笑った。



搭乗機に向かう隊員の列



出撃前の乾杯 宮越春雄准尉



奥山隊長と諏訪部飛行隊長最後の姿

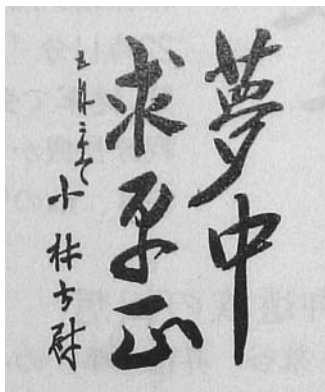
六月の靖國神社頭に掲示には義烈空挺隊(第三独立飛行隊)の小林中尉の遺書が掲示された。

出発間際

陸軍少佐 小林眞吾命  
 今般大命を拝し特殊空挺隊として決戦の沖繩に参ずる身と相成申候  
 幼きより武人を志し身の光栄此に過るなく欣然死地に赴んとするものに候  
 末子にて一方ならぬ御世話に相成り何一つ報ゆる所無之残念に存候も今回の壮舉成らば幾分なりとも御受納被下度御願申上候  
 最期は断じて父母様はじめ一家の名を恥しめざる事を誓申候  
 遙かに御多幸を御祈申候  
 最後の乱筆御許し被下度  
 末子 眞吾  
 父上様  
 母様  
 昭和二十年五月二十七日一三〇〇熊本にて  
 池上先生には呉々も宜敷御伝へ被下度  
 出発間際時間なく失禮仕候



小林眞吾少尉



眞吾

今般大命を  
 拝し特殊空  
 挺隊として決  
 戦の沖繩に参  
 ずる身と相成  
 申候  
 幼きより武人  
 を志し身の光  
 栄此に過るな  
 く欣然死地に  
 赴んとするも  
 のに候  
 御世話に相成  
 り何一つ報ゆ  
 る所無之残念  
 に存候も今回  
 の壮舉成らば  
 幾分なりとも  
 御受納被下度  
 御願申上候  
 最期は断じて  
 父母様はじめ  
 一家の名を恥  
 しめざる事を  
 誓申候  
 遙かに御多幸  
 を御祈申候  
 最後の乱筆御  
 許し被下度  
 末子 眞吾  
 父上様  
 母様  
 昭和二十年  
 五月二十七日  
 一三〇〇熊本  
 にて  
 池上先生には  
 呉々も宜敷御  
 伝へ被下度  
 出発間際時間  
 なく失禮仕候

一番機の搭乗者

- 正操縦 川守田啓志 少尉
- 副操縦 諏訪部忠一 大尉
- 航法 小林 眞吾 少尉
- 通信 長瀬 嘉男 軍曹
- 奥山隊

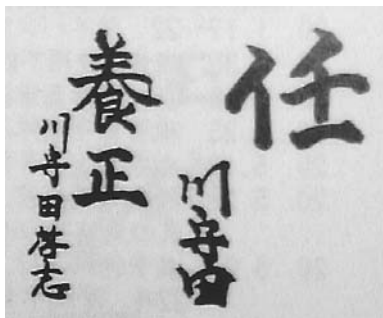
- 奥山 道郎 大尉
- 辻岡 創 少尉
- 阿部 忠秋 少尉
- 尾見 勢二 曹長
- 北島 信利 曹長
- 菅野 歳蔵 軍曹
- 酒井 武行 軍曹
- 金山 清 軍曹
- 大月 松雄 伍長
- 高橋 房治 伍長



川守田啓志少尉

註 義烈空挺隊員が出撃したのは五月二十四日であるが、戦死認定は六月十五日である。小林、川守田ら57期生は六月十日に中尉に進級していた。

滑走路に向かう一番機



従って戦死認定とともに二階級進級して少佐となった。同様に奥山大尉も六月一日に少佐になっているので、戦死認定で大佐となった。

# 沖繩地上戦闘の終焉とその時期における航空特攻

## 「第三十二軍の状況」公刊戦史

六月十八日牛島軍司令官は參謀次長と第十方面軍司令官宛てに左記決別電を発信した。

### 球参電第六三五号

(六月十八日一八二〇発電)

大命ヲ奉シ挙軍醜敵撃滅ノ一念ニ徹シ勇戦敢闘茲ニ三箇月全軍將兵鬼神ノ奮励努力ニモ拘ラス陸海空ヲ圧スル敵ノ物量制シ難ク戦局正ニ最後ノ関頭ニ直面セリ麾下部隊本島進駐以來現地同胞ノ献身的協力ノ下ニ鋭意作戦準備ニ邁進シ来リ敵ヲ邀フルニ方ツテハ帝國陸海軍航空部隊ト相呼応シ將兵等シク皇土沖繩防衛ノ完璧ヲ期セシモ滿(筆者注 牛島軍司令官の名)不敏不徳ノ致ストコロ事志ト違ヒ今ヤ沖繩本島ヲ敵手ニ委セントシ負荷ノ重任ヲ継続スル能ハス 上 陛下ニ対シ奉リ下国民ニ対シ真ニ申訳ナシ茲ニ残存手兵ヲ率キ最後ノ一戦ヲ展開シ一死以テ御託ヒ申上クル次第ナルモ唯々重任ヲ果シ得サリシヲ思ヒ長恨千載ニ尽ルナシ 最後ノ決闘ニ当リ既ニ散華セル麾下

数万ノ英靈ト共ニ皇室ノ弥栄ト皇國ノ必勝トヲ衷心ヨリ祈念シツツ全員或ハ護國ノ鬼ト化シテ敵ノ我カ本土来寇ヲ破推シ或ハ神風トナリテ天翔ケリ必勝戦ニ馳セ参スルノ所存ナリ 戦雲碧々タル洋上尚小官統率下ノ離島各隊アリ何卒宜敷ク御指導賜リ度切ニ御願ヒ申上ク

茲ニ平素ノ御懇情、御指導並ニ絶大ナル作戦協力ニ任セラレシ各上司並ニ各兵団ニ対シ深甚ナル謝意ヲ表シ遙ニ微衷ヲ披瀝シ以テ訣別ノ辞トス 矢弾尽キ天地染メテ散ルトテモ魂還リ魂還リ皇國護ラン 秋ヲモ待タテ枯レ行ク島ノ青草ハ皇國ノ春ニ甦ラナム

### 六月十九日の戦況

(軍の組織的戦闘終了)

十九日米軍の猛攻は続けられ、その歩兵は摩文仁東方数百米に迫り、戦車は摩文仁の八九高地を砲撃する状況となつた。

新垣、眞榮平方面は米軍の包囲攻撃を受け、西方においては、左翼方面から侵入した米軍が米須付近まで進出して所在のわが部隊と混戦を展開し、軍司令部と各兵団間の連絡はほとんど断絶する状況となつた。

軍砲兵隊の大部は破壊され、弾薬も

ほとんど尽き歩兵戦闘に移つた。しかし、残存の高射砲などはなお対戦車射撃を実施し最後まで勇戦を続けた。牛島軍司令官は軍の運命いよいよ最後なりとし、左記要旨の軍命令を下達した。

全軍將兵の三ヶ月にわたる勇戦敢闘により遺憾なく軍の任務を遂行し得たるは同慶の至りなり 然れども今や刀折れ矢尽き軍の運命旦夕に迫る 既に部隊間の通信連絡杜絶せんとし軍司令官の指揮は至難となれり 爾今各部隊は各局地における生存者中の上級者之を指揮し最後迄敢闘し悠久の大義に生くべし

十九日軍司令部に、歩兵第八十九聯隊長金山均大佐及び工兵第二十四聯隊長兒玉昶光大佐の戦死が報告された。

この日軍司令官、幕僚全員でわずかに残っていた缶詰類や酒で訣別の宴が張られた。軍司令官は泰然とし、軍参謀長は意気軒昂であつた。

十九日夜八原高級参謀以外の軍参謀及び司令部の將兵約二〇名が大本営連絡あるいは遊撃戦の任務を受けて司令部洞窟から出撃した。

### 六月二十日の戦況(戦闘続く)

軍司令部と各兵団との連絡はほとんど途絶し状況は判然としなかつたが、

摩文仁を中心とする地区、新垣及び眞榮平を中心とする地区に戦闘が激烈であつた。 軍は六月二十日の戦況を次のとおり報告した。

### 球参電第六四八号

(筆者注 発電日時不明)

六月二十日ニ於ケル状況 通信連絡殆ト杜絶シ各兵団ノ状況不明ナルモ摩文仁ヲ中心トスル地区ニ於テ昨十九日報告??ノ東半部ハ敵ノ奪取スルトコロトナリ戦車約十輛、砲三门ノ敵ハ・・・(中断)・・・

第二十四師団司令部附近本朝尚組織的戦闘ヲ続ケ??ラシキモノニシテソノ各部隊ハ依然新垣北方高地、眞榮里東方高地、眞壁北側高地附近ヲ各中心トシテ??ナルモノノ如シ敵機ノ活動本日極メテ低調ナリ 第二十四師団長は六月二十日、師団の組織的戦闘は困難であると考えた左記要旨の訓示をした。

師団は茲に組織的通信機関破壊せられ統一指揮不可能の現状に鑑み各部隊は現陣地附近を占領し最後の一兵に至るまで敵に出血を強要すべし苟も敵の虜囚となり恥を受くる勿れ最後の忠節を全うすべし 隣接部隊と合流するを妨げず

## 六月二十一日の戦況

(バックナー中将の死を知る)

依然南部各地で戦闘が続き、各部隊は微力ながら拠点によって最後の奮戦を続けており、米軍戦車は摩文仁高地に進出して来た。

二十一日軍司令部は眞榮平宇江城にある第二十四師団司令部と最後の連絡を行ない各司令部ごとに玉砕することに決した。摩文仁高地周辺にある第六十二師団、独立混成第四十四旅団、軍砲兵隊の各司令部と軍司令部間は徒歩連絡を続けていた。

この日陸軍大臣及び参謀総長から軍司令官あてに訣別電報が到着し、この電報により米第十軍司令官シモン・バックナー中将 (SHIMON BRUCKNER) が六月十七日眞壁付近で戦死したことが伝えられた。

注 八原高級参謀は、「われわれはバックナー中将の戦死を知り、牛島軍司令官の自決に先だち敵将を打ち取った愉快さを感じたが、牛島将軍は少しも嬉しそうなどころがなく、むしろ、困ったというようであった。その様子は、われわれが牛島閣下の前で人の批評をした際に困ったような顔をされるのが常であったが、それと同じであった。私は今更ながらこの将軍は人間的になかなか偉いなと思った」と回想している。

軍司令部眼下の摩文仁部落に一部の米軍が侵入し陣地構築中であることを発見し二十一日夜司令部衛兵一〇小隊でこれを駆逐奪回した。

摩文仁の軍司令部近くにあった第六十二師団長藤岡武雄中将、歩兵第六十三旅団長中島徳太郎中将は、既に師、旅団の運命尽きたりとして二十二日〇二〇〇ころ自決し、参謀長以下もこれに従った。

二十一日夜軍司令部の将校以下が遊撃戦実施の命を受けて数組出撃して行った。

## 六月二十二日の戦況

(軍司令官の最後)

正午ころ摩文仁部落の銃声が止んだ。軍司令部では同地守備の司令部衛兵が全滅したものと推定された。約一時間後軍司令部洞窟の垂直坑道の衛兵が米軍に急襲され全滅し、米軍の爆薬、手榴弾が洞内に投下され、将兵十数名が死傷する事態となった。

軍砲兵隊司令部及び独立混成第四十四旅団司令部は昨夜総員斬込みを決定したとの報告が軍司令部にあったが、第六十二師団司令部の状況は不明であった。

軍司令部においては、本夜生存者をもって軍司令部台上の八九高地山頂を奪回し、明二十三日黎明を期して全員摩文仁部落方向に突撃し、この間に軍司令官、参謀長は山頂において自決することに決められた。

敵情偵察の結果、山頂奪取の攻撃を中止し、海に面する坑道口外の位置で自決することとなった。

牛島軍司令官は通常礼装に着替え、長参謀長は純日本式の白の肌着に自筆で墨痕鮮かに「忠則盡命 盡忠報國 長勇」と記して着用した。

両将軍は西郷南洲の城山の故事などを語り、死をみることに帰するがごとく淡々たる態度で、一同と別かれを告げ二十三日午前四時三十分古武士の作法に従い従容として自決した。

(注 軍司令官五七歳、参謀長四九歳)

## 〔航空特攻〕

菊水十号作戦 (第一次航空総攻撃)

陸海軍の協力する次期航空総攻撃の開始は15日と定められたが、これも天候不良のため実行できなかった。一方、第32軍は敵の本格的な攻勢によって軍の組織的な戦闘は終末段階に入りつつあった。18日、牛島軍司令官は大本營

に訣別の電報を送った。

陸海軍航空は21日から最後の特攻を送った。海軍では鹿屋から菊水第2白菊隊 (白菊五) 古賀中尉以下十名、串良から徳島第4白菊隊 (白菊三) 井上中尉以下六名、指宿から第12航戦水偵隊 (水偵五) 野路井中尉以下九名、練習機および水偵でありながら、最後に残された痛憤の特攻隊であった。陸軍は敵機による妨害を考慮して4式戦装備の特攻、都城東から第26振武隊相良少尉以下四機が発進、沖繩周辺の敵艦船に突入した。

22日、沖繩戦最後の航空特攻が決定された。鹿屋からは第10神雷部隊桜花隊 (桜花四) 藤崎中尉以下四名、同攻撃隊 (陸攻四) 伊藤中尉以下二十八名、第1神雷爆戦隊川口中尉以下七名が、都城東からは第27振武隊川村中尉以下六名、第17振武隊金丸中尉以下五名が発進、沖繩本島南部洋上の敵艦船群に突入した。第32軍将兵への最後のそして尊い花束であった。

23日未明、牛島軍司令官は長参謀長とともに摩文仁の岡で自決した。

## その後の沖繩特攻

沖繩地上軍玉砕の後も、陸海軍の航空特攻は九州からも、台湾からも決行された。戦略戦術上の見地からは、こ

の特攻はあるいは無意味であったかも知れない。しかしこの地を本土上陸の足場とする米軍を許してはおけないし、また僚友に死に遅れた無念さも若い隊員の心を抑えることが出来なかつた。

6月25日、指宿から琴平水偵察(水偵二) 椎根中尉以下五名、古仁屋から第12航戦水偵隊(水偵一) 田所少尉以下二名、鹿屋から菊水第3白菊隊(白菊一) 春木一飛曹以下二名が沖繩周辺に散華した。翌26日は、串良から徳島第5白菊隊(白菊五) 三浦少尉以下十

名が沖繩周辺の敵艦船群に突入した。更に27日、古仁屋から琴平水偵隊の杉田二飛曹が、28日同隊(水偵一) 竹安上飛曹以下三名が沖繩周辺洋上に散華した。

7月も、8月も体当たり攻撃は続く。1日第180振武隊宇佐美伍長以下二名は、都城東から4式戦を駆って慶良間泊地の敵艦船群に突入した。3日第12航戦水偵隊(水偵一) 須藤少尉以下二名が古仁屋を発進し、沖繩周辺の敵艦船群に突入した。

台湾方面からは、7月19



機上作業練習機「白菊」



零式水上偵察機

日、誠第31飛行隊の藤井少尉、誠第71飛行隊の中島伍長、飛行第204戦隊織田少尉以下四名が那覇西方の敵艦船群に突入した。そして海軍の第3竜虎隊三村上飛曹以下七名が陸中練七機を駆って宮古島から、29日から30日にかけて沖繩周辺の敵艦船群に突入した。最後に8月11日、喜界島に残されていた爆戦二、第2神雷爆戦隊の岡島中尉以下二名が沖繩周辺の敵艦船群に突入した。四カ月余にわたる沖繩に対する特攻作戦は、このようにして終わりを告げた。以上「特別攻撃隊」より

## 軍司令部最後の真相

### 参謀部付一少佐の手記

#### 「紅焰」より

参謀部付の西野弘二少佐は、軍司令部の洞窟にあって牛島軍司令官と長参謀長の自決を見送った後、かねて命ぜられてあった通り、住民の服装で洞窟を脱出し国頭に向かった。畑の生芋などで命をつなぎ一意北上したが、何日後かに遂に捕らえられ、台湾で教職についていて内地に出張の途中戦闘に巻き込まれたと供述したが信用されず、捕虜となった。既に故人となつたが、沖繩における体験を一書にまとめ、書名を「紅焰」と名付けた。ここにその一章を転記する。

を買った。主役の去つた参謀部の洞窟は急に空虚なわびしいものになった。

二十日の朝は明けた。摩文仁台、東半分は敵が占領している。司令部の中では諸部隊も指揮する機構は改変せられ、高級副官が統轄し戦闘中隊編成をとった。各中隊は陣地配備についた。

北の畑側の壕の入口八原参謀が陣頭に立って、壕内の岩石を打ち砕いて五米ばかり入口に詰め込み、小さな窓を除き全くふさいでしまった。海岸側は人が出入り出来るように、横牆よこかきを築いて敵の洞窟攻撃に備えた。

前日同様ジリジリした戦況が続く。昨日の戦場にもまして静肅さが気味悪くも迫ってくる。長文の暗号電報が入つた。大野電報班長が勇み足で高級参謀の許に行く。高級参謀が受電文を持って、軍司令官、参謀長の所に行った。

沖繩守備軍に方面軍司令官から感状が送られて来たのだ。軍司令官は眼鏡をとられ、幾度か繰り返すうなずかれるようにそれを読んで、参謀長や高級参謀と話して居られる。日は中天に昇つたろう。

摩文仁付近の戦線は妙に静かになって来たぞ。艦砲は遠のいている。飛行機も少ないようだ。迫撃砲弾が時々思ひ出したように見舞うだけだ。いやに静かだ。しかしこれで安心したらとん

軍の組織的戦闘崩壊後、十八日朝、長参謀長は軍の各参謀に対し、この地で玉碎せず脱出するよう命じた。木村、三宅、薬丸、長野の各参謀は遊撃戦の実行、或いは戦況の大本営報告ということで、軍司令官の命令を貰って十九日の夜、それぞれ住民の服装で万感をこめて摩文仁の壕を去って行った。八原高級参謀は将軍自決後に出撃ということであった。私も同様の命令

でもないことだ。敵は摩文仁の台の東半分を侵食しているのだ。敵の第一線部隊歩兵と戦車が、東三百米の所まで迫って来た。熾烈な砲火がやんだと思つた瞬間、その弾幕の後ろから敵戦車と歩兵がついて来ていたのだ。摩文仁の東半分の丘にジリジリ寄せて来た敵は、遂に我が近辺の壕に馬乗り攻撃を行つた。戦車砲の音が壕の近くに聞こえる。我々の壕でも警戒が至敵にされた。

二十一日の朝になった。畑の壕の入口の監視哨から、

「戦車現わる」

と報告が来る。間もなくドカン！ドカン！ドカン！という短切な爆裂音がその壕の入口付近にたたきつけられて来た。轟々というエンジンの音が近くに聞こえる。塞いだ畑地側の壕の展望孔に身をすり寄せて見ると、前の摩文仁部落の廃墟の中に、点々と敵戦車が姿を現しているではないか。ゴウンゴウン、ゴウンゴウンと戦場の空気がエンジンの音に震えている。砲口が我々の方を睨んでいる。何と殺気に満ちた光景だ。

廢れた山野に我は地下の小孔から、敵は厚いくろがねの装甲板の小孔からお互いに火の出るような眼光を持ってにらみ合っている。そして双方とも渾

身の力、全能を投げうって殺し合おうとしている。食うか食われるか、戦の道はそれしかないのだ。

今迄砲火にも耐えて尚立ち続けているた木も、地にはっていた草も、今この息づまった光景に威しつけられて精を失つた。熱し狂つた太陽の光も度を失つて、戦場を焦がし焼いた。十輛の敵戦車は巨姿をそこに横たえたまま、この台にドン、グワングワングワンと射ち続けている。砲口からパッパッと火光が上ががる。迫撃弾よりも短兵急な恐ろしいスピードでやって来る。気短な爆裂音が人をなぐり倒すように聞こえる。機関銃火が彼我応酬している。

今迄は敵戦車、水陸両用戦車や歩兵が戦場で行動しているのを度々遠くから見て来た。しかしそれらは我々を直接攻撃して来ているのではなかった。他の目標を攻撃しているのであって、気持ちの上にもいくら余裕があった。しかし今は面と敵と向かい合ったのだ。こうなった時、もはや我々には生死などという考えは全然起こらなかった。そして人々が戦死をし負傷をするのは別段不思議とも、恐ろしいこととも考えぬ。それは日常の茶飯事であるからだ。戦いをなし戦いの中に生きるのみなのだ。神が我を加護し、仏が我を救つて下さるとも、そんなことは考えられ

ぬことだ。死闘ということは、それよりも更に一步切り下げたものであり、そして厳しい現実が総てを支配する。人生の深き底流を今人々は泳いでいる。

苦難を共にした將兵の心は寄り添つた。窮きままった戦況の中に人々は蜘蛛の子を散らすように動いている。病める者も立ち上がった。傷者もはって仕事を手伝っている。この時、我々は前途に大いなる心の開きを覚えた。身は軽くなり戦闘の中に溶け込んで行つた。

「ガス！」

壕内にガス警報だ。

「ガス、ガス、ガス」

大声で壕内奥まで警報はとぶように伝達された。暗闇の中に防毒面はとられ、素早く被られた。壕の中に硝煙のようない臭いのガスが流れこんで来た。どうやら敵のガス攻撃ではなかった。しかし他の壕では数十名の者がガスらしいものでやられたことがあるので注意せねばならない。今入って来たのは濃厚な砲弾の硝煙に違いない。

戦車の後ろに人間が居るぞ。おかし、兵隊の服装ではない。住民の服装をしている。点々と散在して円匙で穴を盛んに掘っている。どうも白人ではないようだ。薄気味の悪いやつらだな。はは、陣地を構築しているのだな。この手だと夜になるとあの戦車は後方

にさがるだろう。そして今構築している陣地に歩兵の火器が推進してくるだろう。

機関銃の音が慌ただしい。敵戦車は前進して来たぞ。のそりのそり動き出した。ゴウゴウゴウ、大地は揺れ始めた。一つ一つの壕めがけて、激しいねらい射ちを行いながら、戦場は大きく揺れ出した。敵戦車の巨姿はここに来た。くろがねの化け物はくらいつくような顔をして目の前に迫った。大地は大きく激しく呼吸をうっている。台上がって来た。凄まじいキャタピラがギラギラ回転して、ゴウ！という巨体の動きのうなりと共に、我が壕の側のふさいだ出口の前を瞬にして通り過ぎ、左の方へ登って行った。数輛の戦車が台の上で縦横無尽に暴れ狂っているらしい。ゴウゴウゴウと我々はエンジンとキャタピラの狂想曲の渦の下で呼吸をしている。壕が微震動から強震動へ、強震動から微震動に変わって行く。馬乗り攻撃をやりがった。肉薄攻撃班が出たらしい。

夜がやって来て戦車は退いた。司令部防衛中隊の松井小隊が海岸側の出口から出撃し、摩文仁部落奪還のため敵の後退に乘じ攻撃を行い、二〇・〇〇頃首尾よく摩文仁部落を占領した。機関銃の射ち合う音がする。

この夜、大本営より訣別電報が入り、敵軍の主将シモン・バックナーの戦死を知った。同夜馬乗り攻撃を受けた砲兵司令部は司令官以下敵中に斬り込んで行った。その報は翌朝齎された。摩文仁山断崖に立って太平洋の波濤を背にして、自決されるということをもその部員から聞いていたが、とうとう期期をとげられたことだろう。砲兵司令部は殆ど全滅した。

二十二日明け方や過ぎ、二十四師団司令部から決死の下士官伝令が、息せききって我が司令部の壕に到着した。伝令は日没を待って軍司令官の伝書を持って引き返した。恐らく二十四師団長からの訣別の辞が送られ、軍司令官の永別の言葉がその伝令に託されたことだろう。

彼等は敵中を突破してやって来た。そして今度は敵の重囲を潜って帰らねばならないだろう。よく敵情を聞き、壕から去って行った。その成功を祈念しよう。諸部隊との連絡はこれを最後に一切絶えた。

司令官と参謀長はこの前から、司令部の中央付近で垂坑道の下の近くが割り広げられたので、ここに移られて居る。今司令部のこの壕には百名位の将兵と、司令部に戦闘前から勤務して

いる女子達数人が健気に居残っている。司令部の人員はこの壕の外にこの壕を中心に二、三百米の間に十箇所ばかりに分遣して入っている。これら壕との連絡も今はとれなくなった。

我々の壕の上を奪回すべく、四十名ばかりの決死隊が命ぜられた。決死隊は甲斐甲斐しく武装を整え、垂坑道をよじ登ってここから外へ躍り出ようとした。

「頼むぞ、頼むぞ」  
将兵達は言葉をかけ合っている。よじ登った先頭の者は壕から出た。敵だ！ 面前に敵がひかえていた。素早く手榴弾を投げつけた。敵はたじろいだ。敵も手榴弾で応戦してきた。激しい炸裂音が垂坑道をつつ抜けに、我々のいる所に響いて来る。我は先を制した。勝利は我に移ろうとしている。穴の周りに伏せる我が将兵は続々躍り出て、それぞれ五、六発の手榴弾を投げつけた。阿修羅場と化している。一瞬の間に彼我共に負傷者が続出した。あたりは鮮血に染まり、脾肉は飛び散った。

我は正に壕の上の台地を奪回しようとしていた。

時、敵は激烈な反撃に出て来た。雨あられと手榴弾は我が方にふりかかって来た。——が、残念なことにはもはや我々は手榴弾は無かった。戦友はど

んどん倒されて行く。或る者は敵中に疾風のように躍り込んで行った。戦死者が壕の入口に折り重なっている。敵は続いて垂坑道の開孔部めがけて黄燐弾射撃を集中して来た。この黄燐弾が数個穴に命中した。垂坑道を途中迄登りかけていた将兵に黄燐が浴びせかけられた。燐光を発して身体が燃えだした。将兵は焼けこげながらうめきつつ垂坑道の真っ直ぐな直下坑を真っ逆様にごろりごろりもんどり打って、我々のいる水平坑道に落ちてくる。参謀長

室も爆風によって無残に吹き飛ばされた。うめき声、真黄色な黄燐の硝煙、いやな臭い、毒ガスだ。防毒面をかける。壕に残っていた戦友が介抱して黄燐を必死に消している。狭い鍾乳洞内は一瞬にして修羅場となった。司令官、参謀長のおられる前にすでに死屍となつた戦友と、かすかに吐息をつく未だ生

のある人々の肉体が三十名ばかり折り重なって伏している。或る者は日章旗の鉢巻きを額にきっちりしめて、古武士の如き出で立ちの儘、死んだ戦友はすでに神の如き温容を整えている。

今話し合ったばかりの戦友が三十分とたたない内に、屍あれど幽明相隔つ姿になってしまった。血のしぶき、死の臭い、朦朧たる重苦しいほのかな光は揺れずに不動のままである。魔神が

しのび寄って来た。妖魔の幻が大気の中に浮かんで来た。何と悲惨な結末だろう。武器なき戦、この武器なき戦を波濤のような物量に手足を全くもぎとられ、今は地中に深く閉じ込められて、尚死の戦闘を強いられるのを待つのみ。屍はこの戦に安らげきを得られるだろうか。司令官、参謀長は動ずる所なく身体を斜に横たえられている。目の前に部下の生々しい戦死を見て居られる司令官の胸中是如何、嗚呼。

昼を過ぎた。敵は我々の壕の上に居るらしい。上土の薄い所では敵のやつが歩いているような足音が聞こえてくる。また時々鏃で掘るような音もする。ゴットンゴットン、ゴットンゴットンと岩石を穿っているのだろう。敵の戦車も相変わらず付近にいるようだ。エンジンの音が絶えず響いてくる。

夕のとばりが訪れたのであろう。静かになって来た。夜はしんと沈みこんで行った。陰惨な夜だ。まだ敵は上にいる。時々ガタンと岩をふみはずしたような音が深夜の静けさを破る。

この敵をやっつけねばならぬ。総員斬込みの時はいよいよやって来た。それは今生の別れを意味し、同時に沖縄本島作戦の終焉を意味するだろう。斬込みを行うべく敵情偵察が行われた。本

夜壕の上の台地を奪回して、明朝〇三・〇〇を期し、総員斬込みを行う予定となった。

敵の前線は我が台上を通り越えて更に西方に移っているらしい。我々もはや敵中に居るのだ。

夜二二・〇〇、決死の伝令によって司令部各隣接壕間の連絡をとることが出来た。伝令の話によれば、この台上にはあちこちに敵がいる。歩兵砲の陣地らしいものが構築されているということだ。伝令は数回敵にぶつかってこの壕に飛び込むことが出来たそうだ。

二四・〇〇を期して丘の西脚にある管理部の壕からと、西北にある通信隊の壕からと、それに我々の壕の中隊と三方からこの頭上の敵を攻撃、台を奪回すべく命ぜられた。摩文仁部落にある松井小隊方面の銃声はすっかりやんでしまった。恐らく小隊長以下戦死してしまつたのではなからうか。

二二・〇〇過ぎ、我々の壕の戦闘員は松原少佐を総指揮官とし、海岸側の出口から奪回攻撃に出撃してしまつたので、にぎやかであつた壕もあやしげな程静かになつた。司令官、参謀長、副官部の一部の人員と女性達だけが残っている。鍾乳洞は全くうつつでがらんとしてしまつた。司令官のおられる所

にはローソクが三本ばかりついている。その前に伏し重なり倒れている戦死者達をこうこうと照らしている。死臭はほのかに壕内をみたして来た。恐ろしいばかりに静かだ。我々は今死線を放浪している。後は死ぬばかりだ。死ぬのは時間の問題だけだ。考えて見ればそれは余りにも恐ろしい事実だ。断崖の上に立って今その千仞の谷底につき落とされようとしている我々である。それは夢ではない現実なのだ。しかし私はこう深く考え込むことをやめた。死ねばその時だ。私はまだ若かつた。それ故にか直面した死を深く考えつめようとはしなかつた。「死ねばその時だ」とふてぶてしくも決め込んでいた。敵を目前にひかえて敵を恐れざる不撓の闘志が頭をもたげ出した。

伏し倒れて蒼白となり語らざる戦友達の死に、さすがの娘達も全く力を失っている。彼女達は屍から少し離れた所で相抱擁して面をふせたままだ。本当に可哀そうだ。何という因果の娘達だろう。

死闘した戦、一切の虚偽を離れて、勝者の優勝感にひたっている時、敗者は絶望の深淵に唯一人あるであろう。二四・〇〇は来た。しかし山頂は未だ奪回出来ぬ。司令官は何時ものように起きておられる。隣り合わせの参謀

長はいびきをかいて寝て居られる。総員斬込みは〇五・〇〇に延ばされた。時は容赦なく刻まれて行く。〇四・〇〇になつた。山頂はついに奪回出来なにか、斬込み準備が命ぜられた。司令官、参謀長も準備を終えられた。いよいよ出撃だ。

将校たちは軍司令官の居室の前に集まり、お別れの盃を頂いた。御盃に恩賜の御酒は次々に注がれ、一人一人を巡って行つた。皆々に交わされる言葉は、顔つきは、一寸そこに旅にでも出掛けるように気軽なものだ。しかし人々の眼光は射る程に鋭い。そして人生最後の言葉は衷心より出で、且つ真理を穿つ。

「お世話になりました」  
「お伴をさせて頂きます」  
最後の言葉は交わされている。横には今朝戦死した戦友が三十名ばかり、蠟で作つた凄惨さを物語る彫刻のように、語らざる屍として倒れている。

ただよう死臭、ともされた香の香り、ほのかに香煙がこもっている洞の中に、あやしげなローソクの灯は一際明るく燃え立っている。この洞穴はもはや、うつつの世とは思われぬ。喜びや笑い

は失われてしまつている。死というどん底に追い詰められて、武夫はその鉄のような武士の節操を守つていた。死

を超克せんとする人々の努力の光の結晶が、今燦然と洞穴の天井の一角より照らされている。

摩文仁山は白々と明け染めかけた。時は今だ。

海岸側の出口から斬込み隊は躍り出た。神々の出発だ。嗚呼、帰らぬ神。副官の持つローソクの灯を先頭に、淡々たる軍司令官、豪傑魁偉の参謀長と続かれる。参謀長は上衣を脱いだままだ。白いワイシャツの背には「義勇奉公忠則尽命」陸軍中將長勇と血書されている。両將軍は海岸側、壕の出口付近の断崖の上に介錯役の副官、剣道五段の坂口大尉が付添い、台上に静座された。遙か東天を拝する將軍達の頭上には、かすかに紅を含んだ飛雲が流れ走る。朝霧が谷より萌え上がった。残月は未だ天空を支配するかのよう

に暁天にかかつている。

自刃だ。手元を定めた副官の振りあげた手練の白刃は、神業のように宙を切つて將軍の頭をはねた。旭日が倒れた將軍達を静かに照らし始めた。武士の掟を守り、敗れた戦に責めのあかしをたてられた。

ひと時を過ぎた。静かな壕の中で突如、拳銃、手榴弾の爆発音が闇をついた。將軍を葬つた四人の副官達は軍装に身を固め、拳銃で相い向かつたまま、



その他の人達は手榴弾や拳銃で自決し果てた。鮮血は床に流れ、脾肉はとび散る。その中には娘たちも混じっている。娘達はお互いに抱擁したままでうつ伏し、最期を遂げた。

百米位の洞の間には惨烈な最期を遂げた人々、五、六十の遺体が軋げ重なって凄惨の極みである。乳石には飛び散った肉が、鮮血がこびりついてぎらぎらしている。総ての屍、総ての物、置いたままの飯盒、剣、銃、小机、屍の中に散乱した寝台、万物は総て動く力を失った。意志を失い生の躍動を失った。

独りとり残された、ともされたままのローソクの光が、直立して妖魔の世界を照らしつけている。光が時折ぐらりと揺れる。溶けた蠟がローソクをつたわって思い出したように床に流れる。恰も生あるかの如くに。

悲劇は終わった。そして総ては終わった。洞は死の世界を以て閉じられた。沖繩本島作戦は六月二十三日、悲劇を以て事実上の終息を告げた。

この外の壕の者達も逐次玉碎して行った。沖繩に革命を奉じ、成敗の帰趨自らと最後の結末を如何にすべきかと將軍達は念じていたのであろう。その深さ絶望のどん底に信賴すべき上官を失い、狂乱の如くその指揮官にとりすがり右往徘徊し、怒泣の後、遂に死を選

んだ人もいた。或る傷者は熱狂的に、「俺は死ぬぞ、俺は死ぬぞ」と怒号し傷つける足をひきずり、戦死者の近くにきて手榴弾の安全栓を引き、その爆裂と共に血塗れになって死んだ。偉大なる死への引導である。

我が総兵力、正規兵、臨時防衛応召兵、合計約十万人の内、六万五千人が、また戦の時まで本島に残留していた県民三十万人の内約十万人、合計十六万五千人の同胞が沖繩の山野、海中に草産す屍、水漬く屍となった。

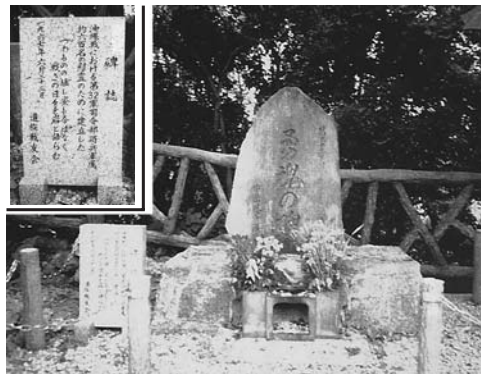
白骨は沖繩の山野を埋めた。敵側の発表による敵の損害は、戦傷死は約六万五千人であるという。敵側の戦死者も、我が戦死者と入り交じって山野に倒れ伏していたのである。



自決の為壕を出る軍司令官と参謀長 筆者画く油絵



軍司令部の洞窟



軍司令部の碑



戦没者の刻銘碑

6月23日は、沖繩「慰霊の日」である。沖繩戦最後の激戦地となった糸満市摩文仁の丘の平和祈念公園では、沖繩県の主催による「沖繩全戦没者追悼式」が行われ、小泉首相、稲嶺恵一知事、遺族ら45000人が参列して困難に殉じた同胞24万余柱の慰霊と平和祈念の誠を捧げた。園内の「平和の礎」に刻まれた戦没者の刻銘は、今年度、588柱が追加刻銘され、総数は24万383柱に達した。



いて米軍戦車に体当たりを敢行する壮烈なる光景が各地区の戦場で

目を迎えた。遺族や関係者の高齢化に伴い、参列者も漸減しているが、それでも約70名の参列者のうち、約三分の一程の学生や若者など志を継ぐ者のいることは一筋の光明である。

校歌「故郷」の歌が奉納され、最後は「海ゆかば」の吹奏裡に、参列者全員昇殿参拝して、祭典を無事終了することができた。

飯田 正能 記

平成18年6月23日(金) 15時15分から靖国神社において「殉国沖繩学徒頭彰六拾一年祭」が斎行された。元国士館大学教授金城和彦先生を代表とする「殉国沖繩学徒頭彰會」の主催によるものである。

見られたが、5月中旬、首里城の急を救おうとして「学徒斬り込み隊」が志願編成され、50余名が一体となって敵陣に突入し、壮烈な戦死を遂げた事実はその代表的なものであった。女子学徒の場合は、「ひめゆり学徒隊」として有名であるが、それは沖繩師範女子部と県立第一高女を「姫百合学舎」と呼んでいたのに因んだもので、その外、県立第二高女の「白梅学徒隊」、同第三高女の「名護蘭学徒隊」、同首里高女の「瑞泉学徒隊」、私立昭和高女の「梯梧学徒隊」、私立積徳高女の「積徳学徒隊」の7校から動員された従軍看護婦は総数約50名に及び、各戦線において、弾丸雨注の中、健気にも身を挺して負傷兵の看護に当たり、幾多の悲痛なる哀話を綴り、戦死した女生徒の数は動員数の45% 250余名を数えた。男子部の44%と共に動員学徒の約半数がうら若き命を国に捧げて戦死した。誠に痛恨の極みである。

祭典は、国歌斉唱、修祓の儀、献饌の儀、齋主祝詞奏上と進み、祭文奏上となったが、この度は、創設されて日も浅い首都大学東京法学部二年生和田浩幸君が奏上した。

建國二千六百年  
 榮ある歴史認ぶれば  
 我等が務輕からず  
 いで中山の健男児  
 若き血潮のよとみなく  
 奮ひ勵めよ國の爲

沖繩県立第一中学校校歌四節

沖繩戦は、正に軍民一体の総力戦であった。牛島満軍司令官の率いる第32軍は、19年11月3個師団のうち精鋭第9師団を台湾に抽出され、兵力補充のため17歳から45歳までの男子の軍務徴集の外、中学校生徒を動員して「鉄血勤皇隊」を組織し、女学校生徒は「従軍看護隊」に編成して、敵上陸時の戦闘隊員に編入した。中学3年生以下の下級生は通信隊員として、上級生は勤皇隊員となって軍事訓練につき、20年3月には沖繩師範男子部、県立第一・第二・第三の各中学、同工業・農林・水産、市立商業、私立開南中学の9校から100余名が「鉄血勤皇隊」に編入され、半数は第一線の戦闘に、半数は野戦築城に従事した。4月1日の米軍上陸以来、これらの少年兵が、爆雷を抱

昨年、天皇・皇后陛下のサイパン慰霊御訪問の大御心にも触れながら、沖繩戦で散った若き学徒達の祖国愛と家族愛に深く感謝し、それらを守らんとために命を捧げたその志を受け継ぎ、愛国の至情を培い、平和を守っていかなければならないとの決意を述べた。

波の上のほらおごそかに  
 なみ静かなる那覇の海  
 ながめゆたかに棟そびゆ  
 これぞ我等が學びの舎  
 友よいとしのわが友よ  
 玉とかがやう乙姫の  
 心のひかり磨きえて  
 世に鏡としかがやかん



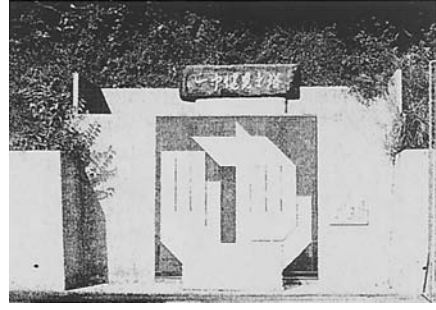
故海法秀一画

沖繩師範學校女子部  
 沖繩縣立第一高等女學校  
 校歌二節

学徒隊を祀る慰霊の塔



沖縄県立二中健児之塔  
(那覇市奥武山町)



一中健児之塔  
(那覇市首里金城町)



和魂〈那覇商業学校〉  
(那覇市松山)



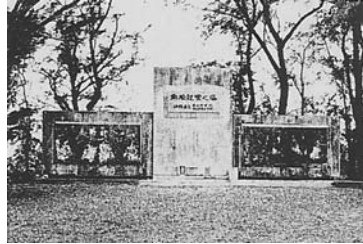
農林健児之塔  
(嘉手納町字嘉手納)



沖縄師範健児之塔  
(糸満市字摩文仁)



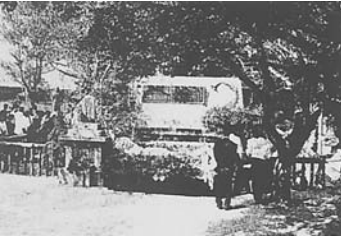
三中学徒之碑  
(本部町並里)



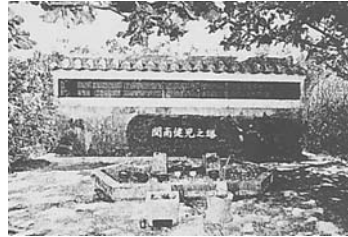
南燈慰霊之塔〈三中・三高女〉  
(名護市名坐喜原)



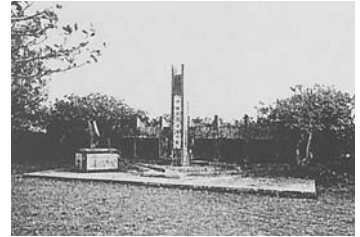
翔洋〈県立水産学校〉  
(糸満市字西崎)



ひめゆりの塔〈県立一高女、女子師範〉  
(糸満市字伊原)



開南健児之塔〈私立開南中学校〉  
(糸満市字米須)



沖縄工業健児之塔  
(糸満市字摩文仁)



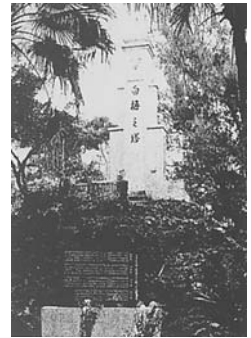
積徳高等女学校慰霊之碑  
(那覇市松山)



梯梧之碑〈昭和女高〉  
(糸満市字伊原)



ずるせん碑〈県立首里高女〉  
(糸満市字米須)



白梅之碑〈県立二高女〉  
(糸満市字国吉)

# 知覧特攻慰霊祭

理事長 菅原 道照

新緑に包まれ穏やかな天気恵まれた五月三日、12時40分頃、海自鹿屋基地から飛来したP-3Cは、3回式場上空を通過して慰霊飛行は終わり、13時参列者一同起立合掌する中、教行寺住職が入堂、読経開始に合わせて霜出知覧特攻慰霊顕彰会長、遺族全員、次いで46の各組織、団体代表が焼香して法要は終了した。住職退場に続いて直ちに後段の慰霊追悼式に移る。

霜出会長は追悼の言葉で、遺族参加者が166名、昭和62年に慰霊堂に鎮まり

ます英霊数に合わせて、一、〇三六基を目標に始められた灯籠の献納は、現在一、〇七九基に達したことも報告された。

慰霊の言葉は、鹿児島県議会代表、知覧町議会議長に続いて、遺族代表は、第55振武隊長黒木国雄大尉の令弟民雄氏がその責を果たされた。引き続き偕行社・陸士57期生会、特操会、少飛会の順に代表が捧げた言葉には、それぞれ60余年前を想起しつつ、必ずしも英霊の期待に添い得ていない現在の世情と、確乎たる国としての態度を示し

得ない、国際政治の場に於ける我が国の態度を憂える文言が籠められていた。10人余の錦城会員による4振武隊員の遺詠(後出) 献吟の次に、国分第12普通科連隊音楽隊員15名が、観音堂前に整列して海行かばを献奏、引き続きその伴奏で参列者全員が、加藤隼戦

闘隊と同期の桜を合唱して、15時近く第52回知覧特攻基地戦没者慰霊祭は滞りなく終了した。

バス道路から観音堂参道に入る所、枕崎方向に向かって、右側に夢違観音の石像が建っている。献納者は、全国少飛会、鹿児島少飛会、前迫石材株式会社、知覧特攻顕彰会で、台座には夢たがい観音と刻まれている。世田谷観音の太田住職に伺った処、法隆寺では夢違観音と呼ばれているという。

## 献吟遺詠四首

神洲に仇船よこすえみしらの

生き胆とりて玉と砕けん

五十五振武隊 黒木国雄大尉

召され来て空の護りに花と散る

今日の佳き日に逢うぞうれしき

六十七振武隊 長澤徳治大尉

敷島の大和男の子と生まれ来て

桜花と共に我は散るらん

七十六振武隊 長谷川武弘少尉

たらちねの母のみもとぞしのばるる

弥生の空の春がすみかな

光山文博大尉



開式を待つ特攻観音堂内(左から二つ目協会献花)



バス道路脇にある夢たがい観音像



町はずれから参道にかけて並ぶ灯籠の列



参道正面大天幕が張られている



開聞岳

母の像

勇士の像

とこしえに  
 み霊のとこしえに安らかならんことを祈りつつ  
 りりしい姿を永久に伝えたい心をこめて  
 ああ、南海の果てに消えた勇士よ

噫々 知覧特攻隊

国難迫る沖繩に

悲報は櫛の齒を引きて

狂瀾既倒必殺の

夷狄に加えん鉄槌を

嵐に散るか桜花

我が選びたる道なれや

夕陽沈む五月空

暎に浮かぶ故郷の

尽きぬ思いを断ち切りて

身辺清し 一封に

万斛の情折りこみて

言い残すこと既になし

黒潮洗う薩南の

緑滴るこの大地

祖霊まします大八州

愛しき人よ同胞よ

双肩に負い我は征く

さらば幸あれいざさらば

御霊に捧ぐ一輪の

菊花に寄する我が念い

「同期の桜」高誦して

遙かな空に雲流れ

頬に伝わる涙あり

噫々知覧特攻隊

### 故陸軍少尉岡部三郎（誠第36飛行隊）遺稿

## 出撃魂

四月一日、生心の思慕漸く達せんとして心情吐露以て陸軍特別攻撃隊員出撃に当たり奇しくも思到する一心を記す。

顧るに生等臣が創生は国体明徴にあり皇国守護にあれば古書に明かなる所にして亦御神勅から明かなり されば生等臣一人たりとも生ある限り皇国は安泰なり 神明は不滅なり

この言亦生等魂のある限り不変なり 生等神州に生を享け日輪海波に上るを見美しき天然の中に美しき魂は在り

日出つる国の中に広大無辺の天恩に浴す 之を識り之に報ゆるは日本人として当然のことにて生等この機に恵まれたことは生心を亦天のあはれみ給ひ生に組したることを確信致しこれに過ぎたる幸福他にあるべきや

心中情涙と感涙の誓い深きものあり 生二十五年の人生といふも従事多くす例へ千年の幸を全うしても生は生の人生の永きに比すべくにあらず

生は生の日頃の慕心おかざる所の吉田松陰先生共々愛機と共に琉球の守人となり神住える神州を守らん 心中坦々

是あり道ありて他に一物あらざるは日本人の戦の義に臨みたる心快なり死生も任務も総てなり

想念は只義となる春風駘蕩たる道に於いて包まる眞の死生感と〇えんと欲すれば国を想い国を想ふ吉田松陰先生の言 想うまいと想ふても想ふは国家のことなり これに依らざれば生死は白雲の去來の如し

生近年に至り松陰先生の言に深く傾倒しこの言を絶叫して日を送れば生死なんぞ案ずるに足らん

生若干生死を思い仏門に自己解脱を亦〇〇〇〇の従事無有の徒に打過ぎたり未だ自己本来のものを識らざるも遂に生心を吉田松陰先生の遺心に見ませり誠に有難きことなり

先生が魂は多く山鹿素行先生に発するといふもその情熱は遙かに越へたり古く楠公を見今先生を見るの一点ならずや その崇高なる精神は只想ふまいとて想ふは国家のことなり、この一点に想到行到するなり

生百年人生を為すもよくこの心をなさん、然るに二十五年の人生を以てこの行をなさんとす これ誠にありがたきことなり

日本臣民に生れたものこの歎びに浴し以て天賦たる臣行に向はんとす、誠に有難きことなり 今行に臨んで心魂

の一端を記す、徒人に生が喜び幸福をわかたんとし出撃寸前を利して記す

## 補足

畠山卓次

岡部少尉の4月1日の日誌に、「生今となりては禪にても不十分なりの感を抱く、更に強力なるものにて己を鍛えることが必要なり。それは義なり、義こそ眞に匹夫をして最高の行につかしめうるものなり。」とだけ書かれており、この「出撃魂」に日誌に書き足らなかつた気持を纏めたものと考えられる。写真版を拡大コピーして見たり、写経を能くする習字の先生に読んで貰ったりして、漸く判読したものである。

日常禅により鍛えられた崇高な精神の持ち主の彼であっても、特攻隊員と決つてから出撃までに永い時間があり過ぎ、寄せ書きの「即菩薩 即煩惱の 此の日かな」の様に、彼も人の子、気持ちの整理に相当悩んだと思います。

茲にきて禅だけでは不十分と知り、日頃尊敬する松陰先生の遺文集より義の道を悟り、従容として死地に赴くのが心願であったと考えられ、「広大無辺の天恩に浴す・これを護りこれに報ゆるは日本人として当然のことにて」として、それが為に強いて、「この機に恵まれ・これに過ぎたる幸福他にあ

るべきや」、「誠に有難きことなり」の言葉を繰り返しているが、これは精神を統一する為のものとも受け取れるが、彼は心からそれを言える心境に達していたのではないでしょう。

「天恩に浴し」「皇運を扶翼し奉らん」などは、今の時代には聞かれぬ言葉であり、意味の通ぜぬ箇所もあるでしょう。ある人は、多少の厭世観が？等と申しましたが、素直な心で読んで頂ければお分りになると思います。

岡部君が締めていた鉢巻を送り返して呉れた米艦軍医の話では、「その日の戦いも終わったと思つた頃、夕闇の中から突然日本軍機が現れ、軍医の輸送船に体当たりして来たが、翼端だけが船体に当たり、飛行機は海に落ちた」と聞きましたが、岡部機に限らずこの編隊の攻撃は、気の毒ながら失敗に終わったと思われます。私は「沖繩の空」の中で「夕焼雲の下を飛び征く友軍特攻機の影絵の様編隊を見、それを追



岡部三郎少尉遺影

うかの如く遠ざかりゆくグラマンを見ながら、海上に黒く浮かぶ目的の島影に近付いた時は、陸地も海面も眞の闇に包まれ」と書いておりますが、洋上には薄暮は無いと思われる程に、短時間で暗闇となります。この編隊が沖繩本島の間間までも行かぬ間に、グラマンの攻撃を受けて編隊はバラバラとなり闇となった海面は索敵どころか夜間飛行訓練も受けていない若い操縦者は、自機の姿勢も保てず海面に突入した機もあつたのではないかと思われ、八時頃になり岡部機だけはどうかや沖繩西方海面に辿り着いたが、闇の中から突如として眼前に、黒山の様な敵艦が現れたのでは、狙い定めての攻撃は出来なかつたと考えられる。

総ては新田原飛行場の発進が、もう30分早かつたならばに帰着するのではないかと悔やまれる。

岡部君、たとえ戦果は挙げられずとも、君の責任には非ず。英雲よ安らかに眠れと祈つてこの稿を終ります。

### 鉢巻写真説明

昭和34年、テネシー州ナッシュビルのパンダビルト大医学部E・C・ブラッケン博士から留学中の外山敏夫慶応大名誉教授(当時助教)に、遺族に返

して欲しいと特攻隊員の鉢巻が託された。

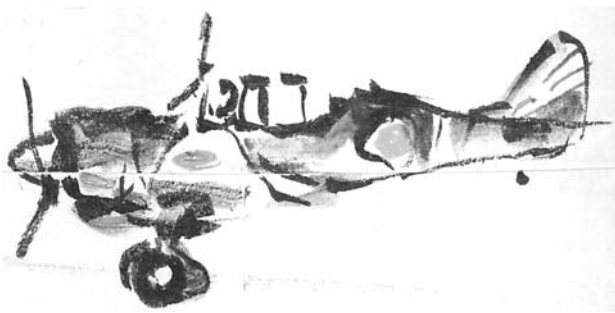
博士は海軍中尉として輸送船カスウニルに乗り組み沖繩戦に参加、昭和20年4月6日薄暮突然特攻機が突込んで来た。乗員が顔色を変えた瞬間機は舷側に激突した。パイロットは投げ出され海中に没したが、直ぐに引き上げられた。その額にはしっかりと鉢巻がしめられていた。鉢巻は寄せ書きと裏には筑養五期生上野裕と記されていた。

岡部伍長が初めて飛行機の操縦桿を握つたのは満16歳10ヶ月の時である。爾来7年4ヶ月その大部分を操縦教官として過ごした。搭乗特攻機は98直協、最高速度260ノット、米戦斗機の半分である。誠第36飛行隊は航統距離の関係から増槽を付け、爆弾は100kgに減じて17時25分、新田原から出撃した。那覇の日没は18時50分頃、敵機動部隊は沖繩東方洋上にあり、日没が沖繩本島より早く敵戦斗機の哨戒が手薄になるのである。

岡部伍長が敵のレーダーを避ける為に海面すれすれを飛んだことは論をまたないであろう。日没後約1時間の頃と判断される。カスウニル号が水平線上にシルエットとして浮び上る程度のみである。

この様な厳しい飛行条件下98直協という劣性機で、岡部伍長が敵船に命中

し得たのは、豊富な飛行経験、卓抜した操縦技術、強固な精神力の賜である。特攻の戦果は、戦後の米戦史により明らかになされたが、命中した特攻隊員名と、命中した艦名が判明しているのは希有のことである。教え子の寄せ書きの鉢巻でこれが明らかになった。教え子たちは今でも岡部伍長を慕っている。岡部伍長は教え子達の心の中で生きていたのである。(郷友59年11月号、磯部巖氏記事より抜粋)



米国から戻った鉢巻

# 伊豆山興亜観音例祭記

興亜観音を守る会

副会長 大和瀬克司

去る5月18日午後1時より、例年の如く熱海伊豆山の興亜観音の例大祭が行われた。

当日は生憎の天候であったにも拘らず、バス停から三十分弱の山道を徒歩で来られた六十名余の方々が参列され、その大半は七十過ぎの御年寄りであった。

祭儀は、まず「興亜観音を守る会」会長中村祭氏から興亜観音への寄進金参百万円が贈呈され、引き続き、親子三代に亘って観音様を御守りして来た伊丹妙徳・妙浄両尼僧を導師として行われ、支那事变時南京戦線に於いて戦没された日本軍及び中華民国軍の霊位、興亜観音を設立された松井石根大將他六名の昭和殉難者の霊位、更に報復軍事裁判で処刑された一〇六八柱の霊位、及び先の大東亜戦争に於ける戦没将士の霊位の榮譽を稱たえ御冥福を祈願する読経が唱じられ、約三十分亘る御供養の儀は終了した。

その後、本堂を整理し、約2米四方の空間を設け、小平市在住のインド舞踊家ラリタ サキ女史の佛に捧げるイ

ンド舞踊が奉納された。踊りは、「海行かば」の曲に应ずる鎮魂の踊りに始まり、インドの曲を始め数曲の踊りが行われた。

その後、舞台は本堂前の広場に移り、雨中の下、応急テント張りの屋根の下で、関東戸山流の居合道の奉納演武が行われた。演者2名は、いずれも八十年半ばを超す老年者であったが、十四本の組大刀(2名一組にて行う攻防の業と真剣にての試し斬り(畳表一枚を巻いた物を立てて戸山流居合道の型にて斬る)を行い、最後に徳富師が修めの

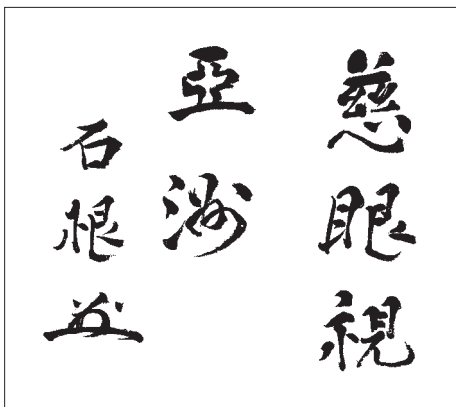


これは去年の写真

儀を行って徳富道場の演武奉納は終わり、例祭行事も午後2時過ぎを以て無事終了し、参加者も夫々に下山した。当日、晴天であれば本堂から熱海湾、近くは初島、遠くは大島を始め伊豆諸島の眺望は一見に値するものがあるが、雨天では致し方の無いことであった。



松井大將



堂内の観音



露座の観音



戦没将士英霊 殉難1068霊位 七士之碑



# 世田谷観音寺の文化財紹介(6)

## 十三、特攻平和観音堂

先代睦賢和尚は、予期しなかった特攻平和観音像をお祀りすることになり、取り敢えず本堂の聖観音像の傍に奉安申し上げた。然しながら、性格の異なる観音像が同じお堂内に御座すことは好ましくないと、特攻平和観音堂を別を持つことを決心された。

幸い、明治維新の神仏分離政策によって、人手に渡った華頂宮邸の持念仏堂が、都下、下仙川にあることを知った先代和尚は、譲り受けて境内に移築し、特攻勇士の御霊を祀るべく工事を始められたが、工事半ばで昭和30年5月24日遷化され、後を賢照和尚が引き継いで、昭和31年5月18日に落慶法要が営まれた。

天井には当時を偲ばせる菊の御紋が見られる。向って右の観音像の胎内には陸軍、左側には海軍の特攻戦没者霊名簿が収納されている。

平成16年春から改修工事が始まったが、予期以上に老朽化が進んでいた為に、工事は延引し平成17年9月、年次法要の直前に完工した。



特攻平和観音堂内部



改修された特攻平和観音堂 右側は本殿

### 特別攻撃隊の頌碑

お堂の向かって右前に見られるのは、靖國神社（遊就館）に納められている特別攻撃隊の頌碑と同じもので、共に田畑一作氏の製作になる。碑文は左の通りで、英訳文が付されている。

### 特別攻撃隊の頌

わが国が存亡をかけた大東亜戦争においては、開戦当初から生還を期すことのない特攻作戦が決行された。

弱冠十七、十八歳から三十歳代までの勇士が、肉親への愛着を断ち切り洋々たるべき人生を捨て、偉大なる戦果を挙げ、ことごとく散華された。その数およそ六千柱、壮烈無比なこの攻撃は敵の心胆を寒からしめ、国民はひとしくその尽忠に感涙した。

特別攻撃隊の戦闘は、真に至高至純の愛国心の発露として国民の胸奥に生き続け、また世界の人々に強い感銘を与え、わが国永遠の平和と発展の礎となっている。

ここに心からの愛情をこめて特別攻撃隊の諸史料をこの遊就館に納め、その精神と偉業とを後世に伝える。

昭和六十年十二月八日

特別攻撃隊慰霊顕彰会

会長 竹田 恒徳



**世界平和の礎碑**

左側に見える石の表面には、世界平和の礎、昭和廿九年十月吉日 吉田茂謹書、裏面には、昭和四十年一月、菅原 裕建立と刻まれている。菅原 裕氏は、東京裁判で荒木貞夫元陸軍大将の弁護士として活躍された。

菅原弁護士から庭石にと、京都桂川産の銘石が贈られて、賢照和尚は単なる庭石では勿体ないと、大磯の吉田邸に赴いて揮毫を願い出て快諾を受けた。処が元首相は、何と書こうかと暫し呻吟されたそうである。そこで和尚が、「世界平和の礎」で如何でしょうかと申し出ると、それで良いと即決して筆を執られたということである。

**十四、夢違観音像**

山門を入れて直ぐ左側が六角堂で(67号42頁参照)、その先の池の中に夢違観音像が御座します。特攻平和観音



開眼10周年を記念して、法隆寺に御本尊の拡大鑄造を願い出てお認め戴いたもので、この像も田畑一作氏によって製作された。

**十五、王子稲荷神社の鳥居**

参道を挟んで池の反対側、木蔭に立っている鳥居は、先代が戦前一時期弥直として奉仕された、王子稲荷神社の鳥居である。神社の本殿は、お寺からそう遠くない三軒茶屋にある、精養堂(先代が創立されたベーカリー)の庭先に祀られているそうである。



手前の灯籠は利休灯籠といって、茶室前の庭に置かれるのが一般的であると謂われている。この灯籠は先代が石洲流茶会を催しておられた関係で入手されたそうである。尚境内にはこの様にして入手又は奉納された石燈籠は八基あって、特攻観音堂の左手に在るのは春日灯籠で、特攻隊御遺族の猫橋と

**十六、文珠菩薩**

写真の右側、木蔭に利休灯籠の頭部が見えることから、この像は更に参道寄りに御座しますことが判る。三人寄れば文殊の智慧”と言われている様に、文殊菩薩は佛様の中で智慧を代表されている。

この菩薩像は、太宰府天満宮の境内にあったが、御一新の神佛分離令で、当時の宮司が出入りの石屋に引き取っ



て貰った俣に、永らくその石屋に保存されていたのが、以下の様な縁でお寺に移されることになった。

石勝の職人原田仙太郎氏は、美術学校二年生の時に、偶々アルバイトした石勝で石工に魅せられて、学校を中退して石職人になった。

初代石勝の辰五郎氏に可愛がられたが、晩年石勝を辞めて和尚に頼んで、山門の左袖の建物に三年程住込んだ。

原田氏と太宰府の石屋が知己であったことから、文珠菩薩のことが和尚の耳に入った。本地垂迹説では、文珠菩薩はお稲荷さんの本地であるから、王子稲荷神社に代わって由緒あるこの菩薩像を、世田谷山観音寺が引き取ることに

なった。原田氏は大の酒好きで、一日清酒一升瓶一本の現物給与で寺内の清掃等に当たり、お酒以外は殆んど口にしない生活であったという。昭和40年代初め頃のことである。

**十七、五輪の塔**

池に向かって右手に在る五輪の塔は、前出の原田仙太郎氏が小松石を素材として作成したもので、当然のことながら、先代睦賢和尚が此処に眠っておられる。



### 十八、梵鐘

五輪の塔の更に向って右にある梵鐘は、慶長十年の銘刻がある。山門、六角堂等の一連の建物と共に、新瀨の豪



### 十九、多宝塔

特攻平和観音堂の左斜め後方、敷地の東北隅に建つ多宝塔は、先代が義兄弟の仲であった、銀座玉屋主人の宮田氏から戦前に贈られたもので、現存するお寺の建物、その他物件の中で、最も早く敷地内に建てられたものである。

商、中野寛一氏から先代が一括購入したものである。大晦日には、除夜の鐘を打つ近所の人々が、長蛇の列を作るそうである。



### 二十、裏門

裏門前の道路には、裕天寺、三軒茶屋間の東急バスが約十分間隔で通っている。「世田谷観音」という停留所がある。門構えからしてもこちらの方が正門らしく見えるが、本堂と特攻観音堂、山門何れもこちらを背に建っている

ので止むを得ない。門柱の素材は、多宝塔の礎石部分と共に、精養堂の初期のパン焼竈が改築されて不要になった耐熱性の石が使われている。案内板の脇に立つ作務衣姿は、現住職の太田賢照和尚である。



連載を終わるに当たって平成17年2月の62号以来、6回に亘った世田谷山観音寺に在る文化財紹介は、今回で終わります。佛像には旧国宝であったものも含まれていて(六角堂の不動明王像と八大

童子像、現在は国の重要文化財)、佛像に関心のある方にとっては、拝観価値が高いものも多いことと思われます。首都圏在住の方のみならず、遠隔地にお住いの方々も、機会を利用して世田谷山観音寺まで、足を運んで頂ければ誠に幸甚に存じます。

これで一応筆を擱きます。有難うございました。(文責 菅原道熙)



毎年9月23日の年次法要 焼香の列

## 靖國問題中興の宰相・小泉総理に求む「八月十五日靖國神社参拝」の公約を断行し、中韓両国の「干渉」を封殺せよ

(英霊にこたえる会 広報委員長) 会員 佐藤 博志

小泉純一郎内閣総理大臣は、本平成十八年一月四日の年頭記者会見において、「靖國カード」の効果の限界を知らしめ、自分自身の靖國神社参拝を中・韓両国が非難していることについて、「外国政府が心の問題に介入して外交問題にする姿勢は理解できない。一つの問題で他の交渉の道を閉ざすべきでない」と述べ、靖國問題を理由に頑なに首脳会談を拒否している両国の対応を改めて批判した。まさにその通りである。一国の戦没者の慰霊追悼に他国が容喙する等は以ての外、毅然として排除して然るべきである。

顧みれば、五年前の平成十三年四月自民党総裁選で、「何が何でも八月十五日には、靖國神社に参拝する」と宣言して国民の圧倒的支持を得て総裁の座を射止め小泉政権は発足したが、その年は内外の反靖國勢力の圧力に屈し八月十三日の「前倒し参拝」となり、剩え靖國神社を形骸化する「国立追悼施設」建設を示唆する発言を行い禍根を今に残している。あの時「十五日参拝」を敢行しておれば、その後の展開は、大きく変わった筈だ。内なる敵は

小泉総理の業績については、郵政民

営化一本槍・拉致問題或いは米国盲従等その評価は区々であるが、こと靖國問題に関する限り一般国民の靖國神社に関する関心を一気に盛り上げるとともに、政官財・学会・知識人果ては司法界に至るまでに張り巡らされた中韓両国の謀略網に潜む工作の影を浮かび上がらせ、祖国の明日を憂いる草莽の民の崛起を促す刺激剤となるなど、その波及的效果も含め大いに評価されて然るべきであろう。

小泉総理の靖國神社参拝の情熱は、曾って訪れた知覧特攻平和会館に展示されている特攻若鷺の遺書等に触れ、感動の余り流した滂沱の涙に由来していると言われている。理屈ではない。人間としての自然の感情の発露である。多くの国民も全く同じ心情で靖國神社に詣でているのである。総理も「内閣総理大臣である小泉純一郎が、政治家として、国民の一人として、戦没者の御霊に感謝の誠を捧げるべく靖國神社に参拝する」と述べている。

靖國訴訟は国体破壊を狙う政治運動さて、平成十三年八月十三日の小泉総理の靖國神社参拝については、その違憲性の確認や精神的苦痛に対する損害賠償を求めて、全国の六か所(東京・大阪・松山・福岡・千葉・沖縄)で国

及び小泉純一郎が提訴された。中でも東京・松山においては、参拝差止め要求で靖國神社までが被告席に立たされた。原告団は二千五百三十人(小林よしのり『靖國論』一二三頁)在日韓国・朝鮮人や台湾人も加わっており、そのリーダーは浄土真宗本願寺派の菅原龍憲など名だたる反靖國宗教家を含む反戦平和を旗印に、わが国の国体破壊を狙う左翼共産党の面々である。彼等は裁判の名を借りて政治活動を行っているのである。新進気鋭の稲田朋美衆議院議員(弁護士)は『正論』12月号の(総理にあんな靖國参拝をさせた司法の大罪)の論説で、これらの一連の靖國訴訟の実態を仔細に吟味し『司法の政治化を憂う』として「靖國訴訟の原告団にとって請求が認められるか否かが問題なのではなく、いかに裁判所を通じて靖國神社を攻撃し、日本を貶めることができるかが問題なのである。このような人々に悪用される裁判所であってはならない」と批判し、最後に『私的公的か』という不毛な議論に引きずられた靖國訴訟、及び一部の不当判決(筆者注)主文で原告の請求を棄却しながら、傍論の判決理由で違憲と判じたいいわゆる『振じれ判決』、平成十六年四月七日亀川清長裁判長による福岡地裁判決及び平成十七年九月三

十日大谷正治裁判長による大阪高裁判決。原告側は敗訴したにもかかわらず実質勝訴として宣伝、マスコミも違憲判決として報道、世論を誤誘導する一

の悪影響であることを考えると、反靖國勢力の裁判を利用した政治運動は着実に効果を上げていることを認めざるを得ない」と警告を発し、その事態の改善に、所属する衆議院法務委員会で見事に真摯に取り組み決意の程を披露されている。

ここで稲田議員が不毛の議論と言われた総理の靖國神社参拝に公私の別があるのかについて論じてみたい。靖國訴訟において国側は私的参拝という消極的姿勢で裁判官の矛先をかわそうとしているが、総理の参拝は当然公的であり、国側の弁護団は堂々と公的参拝と主張し裁判官と対決すべきである。

平成九年の愛媛玉串料裁判で最高裁は違憲の判決を下したが、これは玉串料の公費支出が違憲とされたのみで、参拝については政教分離の憲法判断の基準となっている津地鎮祭最高裁判決の「目的効果基準」に照らせば、合憲であることは今や法曹界では主流の見解となっている。しかし稲田弁護士の指摘されたように左傾化の激しい裁判官の暗躍にも監視の目を向けざるを得ない今日の情勢下においては、敢えて火

中の栗を拾う勇猛心を以て靖國訴訟に当たるべきである。

**参拝の是非をめぐる論争と歴史認識**

小泉総理の参拝継続の意思表示の重なる度に中国の反発は高まり、駐日王毅大使は「A級戦犯」を合祀している靖國神社に総理はじめ日本の指導者が参拝することは、彼等の犯した侵略戦争により多大の人的・物的損害を受けた中国の人民の感情を傷つけ絶対に認めることはできない、と機会ある毎にその参拝中止を声高に要求している。

その論拠は、A級戦犯は極東国際軍事裁判で有罪を宣告され処刑された戦争犯罪人である。その犯罪人を祀る靖國神社に参拝することは、サンフランシスコ講和条約第十一条でその裁判を受諾して国際社会に復帰した日本としては、先の大戦を正当化する行為で国際信義にもとるものであり、靖國問題は単に日本の国内問題にとどまるものではなく、国際的な外交問題でもある。このような論理の展開は、日中間の軋轢は中東情勢の対処に精一杯で東アジア地区での紛争発起を望まない米国の国情を睨み、ロビイストやジャーナリズムを利用して、内政干渉の抗議を排除する中国の策謀に他ならない。現に共和党の長老ハイド下院国際関係委員

長の靖國参拝批判やニューヨーク・タイムスの小泉総理非難の論調は、看過し得ない現象である。その謀略の手は当然わが国に及んで六月二日の予算委員会、岡田克也民主党代表(当時)が小泉首相の「A級戦犯」は戦争犯罪人である」との認識を示したことに付け込み「A級戦犯が昭和の受難者として合祀されている、その一点をもって靖國には総理として行くべきではない」と小泉総理を批判した。これは王毅駐日大使の論理と軌を一にし、後述する最近頃に煩くなつた戦争責任の追及と「A級戦犯」の合祀とを絡めて批判する反靖國派の思潮そのものであり、東京裁判史観より未だに覚醒しない自虐史観の盲信者で、且つ又靖國神社の本質を弁えない天人共に許さざる不屈きものというべきであろう。この「戦争犯罪人説」について、民主党国対委員長野田佳彦議員は、昭和二十七年四月二十八日の講和条約発効直後の二、三年の四回に及ぶ国会決議並びに「戦傷病者遺族等援護法」・「恩給法」等の一部改正などにより、A級・BC級すべての「戦犯」の名譽は法的に回復されている。すなわち「A級戦犯」と呼ばれた人たちは戦争犯罪人ではない、として昨年十月十七

日「『戦犯に対する認識と内閣総理大臣の靖國神社参拝に関する質問書』を提出した。これに対する政府側答弁は、

「平和条約第十一条による極東軍事裁判及びその他の連合国内法に基づいて言い渡された刑ではない」と。この点に関し十二月二十六日付の産経新聞は「わが国の国内法により、言い渡された刑ではないと指摘することにより国内では戦争犯罪人とは言えないことを明確にした」と評価しているが、筆者は納得し難い。この表現では「A級戦犯」に対する他国の容喙を黙認する意図が垣間見えるからである。現に答弁書は「所謂東京裁判は、国際法に違反した法的根拠を持たない勝者の敗者に対する復讐裁判であるとの批判のあることを認めつつも、わが国がその裁判を受諾した以上、これに異議を申し立てる立場にない」ことを一貫して主張している。問題は平和条約第十一条の解釈である。この条項でわが国は裁判を受諾したとなっているが、何を受諾したのか。この答弁書では判決理由も含め全体を認め所謂東京裁判史観の正当性をも認めていると解釈できるが、果たしてそれが真実だろうか。条約締結当時の西村熊雄条約局長は「判決を受諾した」と述べており、その意味す

るところは、当時通例となっていた特赦条項を阻止し、日本政府が連合国に代わり刑を執行する責任を負うことを規定したものに過ぎない。昭和六十一年八月、韓国のソウルで開催された国際法学会大会で諸外国の国際法学者は「第十一条は、日本政府による刑の執行の停止を狙ったものに過ぎず、講和成立後に日本政府がいつまでも東京裁判の正当性を認め続けるよう義務づけたものではない」との共通見解を表明したと本大会に出席した佐藤和男青山学院教授（当時）が明らかにしている。この法解釈が今日の国際法学会では常識とされている。

ところが、中曽根康弘元総理が昭和六十年八月十五日靖國神社に公式参拝後、中国の非難に屈服して、その後の参拝の中止を発表した昭和六十一年八月、時の後藤田正晴官房長官が、「平和条約第十一条で国と国との関係において裁判を受諾している。」との政府統一見解を表明した儘、その後等の訂正を行うことなく現在に至っている。中国との間で靖國問題が政治問題化した時点と時を同じくして政府見解が代わったことも注目すべきポイントである。朝日新聞や社会民主党首田辺誠（当時）等の中国側への内通暗躍のあったことは知る人ぞ知るである。

小泉総理は、その歴史認識において平成七年八月十五日の「村山談話」を踏襲する発言を時に応じ口にする。昨年四月参加したアジア・アフリカ首脳会議においても、わが国がこのような認識を心に刻みつつ、として「村山談話」に触れている。「村山談話」とは、自民党との連立政権下、総理となった社会党の村山富市党首が、彼の意図にそぐわない結果に終わった「国会謝罪決議」に業を煮やし、平成七年八月十日に閣議決定を経て発表した総理談話で「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えた。私は、未来に過ちなからしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止める、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からお詫びの気持ちを表明する」というもので、正に東京裁判史観そのものではないか。この歴史認識がわが国の正当な見解として世界各国に発信されているとは我々にとり痛恨以外の何物でもない。然し、殉国の英霊の慰霊追悼は歴史認識とは全く次元を異にする崇高な人倫の道、国家の道徳たるべきことを銘記すべきである。

戦争責任追及と「A級戦犯」合祀問題  
 最近小泉総理の靖國神社参拝に拒否反應を顕にする中国との確執は、わが国の国益を損ずるとして、マスコミ始め政官業或いは学会・文化人等により参拝中止の声や「A級戦犯」分祀論乃至は新たな「国立追悼施設」建設の必要性が俄かに高まりつつある。中でも戦争責任を明確にすべきだとの意見が目立つようになってきた。東京裁判で断罪された東條英機元総理はその供述書において、「この戦争は飽くまでも自衛のための戦争であり、国際犯罪として勝者より訴追・糾弾されるいわれはないが、敗戦の責任は当時の総理大臣として自己の責任として受諾するのみならず、進んで之を負荷せんことを希望する」と述べている。自衛戦争であったことは敵将軍マッカーサー元帥も認めていることであるが、前述したように平和条約第十一条を曲解して自虐史観に酔う偽善的平和主義者は、自ら戦争責任を明らかにして被侵略国の被害者にその罪を謝罪しない限り、日本の戦後は終わらないという。特に、「論座」（平成十八年二月号）で靖國・歴史認識・アジア外交で朝日新聞と「共闘」を宣言した読売新聞グループ会長・同主筆の渡辺恒雄氏が「終戦直前にソ連が日ソ中立条約を突如破棄して満洲地域に侵略し、終戦後も戦鬪行為を止めず、そして六十万人の日本人を拉致し、シベリアで重労働を強制し五万人以上が死亡した。これは戦争犯罪と言つてよい。しかし日本の戦争責任を国民自身が検証確認して始めて、このスターリン支配下のソ連の侵略を非難し得る」というに至っては自虐もここに極まるというべく又何をか言わんやである。彼は日本の戦争責任追及は、満洲事変前後からすべきだとして社内専門プロジェクト・チームを設け一年以内にやり遂げると意気込み、現在読売新聞に特集記事を連載中であるが、その結果は満洲事変、支那事変、そしてそれに続く大東亜戦争も、すべて世界赤化を目指すスターリンの指揮下にある国際コミンテルンの謀略工作の成せる業と気付くのがオチである。尾崎・ゾルゲ事件を始め、その間の事情は、最近復刊された三田村武夫著「大東亜戦争とスターリンの謀略」（「戦争と共産主義」）に詳しい。愛称「ナベツネ」さんにご一読をお薦めする。さて、所謂「A級戦犯」十四柱（死

刑判決を受けて絞首刑となった東條英機・板垣征四郎・土肥原賢二・松井石根・木村兵太郎・武藤章・広田弘毅の七柱、終身刑・禁固刑とされ服役中に死亡した白鳥敏夫・小磯國昭・平沼騏一郎・梅津美治郎・東郷茂徳の五柱及び判決前に病死した松岡洋右・永野修身の二柱合わせて十四柱)の合祀については、昭和四十一年、「靖國神社未合祀戦争裁判関係死没者に関する祭神名票について」(引揚援護局調査課長通知)によって「A級戦犯」の「祭神名票」が靖國神社に送付され、昭和四十六年筑波藤磨宮司が崇敬総代会に諮り了承されたが、当時「靖國神社国家護持法案」が国会で審議の対象となっており、政治問題化していたこと等を考慮し、その合祀時期については筑波宮司に一任された。昭和四十九年同法案は廃案となり、昭和五十三年七月急逝された筑波宮司の後任として着任した松平永芳宮司が、同年十月十七日「昭和殉難者」として合祀されたのが実情であり、前述の野田議員の質問に対する政府答弁が「靖國神社の行う合祀は、宗教法人である靖國神社の宗教的事項であるから、政府としては、いかなる問題があるか応える立場にない」と事勿れ、保身主義の官僚答弁で逃げているが、国もその合祀に関わっている。

たことは、紛れもない事実である。その合祀事実が一般的に世間に知られたのは、翌年の四月十九日、朝日新聞のスクープによってであり、左傾化しつつあったマスコミで物議を醸したが、時の大平正芳総理は、記者団の質問に「私の気持ちで行くのだから、批判はその人にまかせると淡々と答え、二日後の四月二十一日の例大祭に堂々と参拝し、国会でも「A級戦犯或いは大東亜戦争に対する審判は歴史がいたすであろう」と明快に答弁している。当に至言である。国内法的にわが国には、戦争犯罪人は存在しない事は既に述べたが、「法務死者」としてA級・BC級等の分け隔てなく一般戦没者同様すべて靖國神社に合祀されることは夙に法制化されていたにも拘らず、今になって戦争指導者とその命令に従って戦場に赴き不帰の客となった一般将兵とをいわば加害者と被害者の立場になぞらえ分祀すべきという風潮が各界のリーダー層に急速に広がりがつつあるのは、戦争責任の追及に名を借りて中国の思惑に阿諛迎合する売国奴的行為で遺憾の極みである。現在の価値判断で過去を裁くなどとは傲慢以外の何者でもなく、それは後世の歴史家に委ねるべきことであることは、大平元総理の言われる通りである。

**今年 は 天下 分け 目の 正 念 場**  
マッカーサー元帥は解任後上院軍事外交委員会で「米国が過去百年間に犯した最大の政治的過誤は、共産主義者を中国において強大にさせた事であると懺悔した。毛沢東は中華人民共和国建国以来、わが国を攻撃目標としてその謀略工作を着々と推進し、四代目の胡錦濤現政権は日本は既に精神的属国であるかの如く振る舞うことに躊躇しない。中国が靖國問題に固執するのは、この「靖國カード」が日本をして中国の隷属的国家たらしめることに最も効果的な切札であることを日本の謝罪外交より学んだからである。アジアの盟主として日本を支配下に置くその日の来るまで靖國参拝を中止しようが、手を代え品を代え日本攻撃の手を緩めることのないことは、火を見るよりも明らかである。しかも彼等に内通する反日日本人の陽動、某識者の言われる通り「日本の敵は日本人」なのである。やがて八月十五日、日本の将来を左右する正念場である。小泉総理が靖國参拝を断行すれば、わが国の空気が変わる。我々は夫々の立場であらゆる手段を講じ、総理の公約実現を支援しよう。ポスト小泉の後継者争いは、要らざる中国の介入や、経済同友会の雑音などで複雑な様相を帯びてきた。国民の

期待する安部晋三官房長官が永田町の特殊論理で福田元官房長官に敗れた場合、命をかけて新しい「国立追悼施設」絶対阻止のために戦わなければならない。特攻で若き青春を国に捧げた学徒兵は冷静に日本の敗戦を予測していた。しかし自分等の死に方が祖国の明日の行方を決めるのだと敢然と敵艦に突入して散華したのである。その祖国愛の魂が神として靖國神社に祀られているのだ。その靖國神社を否定し、新たな追悼施設を考える輩は日本人の魂を売る売国奴である。独善の渡辺御大、その黒幕の中曽根大勲位らの早々の引退を勧告する。  
天皇のご親拝も話題に上っているが、陛下の大御心は、環境が整えば、一日でも早く九段の坂上に玉歩をお運び遊ばされることをお望みなされておられることと恐れながら拝察する。その環境整備の大任は小泉総理の双肩に掛かっている。来る八月十五日に靖國神社参拝の公約を果たし、後継者に範を垂れ中国の野望を挫き、ご親拝の道を切り拓き、救国の大宰相として歴史に名を留められんことを切望して止まない。「志士は溝壑に在るを忘れず。」

## 戦没特攻隊員遺族の歌

(亡き人を慕う気持)

・安達貢少尉の母サクさん

やむわれを枯梗手折りきて慰めし

優しき吾子は永遠にかへらず

安達少尉 57期、石腸隊、19年12月

22日バゴロト発進、スリガオ海峡の敵

艦に突入。次の遺詠がある。

よしやよし世を去るとてもわが心

御国のためになお尽さばや

・井樋太郎少尉の弟井樋弘典氏

故郷の五月の楠の木洩日を

君住む海に送り届けむ

井樋少尉 57期、石腸隊、19年12月

12日バゴロト発進、レイテ島バイバイ

沖の敵艦に突入。次の遺詠がある。

数ならぬ身にはあれども日の本の一

歴史書くてうその一しづく

また井樋少尉には七五調七句十九節  
より成る長詩がある。その最後の一節

父の病の篤きとき

姉と詣でし不動尊

幼き四人の集りて

母に贈りしゴム手袋

あゝ我がなきあと同胞は

一つ心に結ばれて

変るなかれと祈るかな

・牧野顕吉少尉の姉丸田むらさん

見る限り菜の花そよぐ志布志原

ここより翔びて帰らぬ弟

姉、牧野くみさん

勲章のリボン色褪せ南冥に

果てし弟のいさをはかなむ

牧野少尉 幹候9期、護国隊、19年

12月7日バゴロト発進、オルモック湾

の敵艦に突入。次の遺詠がある。

鬼神どもなからずものは世の中の

人の心のまことなりけり

・石川一彦大尉の妻ふさえさん

見せたき子つけたき思ひ抱き来し

夫との会ひは幻と消ゆ

遺品の手帳繰れども特攻の文字なく

ト号という暗号今にして知る

石川大尉 少候22期、第62振武隊長

20年4月3日6航空に連絡の為要務飛

行中殉職。次の遺詠がある。

何時までもゆかしき心永久に持ち

銃後に備へる大和なでしこ

・山口恰一少尉の妹筒井純子さん

色褪せし兄のうつしえのほほえみて

懐かしさこみあげ指にて撫づる

天翔けり大空に散りし吾が兄は

現代の平和見守りてゐむ

山口少尉 57期、第68振武隊、20年

4月9日知覧発進、沖繩洋上へ。次の

遺詠がある。

あられ降る矢弾のふすま何かせん

吾がゆく道は大君のため

・林 義則少尉許婚小栗楓子さん

亡き人のいまはの際の足跡を

残し給ひし知覧恋しく

林少尉 幹候9期、第105振武隊、20

年4月22日知覧発進、沖繩洋上。

・大村秀一伍長のご母堂の歌集より

トンボ追ひし子はいつしかに

南海を天翔りつつ敵機撃たむと

悠久の大義に生きし空の子は

生なく死なく母親もなし

大村伍長 少飛13期勤王隊19年12月

7日バゴロト発進オルモック湾

・大石正則少尉の母トクさん

はろばろと来し方顧れば天かけし

白マフラーの子の笑顔顯つ

大石少尉 海軍飛行予備学生14期、

八幡神忠隊、20年4月28日串良発進、

沖繩洋上。次の遺詠がある。

もろもろの装ひつけて国のため

いで立つ姿母に見せばや

・後藤光春少尉の弟慶生氏

この空よ亡兄も仰いだこの空よ

空は変わらば何処におわす

後藤少尉 57期、第66振武隊、20年

5月25日万世発進、沖繩洋上。

・巽精造少尉の許婚者文子さん

ありし日の君しのびつつ手にとりし

遺書の冷たくわが手に重し

いいなづけのままに征くこと

許せよと

巽少尉 幹候9期第64振武隊、20年

6月11日万世発進、沖繩洋上。次の遺

詠がある。

皇国のおさなき子らをみちびかむ

汝のつとめいかに重きぞ

遥かなる豊後水道こえしまま

永久に還らぬ君のおもかけ

市川尊継少尉の妹二宮弥生さん

市川少尉 海軍予備学生14期、回天

千早隊、20年2月26日硫黄島海域。次

の遺詠がある。

回天

蹶然天意漲る皇土

鬪哉出家郷去校庭

鬱勃戦意磨入魂技

必死必殺遂回天業



・天野三郎少尉に妹天野和子さん

靖国の社に向かい手合掌す

レイテの島に散りし兄見ゆ

(亡き人の気持を忖度し偉業を称える)

・天野三郎少尉の父天野敬二氏

悠久の大義に生くと三郎は

レイテの敵に体当りしつ

天野少尉 57期、一字隊、19年12月

5日バゴロド発進、スリガオ海峡の敵艦に突入。次の遺詠がある。

大君の御為に剣取るからは

斃さでやまじ我は死すとも

・根尾久男中尉の父上

吹く毎に散りて行くらむ桜花

積もりつもりて国は動かじ

身をもって君に仕えし真心は

吾子ながらも尊かりけり

根尾中尉 海軍飛行予備学生、神風

特別攻撃隊菊水部隊隊隊長、20年3月11日鹿屋発進ウルシーに向う。次の遺詠がある。

いさみ来て今に思へば悲しけり

なが年月の父の恩愛

・岩井定好伍長の父上

国の為散りし我子にはげまさ

老ひて再び土にいそしむ

岩井伍長 少飛15期、第105振武隊、

20年4月23日知覧発進、沖繩洋上。

・大井隆夫少尉の父上

従容含笑赴困難 必死唯期必殺彈

一瞬轟然屠醜虜 堪称義胆興忠肝

大井少尉 (57期、石腸隊、19年12月

5日バゴロド発進、スリガオ海峡。)

・後藤光春少尉の弟慶生氏

特攻の黄金の花よ何を知る

思ひを語れ雄叫びを挙げて

後藤少尉 (前出)

・伊奈剛次郎少尉の父上

時は来ぬ命の狼火あかあかと

世をとどろかせ振武伊奈隊

伊奈少尉 57期、第49振武隊長、20

年5月6日知覧発進、沖繩洋上。

なお父上には次の歌もある。

かがまりて粉ひく妻の髪白し

いのちなげうちし子をば語らず

・池田元威少尉の弟研二氏

七八度生きかへりつつえみしらを

攘はむまでは体当りせん

池田少尉 57期、第56振武隊、20年

5月6日知覧発進、沖繩洋上。次の遺詠がある。

命だに惜しからなくに惜しむべき

ものあらめやも君が為には

以上は特攻戦死の報に接し遺族の詠つ

たものであるが、別れに臨んだときの

歌を一つ紹介して結びとする。

緒方 襄中尉 海軍飛行予備学生13

期、第一神雷部隊桜花搭乗員、平泉門

下生、第一神雷部隊は20年3月21日鹿

屋を発進したが、多数のグラマンの要

撃に遭い、一式陸攻から桜花(ロケッ

ト特攻機)を発進させる前に撃墜され

てしまった。

襄中尉より特攻隊員志願の決意を打

明けられた母三和代さんは、今生の別

れに我子の任地に赴いた。

うつし世のみじかきえにし母と子が

今宵一夜を語りあかしぬ

これがその折の和歌である。そして

帰宅後、襄中尉がひそかに母の鞆に入

れておいた和歌、

いざさらば我は御国の山桜

母の身元にかへり咲かなむ

を発見する。そのとき母三和代さんは

散る花のいさぎよさをは愛でつつも

母の心は悲しかりけり

と詠っている。

緒方中尉について

清がすがしい花の盛りにさきがけて

玉と砕けむ丈夫われは

死するともなほ死するとも我が魂よ

永久にとどまり御国まもらせ

これは出撃三〇分前に、鉛筆で海軍

手帳に走書きした絶筆の辞世である。

緒方中尉は兄徹と共に、国史学の泰

斗平泉澄博士の門下に入り、連綿脈々

として続いた我が青史の奥義に心酔し

て、関西大学在学中、大東亜戦争風雲

急を告げるや、学徒として海軍に入り

飛行将校となり、特攻を志願した。

用箋九枚に仮綴りした歌集「赤子集」

には、

兄も行け我も果てなむ君の辺に

尽く果てむ我が家の風

という和歌がある。

兄徹もまた海軍中尉(京都帝国大学

より海軍第十二期飛行予備学生となり

昭和19年12月25日比島ミンドロ島にて

戦死)は大学ノートにしたためた「我が

が家族に」と題する詩集を、昭和十九

年七月、北方の戦地より故郷に書き送っ

た。その中に「襄とともに」の一節に

は、

その昔肩を並べて通ひし中学生の古

びたる鞆今は家にあり

としを経て空に真赤な焰燃え正義壯

絶の戦日に日に苛烈なり

二人また肩を並べて空に向かう我が

家のつたなき兄弟

生命を捨てて空に伝統を創らむとす

この家の伝統

このようにしたためてあった。

## 空挺部隊靖國御祭神奉賛会の慰霊祭

—この行事の永續する途—

5月20日靖國神社で神楽を奉納して行われた。参加者42名、この会が発足した当初は、昔の空挺部隊の戦友と戦死者の遺族で百名近くも集まったが、追々先細りとなり憂慮していた。ところが一昨年から、自衛隊空挺部隊退職者を主体とする空挺同志会東京支部の参加を得るようになり、本年も参加者の大半はその人達だった。現在はまだ会長や主な世話人は戦友が担当しているが、やがて全面的に戦後の人たちに続行してもらうことになる。

当日伊奈会長（挺進第二聯隊）が捧げた祭文は次の通り。

### 空挺部隊御祭神に捧げる言葉

共に訓練し共に戦った我が空挺部隊の戦友達、あなた方が挺進殉国の信念のもと、み国に命を捧げられてから鳥兔<sup>うさぎ</sup>々々六十有余年が去りました。誠に浮かぶ戦友達のお姿は、明眸皓齒<sup>めいぼうこうし</sup> 匂<sup>にお</sup>うが如き若武者ですが、生き残った我々は馬齢を重ね、ご覧の通り杖を頼りに老耄<sup>らうぼう</sup>蔽うべきもありません。

顧みれば、緒戦のパレンバン作戦は眩いばかりの戦果を挙げましたが、蒲

生中尉以下三十八柱を靖國の神と祀りました。戦争末期のレイテ並びにネグロスやルソンの戦場では、数千名を護国の神と仰ぐことになりました。

また戦場に向かう途中空母雲龍と運命を共にした人達のことと忘れることが出来ません。更に尽忠報国の極みともいふべき特攻義烈空挺隊のことなど、我が空挺戦史に強い足跡となつています。

レイテに出撃するとき宿舍の壁に誰かが書き残した歌

花負いて空うち征かん雲染めん

屍悔なく我ら散るなり

我が空挺部隊の将兵誰もがこの精神でおりました。御祭神はこれのお気持ちでまっしぐらにお進みになられたのでしよう。

かつてよく歌ったものでした……離れ離れに散らうとも／花の都の靖國神社／庭の梢で咲いて逢おうよ

桜花の季節は過ぎましたが思い出して下さい。

本日集まった仲間たちと 御霊も中にはいって杯を交わして下さい。から諸焼酎をあおった昔を思い出して。

平成十八年五月二十日

空挺部隊靖國神社奉賛会

会長 伊奈源太郎

## 古野一正会員、 銘石を靖國神社に献納

去る五月九日、古野一正会員は、所有されていた群馬県産三波石を、「靖國の石」として神社に献納された。

献納式には、古野会員以下陸士同期の西尾富嶽隊長、新海第62戦隊長の御遺族と、昨年六月、特攻勇士之像副碑建立の際に、古野会員と共に事を進められた落合重温会員が参列された。

石は神社側の希望で、南門を入ると左手に在る手洗場と、道路を挟んだ所

に安置された。昭和三十三年に群馬県が、三波石の採掘を禁止する直前に、古野氏が入手して以来自宅に保存されていた銘石で、これだけの物は他に現存していないのではないかと云う逸品である。

神官の後ろに見える説明板は、樹の蔭になつて見えない「神道無念流 練兵館跡」のものである。この参拝路は、比較的人通りが少ないので、これから靖國神社に参拝される方で、銘石は勿論であるが、併せて立寄られることをお勧め致します。（菅原道熙）



現代の禪者、永平寺の熊沢泰禪師のいう「石徳五訓」

- 一、奇形怪状、無言にしてよく言うものは石なり。
- 二、沈着にして気精永く土中に埋もれて、大地の骨となるものは石なり。
- 三、雨に打たれ、風にさらされ、寒気に耐えて、悠然動ぜざるは石なり。
- 四、堅質にして、大厦高樓の基礎たるの任務を果たすものは石なり。
- 五、黙々として、山岳・庭園などに趣を添え、人心を和らぐは石なり。

（松原泰道禅語百選より）

### 皇后陛下の御歌

今度フランスで御歌が翻訳出版されるという。我が国古来の短歌が、外国語に翻訳されて出版されるのは、すばらしいことだが、情緒を正しく伝えるのは困難なことだと思ふ。

翻訳される御歌のなかには、浩宮様（現皇太子殿下）御誕生の時詠まれた御歌、

あづかれる宝にも似てあるときは  
吾が子ながらかひな畏れつつ抱く  
というのもあると聞く。

一月十二日には宮中で恒例の「歌会始の儀」が行はれ、お題は「笑み」で皇后陛下の御歌は、

笑み交はしやがて涙のわきいづる  
復興なりし街を行きつつ

昨年阪神大震災十周年の行事に出席のため訪れた神戸市内で、お詠みになられたものと承る。

話が遡るが、昨年六月二十七、八日天皇皇后両陛下がサイパン御訪問慰霊なさった折り、バンザイ・クリフでお詠みになった御歌、

いまはとて島果ての崖踏みけり  
をみなの足裏思えばかなし  
更に遡って、平成八年の終戦記念日にお詠みになった御歌、

海陸のいづへを知らず姿なき  
あまたのみ霊国護るらむ

### 全盲の会員

田中 賢一

我が協会には二名の全盲の会員がいる。一人は私の同期生で愛知県に住む井上泰生君で、目が不自由になる以前から会員であったが、だんだん視力が衰え遂に全く視えなくなりました。費は納めている。すでに妻を亡くし娘さん一家と同居しているが、読んでもらっているのか、私は時々会報を録音して送っている。

もう一人は私の遠縁にあたる人で、小学校長の経歴があり盲目になっても向学心に富んでおり、書物を読み取り発声する機械を使っている。私は特攻会報の「特攻隊員とその母」の抜刷を送ったところ、勧めたわけではないのに会員になると電話をよこした。お二人には私は衷心より敬意を表している。

**塙保己一** 江戸時代中期の国学者  
七歳で失明、十四歳で江戸に出て兩富検校に入門し盲人としての修業の傍ら、国学を加茂真淵に学び、四十七歳の時麹町六番町に「和学講談所」を設立、番町で目あきめくらにものを書き、といわれた。

### 図書紹介

53期生会編

『萬世に燦たり十四軍神を憶う』

田中 賢一

この度53期生会では終戦60周年記念事業として主題の本を刊行された。時に適した企画と敬意を表したい。十四軍神とは二階級特進された次の方々である。

江浪康彦・コレヒドール占領の端緒を開く／横崎二郎・北方防衛の盾／尾崎中和・航空戦闘の至宝／金子清市・直協の雄／菅井清・南冥偵察の偉功／瀬戸軫次・橘軍神に続く／富永義夫・雷撃特攻の鬼神／斉藤博・長駆サイパン爆撃の勇士／丸山義正・比島特攻菊水攻撃隊長／小串脩・海上特攻隊長／緒方醇一・阪神防衛に散華／富田薫・歴戦沖繩に散る／奥山道郎・義烈空挺隊長／中島要・七生神雷隊長

又別章を設け個人感状拝受の7柱の列伝と、9度の感状に輝く加藤隼戦闘隊の中核だった同期生にも触れている。以上十四軍神のうち奥山君は一期後輩だが共に陸軍挺進部隊にあって親しい間柄だったので、資料を提供したが、それ以外の方々は全く面識はないが、この本を読み其の時の戦況と軍神の人

柄を知り、深い感銘を覚えた。  
すべて22歳乃至26歳の若者の殉国の記録であることを思えば誠に胸迫る。

現代の若者にぜひ読ませたい。瀬島龍三名誉会長と山本卓真会長の推薦文が光を副えている。諸兄の講読をお勧めする。なほこの本はA5版260頁で、軍神の鮮明な写真と感状が掲載されている。

発売元 展転社

〒113-0033 文京区本郷1-28-36-301

TEL 03-3815-0722

振替01140-6-79992

定価 1,890円(税込)

送料 340円

私が提供した奥山隊長の写真



新入会員

(平成18年4月1日～6月30日)

○山形 土田豊作	○茨城 飯島郁男	神奈川	諏佐道太郎 (18・6)
駒井満男	○栃木 猪瀬 優、平野平	大賀 良平 (18・6)	横森 精文 (18・5)
蔵 ○埼玉 石本 馨、小林茂太、岡	田幹彦、塩脇信明、横山博紀	鈴木 盛雄 (18・5)	星野 善彦 (18・5)
田幹彦、塩脇信明、横山博紀	○千葉	本橋 浩二 (18・5)	浩二 (18・5)
石井政男、鶴澤勝雄、神谷 功、衣笠	富山	森野 正 (18・5)	正 (18・5)
陽雄、窪 洋之右、香西隆士、河野正	石川	辻本 正也 (18・5)	正也 (18・5)
信、鈴木好次、田中 襲、原田平三、	京都	塩見 光三 (18・5)	光三 (18・5)
水野智之、保本敏雄、山本寿夫、山本	広島	安岡 幸義 (18・6)	幸義 (18・6)
英 ○東京 伊勢敬一、岩坪博秀、	徳島	小川 孝子 (18・5)	孝子 (18・5)
内山有友、太田 稔、葛原和三、久保	福岡	武田 巳広 (18・5)	巳広 (18・5)
田 喬、坂本友裕、菅谷直樹、武内博	福岡	高谷 嘉郎 (18・4)	嘉郎 (18・4)
泰、西澤久夫 ○神奈川 伊地知輝行、	寄付者御芳名		
佐藤博志、廣瀬 毅、牧野道子、米			
正七 ○富山 深山 巖 ○静岡 石	(平成十八年四月～六月・単位千円)		
田 一、鈴木義一 ○愛知 權田昭二	一〇 森田 光弥 二 加藤 武樹		
○滋賀 高橋千穂 ○京都 緒方惟隆、	五 富澤 康之 二 北園 豊志		
齊藤隆信 ○大阪 山本 学 ○岡山	二 岩本 末治 二 駒井 満男		
片岡 忠 ○広島 住吉 充 ○福岡	二 植田 弘 二 郷田 豊		
上川智也 ○宮崎 井之上辰夫、多田	二 小野 重典 二 塚越 朝紀		
卯七、中村太吉			

会員計報

謹んで哀悼の意をささげます。

- 北海道 古川 善盛 (18・5)
- 宮城 小山田幸二 (18・5)
- 茨城 川島 満義 (18・5)
- 千葉 中西 弘毅 (18・5)
- 東京 木村 元正 (18・6)



靖國神社(遊就館)から左記二件、

当協会会員への周知方依頼がありました。

一、小中学生へ遊就館の無料開放

期間 自平成18年7月1日

至平成18年8月31日

開館 九時～十七時三〇分(入館は

閉館三〇分前まで)

一、故郷の護國神社展

期間 自平成18年3月1日

至平成19年1月31日

開館 九時～十七時

(入館は閉館三〇分前まで)

拝観料 大人二〇〇円、大学生一〇〇

円、高校生以下無料(常

設展拝観者は無料。常設展

拝観料、大人八〇〇円、大

学生五〇〇円、中・高校生

三〇〇円、小学生一〇〇円)

護國神社の概要

わが国では明治の御代になり、幕末維新の戦役・国事に殉じた方の慰霊祭が各地で行なわれ、招魂社が創建されたのが護國神社の起源である。明治七・八年には内務省達により官費が支給され「官祭招魂社」となり、「招魂社」は之を護國神社と改称す。昭和十四年四月一日施行(昭和十三年内務省告示)に基づき「護國神社」と改称され、内務大臣指定護國神社と指定外護國神社の二種に分類された。大東亜戦争終戦後、護國神社は占領軍の監視、攻撃を受け、存亡の危機に立たされ、「頌徳神社(千葉縣護國神社)」「櫻山神社(茨城縣護國神社)」の如く「護國神社」という社号さえ変更しなければならなかった苦難の時代があった。神職・遺族・崇敬者は必死の覚悟で御社を守り通し、占領解除後社号は「護國神社」と復称し、国民、県民の崇敬は拡まって行った。

旧指定護國神社五十二社は、「靖國神社及び全国の護國神社相互の連絡を緊密にし、祭神の奉斎、祭祀の厳修に万全を期すること」を目的とし「全國護國神社會」を組織している。北海道や岐阜県・兵庫県・広島県・島根県のように一県内に複数存在するところもあるが、建設中に戦災で焼失した神奈川(戦後、建設者慰霊堂が建てられた)や、東京都など、存在しない県もある。

護國神社の祭神は靖國神社から分祀されたのではなく、独自で招魂し祭祀を執り行っているため、靖國神社とは同列の関係であって上下の関係はない。招魂合祀は各護國神社独自で齎行しており、自衛官・警察官・消防官などの公務殉職者を合祀している護國神社もある。